

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』 翻訳と注釈 (1)

中 沢 敦 夫

富山大学人文学部紀要第 76 号抜刷

2022 年 2 月

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈(1)

中 沢 敦 夫

1. 『ノヴゴロド第一年代記』について

『ノヴゴロド第一年代記』（Новгородская первая летопись）は、中世ロシアの地域としてはユニークな政治的役割を果たしたノヴゴロドの歴史を記した年代記である。本年代記の「新編集版」（後述）で記述されている時代は、ルーシの始まりから15世紀40年代までであり、ノヴゴロドにおいて、公（князь）による直接支配とは異なる共和制的政体の、いわゆる「ノヴゴロド共和国」（Новгородская феодальная республика）が存続した期間（通説では1136～1478年）の大部分をカバーしている。本年代記は、この都市国家で展開された活発な政治、軍事、宗教、経済、社会分野の活動について、一年刻みの年代順で出来事を記述しており、ノヴゴロドの歴史を知るための基本的で主要な史料である。

『ノヴゴロド第一年代記』はノヴゴロドで成立した文献で、基本的にはこの地方で起こった事件が編年体で記録されているが、ノヴゴロドのほかのルーシの地に由来する資料も用いて編纂されている。例えば、「新編集版」の冒頭から1074年の記事には『原初年代記』が使っている資料と同じものが使われている。しかしその利用の仕方や資料編集の方針は『原初年代記』と同じではない。また、年代記記事とは性格を異にする『ルーシ法典（簡素版）』（Русская Правда. Краткая редакция）が1016年の項に、『1204年の十字軍による帝都占領物語』（Повесть о взятии Царьграда крестоносцами в 1204 г.）が1204年の項に、『チェルニゴフのミハイル公殺害の物語』（Сказание об убийении Михаила Черниговского）が1245年の項に収録されている。そして、これらの資料の年代記への編入は、特定の時点で一度だけ行われたのではなく、様々な年代記の編集段階で行われている。こうして、何段階もの複雑な編纂作業の積み重ねの結果として、全体としての年代記テキストが成立しているのである。

その意味では、本年代記は基本的な部分ではノヴゴロドについての編年記録資料を使った「書き継ぎ型」の年代記だが、全体としては『原初年代記』『キエフ年代記』『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』と同様に、「集成型」の年代記である¹⁾。そして、このような後代の編者による語句の改変や補筆、他資料からの記事の挿入も含めた編集・集成のプロセスを確かに理解することは、

1) この年代記のタイプ（型）については、中沢敦夫「解説『キエフ年代記』の編集史について：『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(9)『キエフ年代記集成』（1196～1199年）」『富山大学人文学部紀要』（69号、2018年8月）、241-243頁を参照。

『ノヴゴロド第一年代記』の記事を歴史史料として用いるときには必要不可欠な手続きとなる。

そのため、本連載の「翻訳と注釈」では、個別の記事を扱う際にこの年代記の編集・集成の問題を常に考慮に入れ、必要に応じて指摘し、検討することとした。さらに、本連載の最後に付すことを予定している「『ノヴゴロド第一年代記』の編集史について」の解説論文の中で、本年代記の編集・集成の問題を全体的に検討する予定にしている。

2. 『ノヴゴロド第一年代記』の版本と写本およびテキストの刊本について

『ノヴゴロド第一年代記』（Новгородская первая летопись: *HI*）のテキストは、二つの編集版（извод）、すなわち「古編集版」（старший извод）（従来の訳語では「古輯（こしゅう）」）：*HI-C*）と「新編集版」（младший извод）（*HI-M*）に分けて、二種類の独立のテキストとして扱われることが、1950年に校訂本が刊行されて以来研究上の慣例となっている。ここで、中世文献のテキストが、流通过程での筆写や編集によって変化した異本を指す一般的な用語「版・版本」（редакция）としてではなく、「編集版」（извод）として分けられているのは、主に「古編集版」と「新編集版」の成立が時代的に大きく隔たっている（約2世紀の隔りがある）ことによって²⁾。

本号から連載として取り組む『ノヴゴロド第一年代記』の「翻訳と注釈」でも、研究上の慣例に従って二つの編集版を区別し、連載では「新編集版」のテキストを主な対象とした³⁾。しかし当然ながら「古編集版」と「新編集版」のほとんどの部分は共通しており、共通部分の情報量としては「新編集版」のほうが多いながらも、「古編集版」に独自の読みがかなりあることから、「新編集版」テキストの翻訳の際には、「古編集版」における並行的な記事や異読にも注意を払い、訳文や注釈において異同を指摘すると同時に、その由来についても考察することとした。

まず、『ノヴゴロド第一年代記』の写本について簡単に触れておきたい。

『ノヴゴロド第一年代記（古編集版）』の最初期の編集は11世紀中頃まで遡る。ただしその

2) 「編集版」（извод）の用語はテキスト学上は、成立環境の違いによって成立した、相互の継承・派生関係をたどることが難しい言語的（方言的）な異本を指すことが多いが、この場合は時代的な隔りによって成立した異本である。Лихачев Д. С. Текстология. На материале русской литературы X—XVII веков. Л., 1983. С. 139–142 参照。

3) なお「古編集版」のテキストについては雑誌『古代ロシア研究』に連載された邦訳がある。①「ノヴゴロド第一年代記古輯（シノド本）訳・注」『古代ロシア研究』12号、1978年、1-24頁。②「ノヴゴロド第一年代記古輯（シノド本）訳〔II〕」『古代ロシア研究』13号、1980年、25-50頁。③「ノヴゴロド第一年代記古輯（シノド本）訳〔III〕」『古代ロシア研究』15号、1983年、31-83頁。④「ノヴゴロド第一年代記古輯（シノド本）注〔IV〕」『古代ロシア研究』16号、1986年、83-95頁。⑤「ノヴゴロド第一年代記古輯（シノド本）訳〔V〕」『古代ロシア研究』17号、1989年、103-148頁。⑥「ノヴゴロド第一年代記古輯（シノド本）訳〔VI〕」『古代ロシア研究』18号、1991年、26-73頁。

写本としては、「シノド写本」(Синодальный список. ГИМ, Синодальное собрание, № 786) (C.) と呼ばれる⁴⁾、四折(クォート)判型(4°)の羊皮紙写本が唯一現存しているだけである。この写本冊子は部分的に破損しており、最初の16折丁(тетрадь)分(写本冊子で128丁分、頁で換算すると256頁分)が欠損している。「古編集版」は年代記としては6524(1016)年の記事の中ほどの中途半端な記述から始まっていることから、この欠損部分には、「新編集版」にある「序文」から1016年までに対応する記事が記されていたと推定される。さらに、「新編集版」テキストとの対比から、1273年から1298年までの記事がやはり丁の欠損によって失われたと考えられている。

シノド写本は、異なった時代に筆写された大きく二つの部分からなっている。1016～1234年をカバーする古い部分(1丁から118丁まで)は13世紀後半に成立し、1234～1330年をカバーするより新しい部分(119丁から166丁まで)は1330年頃の筆写と推定されている。その後続く散発的な記事(1331-1333, 1337, 1345, 1352年)は筆跡がそれぞれ異なっており、その内容も「新編集版」とはあまり対応していない⁵⁾。

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』の原本(протограф)の成立は15世紀と想定されており、その写本は次の9点が現存している⁶⁾。成立年代、所蔵場所、略号〔()内〕は次の通りであ

4) シノド写本については、河合忠信「ノヴゴロド第一年代記の諸写本」『古代ロシア研究』12号、1978年、11-13頁により詳しい紹介がある。さらに『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』の主要な4点の写本についても紹介されている。

5) Клосс Б. М. Летопись Новгородская первая // Словарь книжников и книжности Древней Руси. Вып. 1. XI – первая половина XIV в. Л., 1987. С. 245 – 247; Клосс Б. М. Предисловие к изданию 2000 г. // Полное собрание русских летописей. М., 2000. Т. 3. С. V – XI. なお、シャフマトフ『11-16世紀の年代記および年代記集成概論』(Обозрение летописей и летописных сводов XI–XVI вв.)の第7章も参照 [Шахматов 1938 (2011): С. 149–157]。

6) 現存の9点の写本の他に、18世紀末に宗務院(シノド)総監を務めたアレクセイ・ムーシン＝プーシキン伯爵が所有し、1812年に焼失した『イーゴリ軍記』のテキストを含む雑纂本(конволют) (いわゆる「ムーシン＝プーシキン文集」(сборник Мусин-Пушкина))の中にも、『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』のテキストが収録されていたことが、1800年に刊行された『イーゴリ軍記』の刊本の序文注釈から推定することができる。Слово о полку Игореве. Ироическая песнь о походе на половцев удельного князя Новгорода-Северского Игоря Святославича, писанная старинным русским языком в исходе XII столетия с переложением на употребляемое ныне наречие. М., 1800. С. VII. さらに本稿「翻訳と注釈」の注2も参照。またこれについては、Лихачев Д. С. О русской летописи, находившейся в одном сборнике со «Словом о полку Игореве» // ТОРДЛ. Л., 1947. Т. V. С. 139–141; Лихачев Д. С. История подготовки к печати рукописи текста «Слова о полку Игореве» в конце XVIII в. // ТОДРЛ. Л., 1957. Т. XIII. С. 66–89. を参照。

る⁷⁾。

- ① 委員会写本 (Комиссионный список) 15 世紀中頃 (СПб. ФИРИ, собр. Археографической комиссии, № 240) (Км.)
- ② アカデミー写本 (Академический список) 15 世紀中頃 (БАН, 17.8.36 (Осн. 153)) (Ак.)
- ③ トロイツキイ写本 (Троицкий список) 16 世紀 60 年代 (РГБ, собр. МДА, № 69) (Тр.)
- ④ ベルリン写本 (Берлинский список) 1738 年 (Staatsbibliothek zu Berlin — Preussischer Kulturbesitz. Handschriftenabteilung Ms. Phill. 1987) (Бр.)
- ⑤ トルストイ写本 (Толстовский список) 18 世紀中頃 (РНБ, ОСРК, F.IV.223) (Тл.)
- ⑥ ウヴァーロフ写本 (Уваровский список) 18 世紀 50 ～ 70 年代 (ГИМ, собр. Уварова, № 34/1402) (Ув.)
- ⑦ ルミヤンツェフ第一写本 (Румянцевский первый список) 1815 年以降 (РГБ, собр. Румянцева, № 247) (Р1.)
- ⑧ ヴォロンツォフ写本 (Воронцовский список) 19 世紀 20 年代 (БАН, 31.7.31 (Воронц. 1090)) (Вр.)
- ⑨ ルミヤンツェフ第二写本 (Румянцевский второй список) 19 世紀 20 年代 (РГБ, собр. Румянцева, № 248) (Р2.)

以上のうち、トルストイ写本、ウヴァーロフ写本、ヴォロンツォフ写本、ルミヤンツェフ第二写本の 4 点は、アカデミー写本からそれぞれの時代に作成された写し (список) である。また、ルミヤンツェフ第一写本はトロイツキイ写本から 19 世紀に筆写された写しである。それゆえ、以上の現存写本 9 点のうち、より古い時期である 15 ～ 16 世紀に成立した 委員会写本⁸⁾、アカ

7) 「新編集版」の写本については次の文献を参考にした。Клосс Б. М. Летопись Новгородская первая // Словарь книжников и книжности Древней Руси. Вып. 1. XI – первая половина XIV в. Л., 1987. С. 245–247; Клосс Б. М. Предисловие к изданию 2000 г. // Полное собрание русских летописей. М., 2000. Т. 3. С. V–XI; Насонов А. Н. Предисловие // Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.; Л., 1950. С. 3–12; Бобров А. Г. Новгородские летописи XV века. СПб., 2001. С. 66–78; Фомина Т. Ю. Новгородское летописание XI–XVII веков. История изучения, итоги, перспективы. Lap Lambert Academic Publishing, 2011. С. 86–106; Майоров А. В. Берлинский список Новгородской первой летописи. Происхождение, владельцы, история изучения // Новгородская первая летопись. Берлинский список. СПб., 2010. С. 11–16. なお、ベルリン写本については、このマイオーロフの著書の С. 66–75 に書誌 (описание) が掲載されている。

8) 委員会写本の他写本との関係については、シャフマトフ『11-16 世紀の年代記および年代記集成概論』(Обозрение летописей и летописных сводов XI–XVI вв.) の第 11 章で詳しく検討されている [Шахматов 1938 (2011): С. 240–279]。

デミー写本⁹⁾、トロイツキイ写本¹⁰⁾の三点が、優先的に依拠すべき主要な写本として検討がなされてきた。

18世紀前半成立のベルリン写本は、近年になってようやく研究が始まった写本である¹¹⁾。この写本の末尾には書き込みがあり、「この冊子本は〈元老院文書館の古い年代記〉から1738年に筆写された」(Сия книга списывана 1738 году с древняго лѣтописца сенатской архивы)という書き込みがある。さらに、この写本については歴史家タティーシチェフ(В. Н. Татищев)が書いた手紙によって、かれの注文によって筆写がなされたことが分かっている。

この〈元老院文書館古年代記〉(Древний летописец Сенатской Архивы)が『ノヴゴロド第一年代記』の現存する写本のいずれかを指しているのか、あるいは逸失したなんらかの古写本を指しているのかについては論争がある。これまで大勢の研究者は、ベルリン写本はアカデミー写本を筆写した転写本(копия)であると見なしてきた。ベルリン写本の筆跡は、16～17世紀に使われていた行書体(полуустав)であり、18世紀の職業的写字生が習得していた草書体(скоропись)ではない。このことは、ベルリン写本の筆写者が行書体で書かれていた古い親写本を、筆跡を含めて丁寧に写し取ろうとした結果と考えられている。そして、実際にアカデミー写本は丁寧な行書体で書かれている。

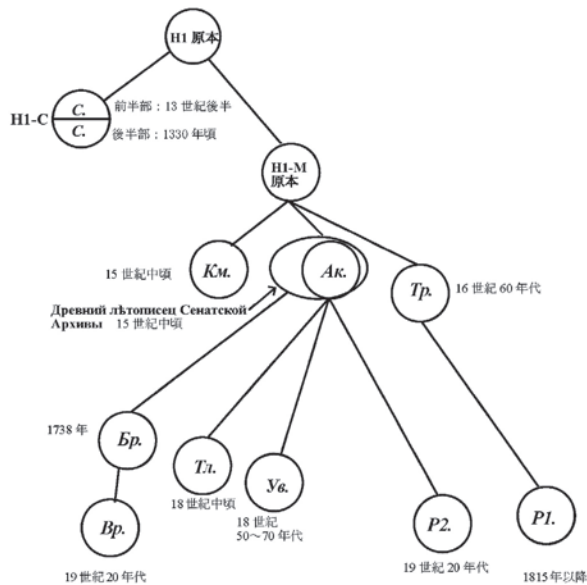
もっとも、ベルリン写本とアカデミー写本とは幾つかの相違点がある。何よりアカデミー写本では冒頭と末尾の記事が欠失しているが、ベルリン写本にはその記事がある。さらに、アカデミー写本(その転写であるトルストイ写本)では明らかに誤記・誤写による読みが、ベルリン写本では文脈に適った正しい読みになっている事例が多い。さらに、ベルリン写本ではアカデミー写本の読みを省略(もしくは縮約)している箇所が目立っている。

これらの相違点について、アカデミー写本の記事の欠失は1738年の筆写以降に起こったものであり、ベルリン写本における訂正や省略は、筆写を注文したタティーシチェフの指示によって行なわれたと考えるのが従来の説となっている。その場合、〈元老院文書館古年代記〉はアカデミー写本が丁(頁)を欠失させる以前の、より完全な状態だったときの写本を指していることになる。しかし、ベルリン写本はアカデミー写本とは別の現存しない古い写本から移された可能性も提唱されており、テキストが公表されて(2010年)からまだ間もないこともあって、これについての定説はない。

9) アカデミー写本については、前掲書第13章が詳しい[Шахматов 1938 (2011): С. 295-307]。

10) トロイツキイ写本については、前掲書第12章が詳しい[Шахматов 1938 (2011): С. 280-294]。

11) ベルリン写本の研究については次の文献を参照した。Майоров А.В. Список Филиппса (Берлинский) Новгородской первой летописи (предварительные итоги изучения) // Древняя Русь: Вопросы медиевистики. 2008. № 2. С. 91-108; Майоров А.В. Берлинский список Новгородской первой летописи. Происхождение, владельцы, история изучения // Новгородская первая летопись. Берлинский список. СПб., 2010. С. 9-48.



以上の検討から『ノヴゴロド第一年代記』の写本の系統関係を図示すると左図のようになる（ベルリン写本については従来の説によった）。これはあくまで現存写本だけの関係を示した図式的な流れであり、実際にはそれぞれの段階で記事の増補や改訂が行われ、さらに写字生が複数の伝本を参照して読みを選択したり、他の年代記を使って修正を行ったりすることは当然考えられる。諸写本の関係については、年代記の編集の問題ともかかわり複雑だが、連載の

「翻訳と注」で個別の読みを検討する際にも、上掲のシャフマトフの研究等を参考にしながら、写本の系統関係を十分に考慮するつもりである。

次に『ノヴゴロド第一年代記』のテキストの刊本について触れておきたい。

本年代記は中世ロシア史の最も古く、最も重要な史料のひとつであることから、そのテキストは 18 世紀以降何度も刊行されてきた。

「古編集版」については、唯一のシノド写本が 13～14 世紀の羊皮紙に書かれた古い冊子として現存していることから、特に注目されており、その校訂テキストは、リプリント版やステレオタイプの再版を除けば、1781 年¹²⁾、1841 年¹³⁾、1888 年¹⁴⁾、1950 年¹⁵⁾と 4 種類が刊行されてい

12) Летописец Новгородский, начинающийся от 6525/1017 году и кончающийся 6860/1352 годом. М., 1781. このステレオタイプ版には Летописец Новгородский, начинающийся от 6525/1017 году и кончающийся 6860/1352 годом М., 1819. がある。

13) Полное собрание русских летописей: IV Новгородские летописи. СПб, 1841. Т.3. С. 1–85. (издание, подготовленное Я. И. Бердниковым)

14) Новгородская летопись по Синодальному харатейному списку. СПб, 1888. (издание, подготовленное П. И. Саввантовым)

15) Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.; Л., 1950. С. 15 – 100. (издание, подготовленное А. Н. Насоновым) この刊本の「古編集版」部分のリプリント版は翻訳に付されたものも含め次の通り。1) Die Erste Novgoroder Chronik nach ihrer ältesten Redaktion (Syn-odalhandschrift) 1016-1333/1352. Edition des altrussischen Textes und Faksimile der Handschrift im Nachdruck. In deutscher Übersetzung herausgegeben und mit einer Einleitung versehen von Joachim Dietze. Leipzig, 1971; 2) Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов // Полное собрание русских летописей. М., 2000. Т. 3; 3) Русские летописи. Т. 10: Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. Рязань, 2001.

る。さらに、シノド写本の影印本（リトグラフ、ファクシミリ）が2種類刊行されている¹⁶⁾。

「新編集版」のテキストについては、様々な写本に拠ったものが18世紀から刊行されている。まず、1786年の刊本はアカデミー写本に全面的に拠っており¹⁷⁾、1841年の刊本では1333年～1444年の記事のテキストがアカデミー写本とトルストイ写本から起こされている¹⁸⁾。また、1888年の刊本には委員会写本の1333年～1436年の記事のテキストがシノド写本の「継続」として収録されている¹⁹⁾。

「新編集版」は、1950年の刊本において初めて諸写本を校合した校訂テキストが公刊された²⁰⁾。ここでは委員会写本を主要写本（正本）として、アカデミー写本、トルストイ写本の読みが異読として対照されている。さらに、ヴォロンツォフ写本²¹⁾とトロイツキイ写本²²⁾については別個にテキストが起こされている。

ベルリン写本はロシア以外の場所に所蔵されていることもあって、本年代記の研究に参照されるようになったのは非常に遅く、2010年になってようやくその影印本（ファクシミリ）が刊行された²³⁾。しかしながら、刊行テキストはまだ発表されておらず、この写本を含んだ校訂テキストの公刊もまだない。

以上の校訂刊本の他に、「古編集版」と「新編集版」との1016～1352年の並行記事を対比した参考書²⁴⁾、「新編集版」と『原初年代記』主要写本との1074年までの並行記事を対比して

16) Новгородская летопись по Синодальному списку — фотолитографическое издание Археографической комиссии 1875 г. М., 1875. (この本のリプリント版には Die Erste Novgoroder Chronik nach ihrer ältesten Redaktion (Synodalhandschrift) 1016-1333/1352... Leipzig, 1971. がある) ;

2) Новгородская харатейная летопись. М., 1964.

17) Новгородский летописец, начинающийся от 946 и продолжающийся до 1441 года // Продолжение Древней российской вивлиофики. СПб, 1786, Ч. 2. (この本のテキストのステレオタイプ版には Новгородский летописец (с 946 до 1441 г.). Мышкин, 1899. がある)

18) Полное собрание русских летописей: IV Новгородские летописи. СПб, 1841. Т.3. С. 86–114.

19) Новгородская летопись по Синодальному харатейному списку. СПб, 1888. С. 330–428.

20) Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.; Л., 1950. С. 103 – 427. (この本のリプリント版は 1) Die Erste Novgoroder Chronik nach ihrer ältesten Redaktion (Synodalhandschrift) 1016-1333/1352... Leipzig, 1971; 2) Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов // Полное собрание русских летописей. М., 2000. Т. 3; 3) Русские летописи. Т. 10: Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. Рязань, 2001. がある。また「古編集版」(古輯)の雑誌連載の邦訳には、本書の該当箇所がリプリントで掲げられている。上注3参照)

21) Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.; Л., 1950. С. 431 – 464. ただし起こされているテキストは部分的である。

22) 前掲書 С. 510 – 561. 写本のテキストがすべて起こされている。

23) Новгородская первая летопись. Берлинский список / Предисловие. А. В. Майорова. СПб., 2010.

24) Никитин А. Л. Текстология русских летописей XI — начала XIV вв. Выпуск 4. Новгородское летописание XII — первой половины XIV в. М., 2011.

一覧できるように編集した参考書²⁵⁾がある。これは新たな校訂テキストではないが、近縁の諸年代記記事との関係を検討する上では大変便利であり、本稿の「翻訳と注釈」の作業で活用した。同様の趣旨で、『原初年代記』諸写本のインターリニア・テキストで、『ノヴゴロド第一年代記』の並行記事も含んでいる参考書²⁶⁾も利用した。

最後に、『ノヴゴロド第一年代記』の現代語訳についてだが、奇妙なことに「古編集版」と「新編集版」とともに、年代記テキスト全体のロシア語、ウクライナ語、ベラルーシ語への翻訳は存在しない。ただし、年代記テキストに含まれている個別の独立性の高い記事（物語）のロシア語訳は幾つか存在する²⁷⁾。外国語訳については、上述の「古編集版」邦訳（上注3参照）の他に、「古編集版」の英訳²⁸⁾、デンマーク語訳²⁹⁾、ドイツ語訳³⁰⁾、ポーランド語訳³¹⁾がある。しかしながら「新編集版」の翻訳は現在にいたるまでなく³²⁾、全体の翻訳は本連載が最初の試みである。これは、「新編集版」のテキストが、『原初年代記』および『ノヴゴロド第一年代記（古編集版）』と重複する部分が多く、独自の記事は1352年～1446年の期間に限られていることから、あえて「新編集版」を翻訳する意義は小さいと見なされていることによっているだろう。

25) Никитин А. Л. Текстология русских летописей (XI — начала XIV вв.) Выпуск 1. Киево-Печерское летописание до 1112 года. М., 2006.

26) The Pověst' vremennykh lēt. An Interlinear Collation and Paradosis. Edited by Donald Ostrowski Vol. 1–3, Harvard Library of Early Ukrainian Literature, Volume X 1–3, 2003.

27) 例えば2020年に完結した文学叢書『古ルーシ文学文庫』（Библиотека литературы Древней Руси / под ред. Д. С. Лихачева, Л. А. Дмитриева, Н. В. Понирко. СПб.: Наука, 1997–2020. Т. 1–20）では第4巻に『ルーシ法典（簡素版）』（Русская Правда. Краткая редакция）の、第5巻には『1204年の十字軍による帝都占領物語』（Повесть о взятии Царьграда крестоносцами в 1204 г.）の『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』所収のテキストとその現代ロシア語訳が収録されている。

28) The Chronicle of Novgorod, 1016—1471 / Transl. from the Russian by R. Michelland N. Forbes, with an intr. by C. R. Beazley and an account of the text by A. A. Shakhmatov. London., 1914. (Second edition with New Introduction by Walter K. Hanak, Academic International. 1970). 底本テキストは1841年の刊本 Полное собрание русских летописей: IV Новгородские летописи. СПб, 1841. Т.3. のC. 1–114のテキストと推定される。

29) Den Forste Novgorod-Kronike: Aldste Affatelse / Oversat af K. Rahbek-Schmidt. Kobenhavn, 1964.

30) Die Erste Novgoroder Chronik nach ihrer ältesten Redaction (Synodalhandschrift) 1016—1330/1352: Edition der altrussischen Textes und Facsimile der Handschrift im Nachdruck / In deutscher Übersetzung herausgegeben und mit einer Einleitung versehen von Joachim Dietze. Leipzig, 1971.

31) Zofia A. Brzozowska, Ivan Petrov. Latopis nowogrodzki pierwszy starszej redakcji. Unikatowy zabytek piśmiennictwa staroruskiego i jego polski przekład. Seria Ceranea. Tom 5. WUL – Uniwersytet Łódzki, 2019.

なお、次のサイトも参照：<http://ki.wfi.uni.lodz.pl/ceraneum/latopis/html/latopis-trans.html>

32) ただし、1914年の英訳（上注28）では「古編集版」（シノド写本）の「継続」として、「新編集版」委員会写本の1353～1446年の記事が訳されている。

3. 『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』の「翻訳と注釈」の方針について

前節で検討した刊本のうち、本「翻訳と注釈」では1950年の刊本の「新編集版」部分の校訂テキストを底本とした³³⁾。底本は上述のように委員会写本(*K_M*)を主要写本(正本)として、アカデミー写本(*A_K*)、トルストイ写本(*T_L*)の読みを異読として校合している。委員会写本を正本とした理由は、現存写本のなかで最も成立年代の古い写本の一つであり、記事の情報量も最も多いという点にある。しかし、この写本は冒頭の丁が欠失しており、本文のテキストにも欠けている箇所がある。そのため、テキストの本来の読みを定めるためには、ほぼ同じ時期に成立したアカデミー写本(これも冒頭と末尾に欠失があるが)の読みも同等の重要性をもつものとして扱う必要がある。

そこで本翻訳では底本の委員会写本を基にしたテキストに拠りながらも、アカデミー写本を始めとする他の写本の異読にも十分に注意を払い、本来の読みに近い読みが異読にあると考えられる場合には、その旨を注釈で指摘して、その根拠を示すこととした。

そのため、近年ようやくファクシミリ版が刊行されたベルリン写本については独自にテキストの文字を起こし、翻訳の際には底本テキストとの異読照合を行って注釈に活用した。さらに、底本では校註(アパルトゥス)に異読が示されていないトロイツキイ写本、ヴォロンツォフ写本の読みについてもできる限り照合を行い、必要な場合には注釈で指摘するようにつとめた。

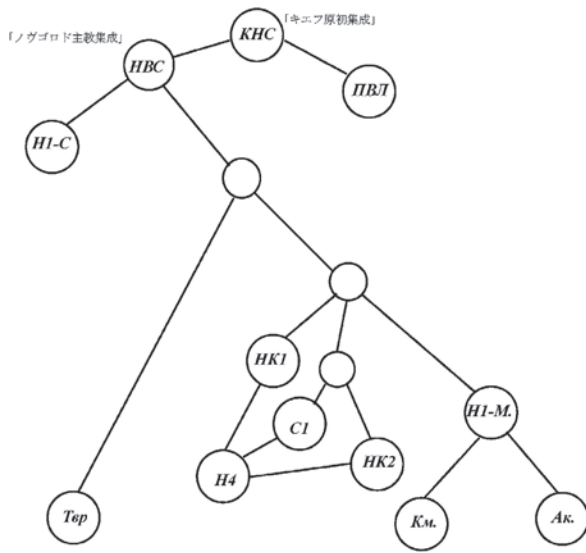
同時にまた、『ノヴゴロド第一年代記』の編集のプロセスにおいて、本年代記が資料を利用したり(もしくは共通資料の利用)、あるいは資料として利用されることによって、並行記事が見出される近縁の諸年代記についても、その記事や読みを適宜参照した。具体的には、『原初年代記』(*ПВЛ*) (およびその諸写本)、『ノヴゴロド・カラムジン年代記』の第一部(*HK1*)と第二部(*HK2*)、『ソフィア第一年代記』(*CI*)、『ノヴゴロド第四年代記』(*H4*)、『トヴェーリ年代記』(*Тер*)である。また、これらの諸年代記の編纂にあたって中間的に作成されたと仮定される年代記集成についても、諸研究に拠って適宜言及した(本稿末の「現存しない仮説的年代記」の項を参照)。本年代記と諸年代記との系統関係を図式的に示すと、次のようになる³⁴⁾。

また翻訳に際しては、上述したような『ノヴゴロド第一年代記』の現代語・外国語訳を³⁵⁾、

33) Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.; Л., 1950. С. 103–427.

34) 本図は、Гимон Т. В. Редактирование летописей в XIII–XV вв.: Разнотечения между списками Новгородской 1 летописи. // Труды Отдела древнерусской литературы. СПб., 2006. Т. 57. С. 119 の図を基に、Бобров А. Г. Новгородские летописи XV века. СПб., 2001. С. 134. 掲載の図を組み合わせ作成した。

35) 1016～1352年の『ノヴゴロド第一年代記』の「新編集版」と「古編集版」の記事が共通している部分については、雑誌『古代ロシア研究』に連載された邦訳(上注3)の訳文と注を参考にする予定である。



さらに『原初年代記』の邦訳をはじめとする翻訳とコメントリーを参考にした³⁶⁾。

本翻訳ではこれまでわれわれが行った年代記の翻訳と注釈の基本的な方針³⁷⁾を踏襲している。

訳文では内容を勘案した段落分けを行っているが、その段落は必ずしも底本と対応していない。また、主に内容と編集上の単位を考慮した区切り（節）を訳文に施し、各節の冒頭には【 】内に記事内容を要約した小見出しを付した。さらに、小見

出しの右側に節の番号を順番に振り、[№]の中に示した。この節番号は、本年代記の別の記事や他の近縁の年代記の並行記事との対応関係を注釈などで参照するための、本翻訳に限った便宜上の番号である。

底本の頁の始まりに対応する訳文の箇所には底本の頁番号を[103]のように示した。また、リユーリク王朝の諸公には公番号を付し、人名・地名の固有名詞や重要な用語については底本の原語を付記して、注釈で解説するようにつとめた。さらに、内容の理解のために訳文の〔 〕内に訳者が説明的補足を行った。

本翻訳の新しい試みとして、「序文」から1015年までの範囲の記事について³⁸⁾、『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』（H1-M）と『原初年代記』（PIB/I）のテキストの対応関係が一目で分かるように、活字フォントを使い分けることとした。

36) 「序文」から1074年までの『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』と『原初年代記』の記事が共通している部分については、國本哲男他訳『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会、1987年の訳文と訳注を大いに参考にした。ただし、人名、地名、事項に関する注釈については、できる限り重複を避けるようにつとめた。なお、多数におよぶ『原初年代記』の現代語・外国語訳とコメントリーについては注釈の中で注記する。

37) 『キエフ年代記』については、中沢敦夫「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(1) — 『原初年代記』への追加記事(1110～1117年)』『富山大学人文学部紀要』(61号、2014年8月)233-240頁を、『ガリチ・ヴォルィニ年代記』については、中沢敦夫、今村栄一「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(10) — 『ガリチ・ヴォルィニ年代記』(1201～1229年)』『富山大学人文学部紀要』(70号、2019年2月)の225-230頁を参照。

38) なお、1016～1074年の範囲の記事については、『ノヴゴロド第一年代記（古編集版）』のテキストとの異同もフォントを使い分けて示す予定だが、これについては当該の連載号で詳述する。

すなわち、『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』と『原初年代記』のテキストが基本的に一致している箇所については、『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』の訳文を〈明朝体〉活字で示し、『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』と『原初年代記』のテキストが一致せず、『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』テキストが独自の読みを示している箇所については、その訳文を〈ゴシック体〉活字で示すこととした。

翻訳と注釈 (1)

【序文】 [№ 1]

[103] ヴレメンニク¹⁾ [年代記] (Временникъ)。これはルーシ諸公とルーシの地の²⁾ (русских князей и земля руская) 年代記³⁾ (лѣтописание) を称したものである。すなわち、[どのようにして] 神がわれらの国 (страна) を、この最後の時にあたって選んだのか⁴⁾。

各地で諸城市が [どのように] 存在するようになったのか。先づノヴゴロドの領地 (волость)

1) 「ヴレメンニク」(временник) はギリシア語 χρονικόν からの翻訳借用 (カルク) で、音訳借用の хроника に対応する。これを表題に掲げ、わざわざ「年代記」(летописание)(χρονογραφία の翻訳借用語) と言い換えて説明するのは、временник の語があまり知られていなかったことによるだろう。実際に中世ロシアでは普及しなかった。この語は、9 世紀のビザンツ年代記『ゲオルギオス・モナコス (ハマルトロス) 年代記』のスラブ訳 Хроника Георгия Амартола (ХГА) に付せられた表題 «Временъникъ о хрестыянскихъ цесарехъ и о Коньстянтинѣ велицѣмъ цесареви» から、序文の著者が借用したであろうことが、本文の構文と語句との類似性 (Временник... русских князей...) から、高い確度で推察できる [Гиппиус 2010: С. 168]。

なお、この「ヴレメンニク」から下注 55 の「イサキオス」までは、完結した一体性があるが年記が伴わない記事であることから、ここで行っている「年代記 (ヴレメンニク)」に付された「序文」(Предисловие) として諸研究では位置付けられている。ただ、これが、具体的にどのような「年代記」(集成) に付されたものかについては諸説がある。ここではひとまず、シャフマトフが 1095 年に成立したと想定した「キエフ原初集成」(КНС) のために書かれた序文であり、それが *Н1-М* のテキストに継承されて、その冒頭に置かれたと考えておくが、詳細については、本稿の連載の最後に付す予定の「『ノヴゴロド第一年代記』の編集史について」の解説論文で詳しく検討する予定である。

2) 「ルーシ諸公とルーシの地の」は底本 (*Тл.*) では князей и земля руския だが、翻訳では *Бр.* および *НК1, Н4* の русских князей и земля руская (*Тр.* は князей русских и земля руская) を採用した。なお、『イーゴリ軍記』のテキストを含み、1812 年に焼失したムーシン＝プーシキン本は、*Н1-М* と推定される年代記のテキストが収録されており、『軍記』初版の序文注釈の写本書誌 (описание) で紹介されているこの年代記の冒頭の文言によって、この部分の読みは *Бр. НК1, Н4* と同じであることが分かる [СПИ 1800: С. VII]。

3) χρονογραφία のスラブ語訳文献やルーシで応用された同時代の文献を指すときには лѣтописецъ が広く使われており、лѣтописание の用例は *ПВЛ* の記事に限られている [Гиппиус 2010: С. 168]。そのうちの二例は、上注 1 に挙げた *ХГА* を参照する文脈での用例である [ПСРЛ Т. 1: Стб. 14, 17]。そのことは、表題を付したときに、このビザンツ年代記 (*ХГА*) の表題が参考にされた (上注 1) ことの傍証にもなる。

4) 「最後の時に」(на послѣднѣе время) はキリスト教歴史観における終末のときを指しており、この序文が創世紀元 6600 年 (西暦 1092 年) に到来するとされていた終末を目前とした環境で書かれたことが推察される。まさにその時期に、神がルーシの国を選んだという、ルーシ人選民イデオロギーは「キエフ原初集成」(*КНС*) の基本主題であり、これにそって題材が選ばれ、記事が構成されている [Гиппиус 2010: С. 169]。

なお「われらの国を」(нашу страну) の страна の語はルーシ初期文献では「他の国々」(иные страны) のような語句の中で通常使われていることから ([Колесов 1986: С. 253])、наша страна の用法は例外的であり、それだけに「ほかの国々ではなく、他ならぬわれらの国」というニュアンスで意味が強調されている。

が、その後キエフの⁵⁾〔領地が存在するようになったのか〕。

キエフの成立⁶⁾について。どのような名に倣ってキエフが名付けられたのか。それは、昔、ロムルス帝⁷⁾ (царь Рим) があり、かれの名に倣って都市ローマ (Римь) が名付けられた様〔と同じ〕である。さらにまた、アンティオコス〔帝〕 (Антиохъ) があり、大アンティオキア (Антиохия Великаа) 〔の都市〕があった⁸⁾。さらにまた、セレウコス〔帝〕 (Селевки) があり、セレウキア (Селевкиа) 〔の都市〕があった⁹⁾。さらにまた、アレクサンドロス〔帝〕 (Александрѣ) があり、アレクサンドリア (Александрия) はかれの名からだった¹⁰⁾。多くの場所でこのように、それらの皇帝や王侯の名に倣って都市が命名されてきたのである。

それに対して¹¹⁾、われらの国でも大いなる都市キエフ¹²⁾はキイ (Киѣ) の名に倣って呼ばれた¹³⁾。

-
- 5) 「先ずノヴゴロドの領地が、その後キエフの〔領地〕」(преже Новгородская волость и потом Киевская) の文言は *НСГ* を含むすべての写本にあるが、序文がキエフのレアリアの中で書かれている中で、これだけがノヴゴロドがキエフに優先することを主張する異質な内容であり、そのため、後年の挿入とする説も出されている。例えばリハチョフは、序文が最初 (1090 年代) に「キエフ原初集成」(*КНС*) の冒頭に書かれたときにはこの文言はまだなかったが、12 世紀の初めに *КНС* の写本がノヴゴロドにもたらされ、大主教庁で書き継ぐ年代記 (*НБС*) の冒頭に序文として流用された際に、ノヴゴロドの成立をキエフに優先させる意図で、この部分に挿入されたと推定している [Лихачев 1948 (1986): С.175]。
- 6) 「成立」は底本 (*Тл.*) では поставление だが、*Тр.* 文章 (*НСГ* 諸年代記は статие) である。意味的に大きな差はないが、後者のほうが本来の読みに近いだろう。
- 7) ここは都市名起源を語っていることから、ローマの伝説上の建国者ロムルス (Romulus) を指している。
- 8) 大アンティオキア (Антиохия Великаа; Ἀντιόχεια ἡ Μεγάλη) は、セレウコス一世 (Селевки; Σέλευκος) (在位 BC 312-281 年) が父のアンティオコス一世 (Антиохъ; Αντίοχος) を記念して各地に建設した都市名「アンティオキア」の中で、シリアにあったもっとも大規模な都市のこと。紀元前 300 年頃の創建とされている。
- 9) セレウキア (Селевкиа; Σελεύκεια, Seleucia) は、セレウコス一世 (前注) が創建したチグリス川河岸にあった都市で、創建者にちなんで命名されている。現在のイラクのバグダード南約 35km に遺構がある。
- 10) マケドニアのアレクサンドロス大王が紀元前 332 年に、自らの名にちなんで創建した都市がアレクサンドリア (Александрия; Ἀλεξάνδρεια) である。
- 11) 「それに対して」は、底本 (*Тл.*) の読み (*Бр.* も同じ) は тако же (それと同様に) だが、*Тр.* および *НСГ* の読みは яко (それに対して) になっている。この文脈は、一連の古代都市は皇帝の名に倣っているが、キエフの場合は「渡し守」の名に倣っていた (下注 12, 13, 15), と理解できるので、類比の接続詞 тако же より、対比の接続詞 яко がより適当 (本来の読みに近い) と判断した ([Гиппиус 2010: С. 171-172] 参照)。
- 12) 「大いなる都市キエフ」は底本 (*Тл.*) では градъ великимъ княземъ だが、他の *Н1-М* 写本 *Бр.*, *Тр.* および *НК1*, *С1* は градъ великий Киев である。*Тл.* の読みは「キイの名に倣って都市は大公によって名づけられた」と強引に訳せるが (國本はそう解釈している [國本 1976: 199-201 頁]), 構文が不自然であり、テキスト学的に裏付けられないことから、*Тл.* は写字生の固有読みと判断して、他の写本・年代記の読みを採用した。
- 13) キエフがキイに倣って創建されたことについては、*ПВЛ* に三兄弟について述べられたあとに и сотвориша градъ во имя брата своего старѣишаго, и нарекоша имя ему Киевъ (自分たちの長兄の名に倣って都市が作られ、それをキエフと名付けた) [ПСРЛ Т, 1: Стб.9] の文言があり (*Н1-М* も同様。下注 62 参照), これに対応している。

かれは、かつて¹⁴⁾ 渡し守 (перевозник) であったと言われている¹⁵⁾。他の者たちは、かれが自分の都市〔キエフ〕の周辺で狩りをしていた¹⁶⁾ [と言っている]。これは、最後の時に¹⁷⁾ 神が顕した大いなる¹⁸⁾ 神慮だった。

昔、異教徒たち¹⁹⁾ が丘の上で²⁰⁾ 悪鬼どもに生贄を捧げていた²¹⁾ その場所には、今は黄金の屋根の石造り²²⁾ の聖なる諸教会が立っている²³⁾。そして、大きな修道院が建立され、それらの中には黒衣の修道士たちが満ちており、祈禱、終夜の祈り、齋戒、涙において〔かれらは〕倦むことなく神を讃

14) 「かつて」の原語は *древле* で、*Тр.* および *НСГ* の読みを採用した。底本 (*Тл.*) は *так*o だが文脈に合わず、上注 12 と同様に誤記によるものだろう。

15) キイが渡し守 (перевозник) だったことについては、*ПВЛ* に *ини же несвѣдуще рекоша, яко Кии есть перевозникъ быль*。(他の物を知らない者たちは「キイは渡し守であったと」言った) [ПСРЛ Т, 1: Стб.9] の文言に対応している。テキストの何らかの関係が考えられる。

16) 「都市の周辺で狩りをしていた」(*ловы дѣяше около города*) は、以下の 854 年の記事の文言 *и бѣше около града лѣсъ и боръ великъ, и бяху ловяща зверь* (〔キエフの〕周りには大きな森と松林があり、獣の狩場があった) (下注 63, 64) に言葉遣いが対応している。

17) 「最後の時に」の *в послѣдняя времена* は *Бр.*, *Тр.* (および *НСГ*) に拠った。底本 (*Тл.*) では *времена* がないが、これは明らかにこの写本における脱落である。

18) 「大いなる」の *великъ* は *Тр.* (および *НСГ*) の読み。底本 (*Тл.*) は *И тако* でどちらの読みも可能だが、*Тл.* の変更・脱落の傾向と *так*o が反復して使われている (上注 11, 14) 不自然さから、*Тр.* の読みを採用した。

19) 「異教徒たち」は *Тл.* *попанин*, *Бр.* *Вр.* *питанин* でともに誤写・誤記によると考えられる。ここでは、*Тр.* および *НК1*, *Н4* の *поганин* の読みを採用した。

20) 「丘の上で」(*на горах*) の丘 (*горы*) は *ПВЛ* や『イーゴリ軍記』など初期ルーシの文献でキエフを指す比喩的な語として頻用されている。

21) 「悪鬼どもに生贄を捧げていた」(*жряху бѣсомъ*) の表現はウラジーミル公 [06] の「異教改革」についての 980 年記事 [№ 74] にもあり (下注 452)、丘陵の上で (*на холмѣ*) の語句もここの *на горах* と類似していることから、序文の筆者はその箇所を参照した可能性もある。

22) 「石造り」(*каменозданный*) は、中世文献における孤語だが容易に理解可能である。格調の高さを求めた作者の造語だろう [Гиппиус 2010: С. 175]。具体的には前注と関連して、980 年の記事 [№ 74] で言及されている、ウラジーミル [06] が建立した「聖ヴァシーリイ教会」(下注 455) を指している可能性もある。

23) 「昔、異教徒たちが丘の上で悪鬼どもに生贄を捧げていたその場所には、今は黄金の屋根の石造りの聖なる諸教会が立っている」(*куда же древле поганин жряху бѣсомъ на горах, нынѣ же паки туды свѣтѣя церкви златѣверхия каменозданныя стоят*) 文言は、下に続く 854 年の記事「〔キエフの人々は〕賢く思慮深い人々で、ポリャネ人と呼ばれた。かれら〔の子孫として〕今にいたるキエフ人がいるが、〔かつて〕かれらは異教徒で、他の異教徒と同じく、湖や泉や林に生贄を捧げていた」(*И бѣша мужи мудри и смыслѣнѣ, нарѣчахся поляне, и до сего дне от них же суть кыянѣ; бяху же поганѣ, жруще озером и кладзем и рощениемъ, якоже прочии погани*) の部分と、内容や過去と現在 (順番は異なるが) の対比の表現法において類似している (下注 70)。この文言は、この記事を参照して書かれた可能性が大きい。その場合、「異教徒」はポリャネ人を指すことになる。

美していた²⁴⁾。かれらの祈禱のおかげで平和が成り立っているのである。もし誰かが聖なる教会に²⁵⁾寄りすがらば、その者は、魂にとっても肉体にとっても、大いなる利益を得ることであろう。

われらは先の続きに戻ろう²⁶⁾。〔先の〕通りに、ルーシの地の始まり²⁷⁾について、諸公について、それ〔ルーシの地と諸公〕がどのようにあった、どこから〔来た〕のか²⁸⁾を語ることによって。

キリストの群れたちよ、わたしはあなたがたに懇願する。愛をもって [104] あなたがたの耳を賢明に傾けなさい。

どのように昔の諸公およびその家臣たちがあったのか、どのように〔諸公は〕ルーシの地を防

24) 「祈禱，終夜の祈り，斎戒，涙のなかで倦むことなく神を讃美していた」(безпрестани славяще Бога в молитвахъ, въ бдѣнии, в постѣ и в слезахъ) は、構文的には *ПВЛ* に収録されているウラジーミル聖公への讃詞 ...поминающе святое крещение, и прославляютъ Бога, в молитвахъ, и в пѣсняхъ и въ псалмѣхъ поюще Господеву... (〔ルーシの人々は〕、主のために唱う祈りと歌と詩篇の中で神を讃え) [ПСРЛ Т. 1: Стб. 131] と類似である [Гиппиус 2010: С. 175]。

25) 「もし誰かが聖なる教会に」底本 (*Тл.*) の原文 *Аще бо къ святымъ сыи прибѣгнемъ...* は、*сыи* が文法的に整合しないため、シャフマトフは再構成テキストで *сыи* を *симъ* に読み替える解釈を行っており、本翻訳もこれに拠った [Шахматов 1916 (2003): С.938]。なお、ギツピウスは、ロストフ主教レオンチイの訓話の類似表現を参照して、*Аще бо къ(то, въ бѣдѣ) сыи, къ святымъ...* (もし誰か災いにある者が聖なる教会に) という、欠落箇所を補正した訂正読みを提案している [Гиппиус 2010: С. 164]。

26) 「先の続きに戻ろう」(на послѣдование возвратимся) は初期年代記にある編集者の言葉の定型句。ここでは、上注 4 の表題にあたる個所に戻って、ルーシの地とその諸公 (русских князей и земля руская) について話そうということ。

27) 「ルーシの地の始まり」(начало русьския земля) の句はこの「序文」の末尾 (下注 53) とその直後の 6362(854) 年の年紀の後 (下注 57) と、ここを含めて 3 回繰り返されているが、これを述べるのがまさに *КНС* の中心主題であることが分かる。また、「～の始まり」のように統治の代替わりを表題で明示するのは、*НІ-М* 編者に特徴的な手法である。

28) ルーシの地と諸公が「どのようにあった、どこから〔来た〕のか」(како, откуда быша) の句は、ビザンツの年代記文学の表題句の定型 «πῶς καὶ πόθεν ἦρξαντο» に対応しており (ほぼ直訳)、例えば『セルビア版アレクサンドロス物語』(Сербская Александрия) の表題には ...Александра великаго царя македонскаго, *како и откуда бысть...* という文言がある [БЛДР Т. 8: С. 14] [Гиппиус 2010: С. 176]。これはまた、*ПВЛ* 冒頭の表題にあたる *откуда есть пошла руская земля, кто въ Киевѣ нача первѣе княжити и откуда руская земля стала есть* (どこからルーシの地が来たか、だれがキエフで最初に公として支配を始めたか、どこからルーシの地は成立したか) [ПСРЛ Т. 1: Стб.9] の文言に、内容と言葉遣いにおいて対応している。

衛し、ほかの国々を自らの下に従えていった²⁹⁾のか³⁰⁾。なぜなら、これらの〔昔の〕諸公は多くの財産を集めたり、人命金(вира)や過料(продажа)³¹⁾をでっちあげて人々に課すことはなく³²⁾、正当な人命金を課した場合には、〔諸公は〕それを徴収すると、武器〔調達〕のために従士たちに与えていたのである³³⁾。そして、かれ〔公〕の従士たちは、ほかの国々を掠奪し、戦うことで自らを養っていた。〔そして〕こう言っていた。「兄弟たちよ³⁴⁾、自分たちの公とルーシの地のために力を尽く

29) 「従えていった」の原文は、底本(Тл.) *придаху* では意味が通らないので、*Бр. Вр.* の読み *прияху* (*Тр. приимаху* もこれに近い) に拠った。

30) シャフマトフは、この「どのように〔諸公は〕ルーシの地を選び取り、ほかの国々を自らの下に従えていったのか」(и како отбараху Руския землѣ, и ины страны придаху под ся)の文言が、*ПВЛ* の1097年の記事の文言 *...землю нашу, иже бѣша стяжали отци ваши и дѣди ваши трудом великим и храбрѣствомъ, побарающе по Русьскѣи земли, ины земли приискываху*, (あなたの父たちとあなたの祖父たちが大変な苦勞と勇敢さによってルーシの地を戦い取り、他の地を併合して来た) [ПСРЛ Т. 1: Стб. 264] と語彙と構文が類似していることを指摘し [Шахматов 1909 (2003): С. 387–388], 「序文」のこの表現は、*ПВЛ* のこの部分を借用した上の改変と解釈している。

31) 「人命金」(вира)と「過料」(продажа)は、公が支配下にある地の犯罪者から徴収する罰金のことで、『ルーシ法典』の中で個別の事例と額が規定されている。「人命金」は、殺人の場合に適用される高額(被害者の職階に応じて12～80グリヴナ)な罰金で、特別な徴収人が任命されていた。「過料」は傷害や盗難などの場合に、損害賠償や名誉棄損料とは別に、公に対して支払う12グリヴナ以下の一種の制裁金のこと。これは裁判手数料の性格もあり、公にとっては大きな収入源だった。[Горский 2019: С. 48–52, 280–281]

32) 「でっちあげた」(творимые)とは、不正な手段で罰金を課すということで、現在の諸公に対する間接的に批判になっている。なお、*ПВЛ* の1093年の記事に、フセヴォロド・ヤロスラヴィチ公[D]が病気になる、配下の従卒たちが「人々から強奪し、〔不当な〕過料の取り立てをし始めた」(начаша ти унии грабити люди и продавати) [ПСРЛ Т. 1: Стб. 217] という記事があり、さらにフセヴォロドを継承して同年にキエフ公となったスヴァトボルク公[B3]の家臣が、公に対して「われらの地は戦争と過料によって疲弊してしまっています」(наша земля оскудела есть от рати и от продажъ) [ПСРЛ Т. 1: Стб. 218] という場面があり、内容的に対応している。

33) これについては、*ПВЛ* 996年の記事に、ウラジーミル聖公が家臣の諫言を受けて、再び死刑を廃止し、人命金復活を決めるエピソードがある。「ウラジーミルは人命金を廃止し、盗賊を処刑し始めた。すると、主教や長老たちがこう言った。『戦争が多いです。もしも、人命金を取れば、われらは武器や馬のために使えます』」(Володимерь же отвергъ виры, нача казнити разбоинники, и рѣша епископи и старци: «рать многа; оже вира, то на оружьи и на коних будимъ»). [ПСРЛ Т. 1: Стб. 127]。ここからも、人命金は武器や馬の調達の資金源になっていたことがわかる。

34) 「兄弟たちよ」(братие)の呼びかけは、明らかに公に仕える従士たち(дружинники)に向けられたもの。以下にもこの呼びかけが繰り返されている(下注45)。

そうではないか」。「従士たちは」「公よ、わたしにとって 200 グリヴナ³⁵⁾ は少ない」などと欲張らなかつた³⁶⁾。かれらは、自分の女〔妻〕たちに金の腕輪³⁷⁾を着けさせることはなく、かれらの女〔妻〕たちは銀の〔腕輪〕を着けて歩きまわり、ルーシの地を豊かに満たしていった³⁸⁾のである。

〔それに対して〕、われらの貪欲さ³⁹⁾(несытость) ゆえに、神はわれらに異教徒ども⁴⁰⁾を引き入れ、われらの財貨、われらの村、そして財産がかれら〔異教徒〕のものになった。一方、われらは自

35) 「200 グリヴナ」はすべての写本で двусотъ/200 (д の文字による数表記)だが、この額は、公が所領配置替や勤務替えなどの代償として受け取る水準の額であり(ПВЛ 1100 年記事のウヴェチ諸公会議での約定額や『キエフ年代記』1146 年記事のイヴァン・ヴェルラドニクの勤務に対する報酬が 200 ループリである)、従士が受ける報酬としては高額すぎて、「少ない」と言うのは実態にあわない。この個所の解釈は困難なため、注釈者たちの意見が分かれている。HI-M 元本でも 200 だったことは全写本に異同がないことから明らかだが、元本における誤記を仮定して、たとえば、сотъ が誤って挿入された「2 グリヴナ」(двусотъ гривен)に訂正すれば、合理的な解釈が可能である。12 世紀の白樺文書には、従士への報酬が 2.5 グリヴナ(おそらく月額)という記録があることから(№788)、2 グリヴナは標準か少な目の額ということになる。なお、А・ギッピウスは文字表記の数字、д (70) もしくは в (5) が書写誤記された可能性を提案している [Гиппиус 2010: С. 184]。

36) 「欲張らなかつた」の底本(Тл.)は глаголюще(言っていた)だが前注に見るように、これでは以下の内容と論理的に不整合になる。Тр. женяху(結婚させた?)と НСГ の諸写本 ждану(待っていた)の読みは意味が通らない。そこでここでは、Тер の не жадааху(欲張らなかつた)を採用した。前注の訂正読みを採用すれば文脈がなんとか整合になる。

37) 「腕輪」の原語 обручъ は輪形をしてはめる装飾品を指し、指輪やネックレス(首輪)の可能性もある。質素であることを強調する文脈なので指輪かもしれない。

38) 公(князь)のあるべき姿は、その支配する地(земля)を豊かに満たす(расплодити)することとする理念は、「序文」の著者の重要な思想である(下注 215 参照)。

39) このような文脈での常套句は「われらの罪ゆえに」(за наш грех)だが、ここでは「貪欲さ」(несытость)という珍しい語が用いられている。「序文」の著者の強い問題意識のあらわれだろう。これは、『キエフ洞窟修道院聖者伝』(Киево-Печерский петерик)の中の、スヴァトボルク・イジャスラヴィチ公[B3]とのエピソードの一節に並行箇所がある。Си слышавъ, князь стыдѣвся о створеннем, и шед в монастырь къ игумену Иоанну, покася к нему. Бѣ бо прежде вражду имѣа на нь, зане обличаше его несытъства ради, богатства и насилия ради.[БЛДР Т. 4: С.432] ([スヴァトボルク]公はこれを聞いて、[自分が]成したことを恥じて、修道院の典院イオアンのもとに行き、かれに悔い改めをなした。なぜなら、以前にかれを敵視していたからである。と言うのも、[イオアンは]かれ[スヴァトボルク公]をその貪欲さゆえに、富と暴力のゆえに告発していたからである。)。ここでは、「序文」の鍵となる重要語彙 несытовство (貪欲)、богатство (富)、насилъе (暴力)がやはり用いられており、公の貪欲さを強く告発している点で、本文との類似性は高く、著者はこの一節を参照した可能性もある。

40) この「異教徒ども」(поганья)が何を指すかは、この「序文」成立の時期、動機、背景とかかわる重要な問題である。КНС の成立をシャフマトフ説に拠って 1095 年頃とすれば、ПВЛ の 1093 年の記事に詳しく記述され、訓話も付されているボロヴェツ人との戦闘における、キエフ公スヴァトボルク[B3]をはじめとするルーシ諸公軍の敗北を指すだろう。他に、これを 13 世紀半ばのモンゴル・タタール人によるルーシ襲来と征服を指すという異説もある。

分たちの悪しき行い⁴¹⁾を止めようとしていない。なぜなら、「不正義によって蓄えられた富は吹き散らされる」⁴²⁾と〔聖書に〕書かれているからである。また、「蓄えて、誰のために蓄えるかを知らない」⁴³⁾からである。また、「義人が持つことの少なきは、罪びとの多くの富にまさる」⁴⁴⁾からである。

さあ、わが愛する兄弟たちよ⁴⁵⁾、これからわれらは、自らの貪欲を止めようではないか。そして、あなたがたは、あなたがたの規定額⁴⁶⁾ (уро́кы) で満足せよ。パウロが次のように書いているように。「すなわち、税 (дань) を納めるべき人には税を納め、貢 (урок) を納めるべき人には貢を納めなさい⁴⁷⁾」。

誰に対しても暴力 (наси́лье) を行使してはならず、慈しみに彩られ、巡礼を愛する心が盛り⁴⁸⁾、神への畏れと正しい信仰によって自分の救いを達しなさい⁴⁹⁾。われらは此处で善く生きられ

41) 「悪しき行い」злыхъ дѣлъは底本 (Тл.) および Бр. の読みで, Тр. злобъ, С1 злыхъ, НК1 злѣи となっている。おそらく、この順で後にいくほど本来の読みに近く、底本は後年の編者による解釈読みだろう (Гиппиус 2010: С. 186] 参照)。

42) 『ヨブ記』20:15 богатство несправедно собираемо изблюдется (「呑み込んだ富は吐き出さなければならぬ」(新共同訳) からの引用。原典は神に逆らう者の運命について語る言葉である。

43) 『詩編』38:7 からの引用。「だれの手に渡るとも知らずに積み上げる」(新共同訳)。

44) 『詩編』36:16 からの文字通りの引用。「主に従う人が持っている物は僅かでも、主に逆らう者、権力ある者の富にまさる」(新共同訳)

45) 「わが愛する兄弟たちよ」(братия моя возлюбленная) は従士たちに向けられたもの (上注 34)。

なお、この箇所までの写本 1 丁分は Км. の丁が欠失してテキストがないため、底本は Тл. の読みを採っていたが、ここからは、底本は Км. を基本写本 [正本] (основной список) としている。

46) 「規定額」(уро́кы) とは「人命金」「過料」(上注 31) と同列の法律用語で、『ルーシ法典』(簡素版) では 舗道職人 (мостник), 人命金徴収人 (вирник) に対する報酬の、同拡大版では裁判における警務官 (мечник) や従卒 (дѣтский) への報酬の「規定額」が定められている。公が従士たちに与える給与についての規定額も、白樺文書史料などからおそらく存在したと推定され (上注 35)、ここではそのことを言っている。

47) 新約『ローマ人への手紙』13:7, е́муже убо урок, урок, е́муже дань, дань. (「貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め」新共同訳) からの引用。ただし、本文では、税 (дань) を貢 (урок) の前に持ってきている。聖書の「貢」(урок, фо́рос) と前注の「規定額」(уро́кы) は、原文では同じ語だが、概念が異なることは言うまでもない。

48) 「慈しみに彩られ、巡礼を愛する心が盛り」(милостинею оцвѣтуще, страннолюбиемъ...) の語句は、ルーシの訓話文献で使われる常套句だが、ここでは構文が不自然である。他文献の類例から推察すると、例えば свѣтятся, процвѣтуще などの語が句末にあり、脱落した可能性もある [Гиппиус 2010: С. 161–163]。

49) 「神への畏れと正しい信仰によって自分の救いを達しなさい」(въ страѣ Божии и правове́рии свое спасение сдѣлаючи) は、新約『ピリピ人への手紙』2:12 の, со страхом и трепетом свое спасение содевайте (恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい) を改変した引用。

ば、彼処で永遠の生命に与ることだろう⁵⁰⁾。⁵¹⁾ これらのことはその〔以上の〕とおりである。⁵²⁾

われらはルーシの地の始まり⁵³⁾ から、この年まで、すべて順番に確実なことを話そう。ミカエル帝⁵⁴⁾ (Михаил цесарь) から〔始まり〕、アレクサンドロス (Александр) とイサキオス (Исакий) まで⁵⁵⁾。

50) 「彼処で永遠の生命に与ることだろう」(тамо вѣчнѣи жизни причастьници будемъ)の文言は、聖体礼儀の聖体拝領(причащение)のときに司祭が唱える言葉 и сподоби мя... о причаститися Пречистых Твоих Таинств, во оставление грехов и в жизнь вечную(機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るを致させ給たまえ)に類似している。また、11世紀の洞窟修道院典院フェオドーシイの訓話の中にも類似の表現がある。Потщание имѣйте, ...и жизни вѣчнѣи причастници будете о Христѣ Исусѣ, Господѣ нашем。(勤めよ(...)そしてあなたたちはイエス・キリスト、われらが主において永遠の命に与る者となれ)[БЛДР Т. 1: С. 444]。これは中世の著述家にはよく知られた常套句だったのである。

51) 『トヴェーリ年代記』(Тер)の並行記事では、この個所に съ всеми светло пострадавшими и венчавшимися, ихже хошемъ подвиги и борения въспомнати, творящихъ правду въ всяко время. Злыхъ же властолюбцевъ и братоненавидцевъ нрава да отбегнемъ, ихже огнь ождаа въ веки не въздремлетъ。(すべての苦しみの末に、光明に満ちて冠を受けた者たちとともに。われらは、かれらの功行と戦いを肝に銘じたい。かれらはいつの時にあっても正義を行ったのである。どうか、われらは悪しき権勢家や兄弟を憎む者たちたちから離れよう。かれらの火はいくら待っても、永遠に鎮まることはない)の長い文言の挿入がある[ПСРЛ Т. 15: Стб. 28]。これは文脈の繋がりが不自然であり、Терの写本の個別読みであることから、後年のこの写本における挿入である可能性が大きい。

52) 『トヴェーリ年代記』(Тер)ではこの個所に、上注51に対応する文言として、вся оставльшие, къ преждепомянутой повести възвратимся(すべてはひとまず措いて、最初に語った物語に戻ろう)[ПСРЛ Т. 15: Стб. 28]が挿入されている。

53) 「ルーシの地の始まりから」(от начала рускы земля)については、上注27、下注57を参照。

54) 「ミカエル帝」(Михаил цесарь)が、ビザンツ皇帝ミカエル三世酪酊帝(メスィソス)(Μιχαήλ Γ' ο Μέθυστος)(在位842-867年)であることは、これに続く6352(854)の記事およびПВЛもこの皇帝をルーシの地の記事の始まりとしている[ПСРЛ Т.1: Стб. 17]ことから明らかである。

55) この「アレクサンドロス(Александр)とイサキオス(Исакий)」はビザンツ皇帝の名であることは確かである。だが、誰を指しているかについては、「この年まで」(до сего лѣта)に対応していることから、「序文」の著者と同時代の皇帝と考えられ、序文の成立年代および、この序文が付された年代記集成の記述範囲を定める上でも重要である。

この二人について、ボゴージンは、最初期版のHIは1204年の記事までだったと想定して、この年の記事「十字軍の帝都占領物語」に登場する、アレクシオス四世アングロス(Αλέξιος Δ' Ἀγγελος)(在位1203-1204年)とその父親イサキオス二世アングロス(Ισαάκιος Β' Ἀγγελος)(在位1203年)に比定している。その場合、「序文」は13世紀初めにノヴゴロドで書かれ、この時期までの記事を含む年代記集成に付されたことになる。リハチョフもまたこの立場をとっている[Лихачев 1946(1986): С. 174, прим. 57]。最初の皇帝の名が対応しないことについては、АлександрはАлексииの誤写だと判断し、その根拠をТр.のОлексiiの読みに求めている。

他方、シャフマトフは、歴史学および史料学的論拠を挙げてこの説を斥け、二人をアレクシオス一世コムネノス(Αλέξιος Α' Κομνηνός)(在位1081-1118年)とその兄のイサキオス=セヴァストクラトル(Ισαάκιος Κομνηνός σεβαστοκράτωρ)に比定しており、名の不对応についてはボゴージン説を承認している[Шахматов 1909(2003): С. 389-394]。その場合、「序文」の成立は1100年前後になり、かれが想定した1093-95年成立のKHCの編集の際にその序文として書かれたことになる。

6362(854) 年⁵⁶⁾。

【キエフの創建】 [№ 2]

ルーシの地の始まり⁵⁷⁾。

それぞれが自らの氏族とともにみずからの料地 (места) や国 (страны) に⁵⁸⁾ 住んでおり、それぞれが自分の氏族を支配していた⁵⁹⁾。

そして、三人の兄弟がいた。ひとり名がキイ (Ки́и) で、第二〔の兄弟〕は名がシチェク (Щек) で、第三〔の兄弟〕は[105]名がホリフ (Хоривъ) で、かれらの姉妹はルイベヂ (Лыбедь) だった。いまボリチェフの坂⁶⁰⁾ (увоз Боричевъ) がある丘に (на горѣ) キイが座し、自分の氏族とともにいた。また、かれの兄弟シチェクは二番目の丘に〔座して〕、それはかれにちなんでシチェコヴィツァ (Щековица) と呼ばれた⁶¹⁾。また三番目のホリフ〔も丘に座し、それは〕かれにちなんでホリヴィツァ (Хоривица) と呼ばれた。

そして自分たちの最年長の兄弟〔キイ〕の名にちなんで城砦 (градо́к) をつくり、その名をキ

56) *HI-M* はここから記年が始まるが、6362 年の記事は量が多く、*ПВЛ* の対応部分に付された年紀と比べるときわめて大雑把である。また、なぜ 6362(854) 年が最初の年に選ばれたのかについて、年代記には説明がない (なお *ПВЛ* の編者は、記年が始まる最初の年 6360(852) 年の記事でその理由を詳しく説明している)。

6362(854) の年紀については、シャフマトフによれば、記事中にあるミカエル帝統治 [№ 3] およびルーシ人の帝都襲来 [№ 4] の年を基準にしている。すなわち、*КНС* 編者が典拠としたビザンツ年代記 (ここでは *ХрВН*) に「テオファネス帝の後にその息子ミカエルが統治した (...) この治世の二年目にブルガリアの地が洗礼を受けた。そして、哲人キリロスとメトデオスが 6363 年、ブルガリアのボリス公のときに書物をギリシア語からスラブの言葉に訳した」という記述があり、この文脈から 6363 年をブルガリア洗礼の年と理解して、ミカエル帝即位は 6362 年と算出されたのだと推定できるという [Творогов 1976: С. 9]。

57) 「ルーシの地の始まり」 (Начало земли рускои) の句は、「序文」で二回使われている同様の句 (上注 27, 53) に対応している。このように統治の始まりを明示するのは *HI-M* 編者の特徴的な手法である (下注 384, 388, 402 を参照)。

58) ここは並行記事 (次注) に異同があり、*Лвр. Ин.* на своихъ мѣстѣх; *Км.* на своихъ мѣтех и странахъ; *Бр., Тр.* на своихъ странахъ となっている。страна (国) の語は「序文」に 4 回使われており、2 回は наша страна (自分の国) という句で用いられている。これはこの著者が好んだ語であることから、*HI-M* の読みは二次的で、著者による挿入もしくは言い換えによるものである可能性が大きい。

59) この段落とそれ以下は *ПВЛ* にほぼ同じ並行記事がある [ПСРЛ Т.1: Стб. 9]。ただし、動詞 живяху は *HI-M* の文脈では主語が不明なのに対して、*ПВЛ* ではポリャネ人 (поляне) が主語であることは明白である。

60) 「ボリチェフの坂」 (увоз Боричевъ) は、キエフの中心の丘 (Гора) と下町 (Подол) を結ぶ坂で、現在のアンドレイ坂 (Андріївський узвіз) に相当する。この坂の名は『イーゴリ軍記』にも言及がある [Словарь-справочник СПИ Вып. 1: С. 62]。なお、キイの丘 (гора) は、坂を登り切ったところの、現在のウクライナ歴史博物館 (十分の一税教会遺構) の一帯ということになるだろう。

61) 「かれにちなんでシチェコヴィツァと呼ばれた」 (от него же прозвася Щековица) は、*ПВЛ: Ин.* では кдѣ нынѣ зовется Щековица、(そこは今シチェコヴィツァと呼ばれている) と異同がある。*HI-M* の読みは、「今」 (нынѣ) のリアリティをもはや持たない著者 (編者) による削除・改変である可能性が大きい。

エフと名付けた⁶²⁾。それらの周り⁶³⁾には大きな森と松林があり、獣の狩場⁶⁴⁾(ловища)があった。

賢明で思慮深い⁶⁵⁾ 男たち(мужи)があり、ポリャネ人⁶⁶⁾(поляне)と称していた。かれらから今日に至るまで⁶⁷⁾ キエフ人⁶⁸⁾ がきている〔由来している〕⁶⁹⁾。

かれらは異教徒で、湖や泉や林に生贄を捧げていた。他の異教徒と同じように⁷⁰⁾。

【ビザンツ皇帝ミカエルと母后エイレネ（テオドラ）による聖像崇敬の回復】[№ 3]

その当時、ギリシアの地ではミカエル(Михаиль)という名の皇帝とかれの母エイレネ(Ирина)がおり⁷¹⁾,

62) キエフがキイに倣って創建されたことについては序文に記述がある（上注 13）。

63) 「それらの周り」(около их)の их は文脈上は丘(горы)とも解釈できるが、位置が離れ過ぎている。*ПВЛ* 並行記事は *Лер. около града, Ип. около города* (城砦の周り) で意味は明白あることから、их は града を不器用に改変したものではないか。なお、この表現については上注 16 も参照。

64) 「狩場」(ловища) は、以下のルーシのキエフ公の支配についての記述からも分かるように（下注 240）、支配公の原住民に対する支配や権力行使を象徴する意味を持っていた。

65) 「賢明で思慮深い」(мудри и смысленъ) の句は以下のオリガの性格付けにも使われている（下注 136 参照）。

66) 「ポリャネ人」(поляне) は、ドニエブル川右岸のキエフを中心とした平地(поле)に居住した東スラブ人の部族で、「平地の人」の意。9 世紀にキエフにルーシ人が拠点を置き、公の支配を受けるようになってからは、ルーシの国の形成に主要な役割を果たした。

67) 「今日に至るまで」(до сего дни) の句は構文的に無理があり挿入と考えられる。この挿入は、シャフマトフが仮定している「キエフ最古集成 1039 年」(*Древнейший Киевский свод 1039 г.: ДКС*) の編集の際に、すなわち 1039 年頃になされたと考えるのが最も妥当ではないか（下注 397 参照）。

68) 「かれらから今日に至るまでキエフ人がきている」(до сего дне от них же суть кыянѣ) の「キエフ人」の読みは *Км.* に拠っている。この кыянѣ は写本によって異読があり、*Тл. нынѣ поляне, Бр. кыянѣ полянѣ, Тр. Києви полянѣ* さらに、*ПВЛ: Ип* поляне кыяне となっているが、文脈的に無理がない *Км.* の読みを採用した。

69) これ以降、*ПВЛ* ではポリャネ人についての記述が続くが、*Н1-М* には対応箇所がなく、[№ 5] の「これらの年の後」(下注 81) の文言からキエフについての記述が復活し、再び *ПВЛ* のテキストと対応する。

70) この段落の文言と「序文」の表現との対応については、上注 23 を参照。なお、「湖や泉や林に生贄を捧げていた」(жруще озером и кладязем и рощениемъ) は、以下の *Н1-М* (*ПВЛ* も同様) 986 年の記事の、神学者による旧約の解説の記述の中にある по диаволу научению ови рощениемъ вѣроваша и кладяземъ и рѣкамъ, и не познаша Бога. (ある者は悪魔の教えによって、茂みや泉や川に生贄を献げ、神を知りませんでした) [ПСРЛ Т. 3: С. 137][ПСРЛ Т. 1: Стб. 91] に内容と語彙が類似している。

なお、この文言は *Н1-М* 編者による挿入だが、「異教徒」(погани) の語の繰り返しなどを見ると、この挿入には編者のキエフに対する反感が反映しているかもしれない。

71) ミカエル帝（上注 54）の母親はテオフィロス帝（在位 829-842 年）の妃テオドラ(Θεοδώρα)で、夫の死後摂政となり（在位 842-856 年）そのイコン擁護の政策を継承し、843 年のコンスタンティノポリス公会議において正式にイコン崇敬が承認された。この段落の記事は、*ХрВН* を典拠資料としていることは疑いないが、ミカエル帝の母の名が資料ではテオドラ(с матерію Феодорою)だが、ここでは「エイレネ」(Ирина)になっているのは、コンスタンティノス六世（在位 780-797 年）の母で、女帝として 787 年の第 2 ニカイア公会議でやはりイコン崇敬を確認したエイレネ(Εἰρήνη)（在位 797-802 年）と著者が混同したものでしょう [Творогов 1976a: С. 11-12]。

かれらは〔大〕斎の第一日曜日に聖像画に拝礼することを宣べ伝えている⁷²⁾。

【ルーシ人の帝都襲撃と聖母の衣の奇蹟】 [№ 4]

その時、ルーシ人は帝都⁷³⁾ (Царьград) を攻めるべく船で到来した⁷⁴⁾。船は無数だった⁷⁵⁾。そして、200 隻がスード (Суд)⁷⁶⁾ の中に侵入し、ギリシア人⁷⁷⁾ に多くの悪事をなし⁷⁸⁾、大いなる殺人をキリスト教徒に対して行った。皇帝は総主教フォティオス⁷⁹⁾ (Фотій) とともにブラケルナイ (Влахернѣ) の聖なる聖母教会で夜を徹して特別祈禱 (молба) を行った。そして、聖なる聖母の衣 (риза) を〔教

72) これは、コンスタンティノポリス公会議（前注）で決定されたイコン崇敬を記念する「正教勝利」（Торжество православия; θρίαμβος τῆς Ὀρθοδοξίας）の正教会の祝祭日を指しており、現在も大斎（великий пост）の最初（第一週）の主日（日曜日）に祝われている。

73) 「帝都」（Царьград）は、ビザンツ帝国の首都コンスタンティノポリスを指し、中世ロシアの文献では普通この名称で呼ばれる。この都市のギリシア語の別称 Βασιλὶς Πόλις（皇帝の都市）を翻訳借用（カルク）したもの。

74) この段落の、ルーシ人の軍船によるコンスタンティノポリス襲撃（ビザンツ史料によれば 860 年 6 月の出来事）と聖母の衣の奇蹟の記事には、*ПВЛ* の 866 年に並行記事がある。そこではアスコルドとヂールの遠征になっている [ПСРЛ Т. 1: Стб. 21–22]。これを *НІ-М* の記事を比べると、構文や語彙に異同があり、*ПВЛ* が若干詳しいものの、内容はほとんど一致している。*ХрВІІ* (*ХГА*) にも並行箇所があるが、*НІ-М* は *ПВЛ* により近く、*ПВЛ* のほうを改作した可能性が大きい [Вилкул 2019: С. 211–213]。ただし、*НІ-М* въ море скудь опочиша; *ПВЛ* в рѣку омочивше の異読については、*НІ-М* 編者が *ХрВІІ* の в море を参照した可能性がある [Творогов 1976: С. 13]。

75) 「船は無数だった」（бещислено корабль）は *НІ-М* 編者によるやや不器用な挿入。この句は、オレーグによる帝都遠征のエピソード [№ 18] でも繰り返し用いられている（下注 152）。

76) スード (Суд) は、イスタンブールに面し、ボスポラス海峡につながる細長い（幅 100m、長さ 12km ほど）入り江のことで、その形状から「金角湾」と呼ばれている。本年代記ではイーゴリの遠征 [№ 16]、オレーグの遠征 [№ 19] の描写において、さらにはオリガのコンスタンティノポリス訪問の記事 [№ 39] や 1204 年記事「十字軍の帝都占領物語」にも言及されている。本来は、年代記が典拠とした *ХГА* のギリシア語原典では τὸ Στενόν と表記されている語の訳語であり、この原語は固有名詞としてボスポラス海峡、とくにヨーロッパ側の海岸を意味していた。では、なぜこれが、*НІ-М* (*ПВЛ* も同じ) スラブ語訳で Судъ となったのかについては、「水濠、掘割、運河」を意味するギリシア語の普通名詞 σοῦδα の音訳語が用いられたと推定される。なぜなら、ルーシ人は長年の遠征や交易の中で、コンスタンティノポリス沿岸の掘割や運河に触れており、それをあらわす言葉 σοῦδα — суд は著述家の間で知られていたと考えられる。そのため、*ХГА* がスラブ語訳されたとき（おそらくキエフにおいて）、Στενόν の訳語としては身近な Судъ が当てられたのだろう [Истрин 1916: С. 195–196]。

77) 「ギリシア人」（греки）の語は、中世ロシアの文献においては、ビザンツ帝国（首都コンスタンティノポリス）に属する人々を広く指している。かれらの行政、社会、文化活動の言語はギリシア語だった。

78) 「多くの悪事をなした」（и многа зла створиша русь）の文言は *ПВЛ* にはないが、*ХрВІІ* 系の記事には同様の文言がある [Вилкул 2019: С. 189] ことから、*НІ-М* (*КНС*) 編者はこの記事を編集する際に、*ПВЛ* と *ХрВІІ* の両方を使っていたことが推察できる。

79) コンスタンティノポリス総主教フォティオス一世（在位 858–867, 877–886 年）。貴族出身で文官も経験したが、ミカエル三世の治世に総主教に選出された。一流の学僧でもあり、多くの著作を残すと同時に、スラブ人の使徒キュリロスを教導した。ルーシ人の来襲は就任 3 年目のことである。

会堂から〕持ち出すと、上衣 (судь)⁸⁰⁾ を海に浸けた。そのとき、静かだったのが、突然、嵐が起こってルーシの船を沈め、それらを岸へ乗り上げさせた。そして、〔ルーシ人は〕故郷へと帰っていった。

【三兄弟の殺害】 [№ 5]

これらの年の後に⁸¹⁾、これらの兄弟たち〔キイ、シCHECK、ホリフ〕が殺された⁸²⁾。ドレヴリャネ人⁸³⁾ (древляне) その他の周辺の〔部族〕によって辱められた⁸⁴⁾。

【ハザール人によるポリャネ人への課税。支配関係転倒についての訓話】 [№ 6]

ハザール人⁸⁵⁾ (козаре) は、これらの丘の上や森に座して〔住んで〕いるかれら〔ポリャネ人〕を見つけて、こう言った。「われらに貢税を支払え」。ポリャネ人は評議をして、1戸⁸⁶⁾ (дьм) から長剣 (мечь) 〔一本を〕を差し出した。ハザール人はそれを自分たちの公 (князь) と自分たちの長老のもとに運んだ。公は自分の長老たちを呼び集めて、かれらに言った。「見よ、われらは新しい貢税を獲得した」。かれら〔長老たち〕はかれ〔公〕に言った。「どこからか」。かれは言った。「ドニエプル川の上の丘の森の中

80) 「上衣」は *Км.судь Бр., Тр. суд Тл. судь* で *Тл.* の読みを採用した。「衣」(риза) の言い換えである。

81) 文脈から見ればこの段落の記事 [№5] は [№2] から続き、[№3-4] が挿入されたかたちになっている。この段落の記事には *ПВЛ* に並行記事があり、やはり文脈上は [№2] の対応記事 (上注 69) から続くが、*ПВЛ* ではその間にスラブ人の諸部族と周辺部族に関する長い記事が挿入されている [ПСРЛ Т. 1: Стб. 9-16]。[№2] [№5] と続いていた最古の資料に対して、*НІ-М* と *ПВЛ* の編者はそれぞれが独自の挿入を行ったことになる。

82) *НІ-М* 「殺された」 (изгибоша) に対して、*ПВЛ* 並行記事では「死んだのちに」 (по смерти) とあり、その前の部分ではキイは帝都から帰還後に「人生を終えた」 (животъ свои сконча) となっている。*НІ-М* 編者は、*ПВЛ* 862 年記事にある、到来したアスコルドとザールに対するキエフ人の言葉 «была суть братья, Кий, Щекъ, Хоривъ, иже сдѣлаша градоко съ, и изгибоша...» [ПСРЛ Т. 1: Стб. 20-21] (下注 90) から「殺された」 (изгибоша) の語を借用したのだろう。

83) 「ドレヴリャネ人」 (древляне/деревляне) は 東スラブ人の部族名で、*дерево/древо* (木・森林) を名称の語源としており「森の人」を意味する。形容詞形は *деревский* となり、その居住・支配地は、*деревкая земля* (ドレヴリャネ人の地) と呼ばれて、「平原の人」を意味するポリャネ人居住地の北辺である、ブリベチ川、スルチ川、テテレフ川に囲まれた一帯に広がっていたと考えられる。*ПВЛ* (*НІ-М*) 946 年の記事によれば、オリガおよびスヴァトスラフの手で首都イスクルテニが制圧されて、キエフ公への貢納者となった ([№ 33-34] 参照)。

84) この文は主語がなく、文脈からは「辱められた」 (обидими) のは「兄弟たち」 (братия) であるように読めるが意味的にはやや無理がある。しかし上注 81 の *НІ-М* 編者による編集 (挿入) を考慮に入れば、最古の資料で直前に語られていたポリャネ人 (поляне) が文脈的に主語であることが分かり、意味的にもこれが最も相応しい。なお、中世ロシア語では「辱める」 (обидети) は、盗み、略奪、傷害、殺害など相手に具体的な損害を与える行為を指している。

85) 「ハザール人」 (козаре) は、7 世紀～10 世紀中ごろにヴォルガ川下流域からドニエプル川下流域にわたって広く居住していたトルコ系の民族名。最盛期の 9 世紀にはユダヤ教と取り入れ、国力を向上させており、その勢力圏の西方ではスラブ人諸族との接触があったと推定される。

86) この貢税取り立ての対象である *от дыма* (一戸から) は竈の煙から転じて課税単位としての一戸となったもの (下注 100 参照)。

である」。かれらは言った。「何を人々は差し出したのか」。かれ[公]はかれらに長剣を示した。ハザール人の長老たちは言った。「よくない貢税です、公よ、われらは片刃の武器、すなわち刀剣(сабли)によって自分たちのために貢税を獲得してきました。これらの者たちの武器 [106] は両側が鋭利な長剣(мечи)です。これらの者たちは、われらと他の国々に対して貢税を課すことでしょう」。

見よ、すべて実現した。かれら〔長老たち〕は自分の意志ではなく、神の命令によって言ったのである。ちょうど、エジプトの皇帝ファラオ(Фараон цесарь Египетъст)のとき、人々がファラオの前にモーセ(Моисей)を連れて来ると、ファラオの長老たち(старѣишны)が「かれはきつと、エジプトの領土を征服するでしょう」と言った⁸⁷⁾。その通りになった。エジプト人はモーセのために減んだが、初めは〔モーセたちユダヤ人は〕かれらに奴隷として仕えていたのだった。

これと同様のことである。最初〔エジプト人が〕支配していたが、その後は〔ユダヤ人が〕かれらを支配した。その通りになった。ルーシの諸公が今日に至るまでハザール人を支配しているのだから⁸⁸⁾。

しかし、われらは前に戻ろう⁸⁹⁾。

【二人のヴァリャーグ人公アスコルドとヂールはキエフに到来してポリャネ人を支配する】[№ 7]

その後、かの兄弟たち〔キイ、シチェク、ホリフ〕の後に、二人のヴァリャーグ人(два варяга)が到来した⁹⁰⁾。二人は公と称していた⁹¹⁾。一人の名はアスコルド(Аскольд)で、もう一人はヂール

87) この旧約『出エジプト記』第2章に基づくエピソードは、*НІ-М (ПВЛ)* のウラジーミル聖公に対する哲学者の物語の中でも、呪術師(волхвы)の言葉として語られている。

88) 「ルーシの諸公が今日に至るまでハザール人を支配している」(владѣют бо козары князи рускыи и до днешняго дни)は、これ以降の*НІ-М*と*ПВЛ*の記事の中にこれに対応する記述がない。964年記事にスヴァトスラフ[03]がハザール人に勝利した(одолю)とあるが、これは支配した(владѣти)とは異なり、不自然である。ギッピウスはこのやや不自然なエピソードのハザール人=エジプト人とポリャネ人(ルーシ人)=モーセのユダヤ人の対比の仕方のなかに、*КНС* 編者のルーシ人選民イデオロギーの表現を見ている[Гиппиус 2011a: С. 50–54][Стефанович 2018: С. 363]。またその場合には、「今日に至るまで」(до днешняго дни)の「今日」は、*КНС* 成立の時点、すなわちシャフマトフによれば、1095年頃ということになるだろう。これについては下注111も参照。

89) 直前のポリャネ人のハザール人への貢税のエピソード[№ 6]が挿入的だったため、[№ 5]に戻ってキエフにおける支配の物語を続けるということ。これは、これまでの*ДКС*の文脈のあいだに、*КНС*の編者によって[№ 6]が挿入されたと考えられる。

90) この段落[№ 7]は、*ПВЛ*にテキストが一致する箇所はないが、内容的には*ПВЛ* 862年の記事に対応している[ПСРЛ Т.1: Стб.20–21]。この「到来した」(приидоста)は、ここでは文脈が曖昧だが、*ПВЛ* 862年の記事では二人のリューリクの家臣(アスコルドとヂールのこと)が帝都に行く途上でキエフを見たという文脈で「到来」している。

91) アスコルドとヂールが「公と称していた」(нарекостася князема)というかれらの出自について、*ПВЛ*ではи бясга у него 2 мужа, не племени его, но (Лер. ни) боярина(かれ〔リューリク[01]〕のもとには二人の家臣がいた。かれの部族ではなかったが、貴族だった)[ПСРЛ Т.1: Стб.20]とあり内容が異なっている。

(Дирь) だった。二人はキエフで公として支配(княжити)しており、ポリャネ人⁹²⁾(поля[на]ми)を支配していた。[かれらは]ドレヴリャネ人(древляне)やウーリチ人⁹³⁾(уличи)と戦争状態にあった⁹⁴⁾。

【ノヴゴロドの地の諸部族について。かれらのヴァリャーグ人への貢税支払い】[№ 8]

キイ、シチェク、ホリフ [がキエフにいた] のとき、ノヴゴロドの人々が [おり]、スロヴェネ人⁹⁵⁾(словѣне)と呼ばれていた。クリヴィチ人⁹⁶⁾(кривичи)、メリヤ人⁹⁷⁾(меря)もいた。スロヴェネ人は自分の領地を持っており、クリヴィチ人は自分の [領地を]、メリヤ人は自分の [領地を持っていた]。それぞれが、自分の氏族(род)を支配していた。他方、チューズ人⁹⁸⁾(чюдь)も自分の氏族を [支配していた]。

92) ここは *Км, Тл, Бр.* は полями (平原) だが、文字の欠失と判断して *Тр. полянами* (ポリャネ人) を採用した。

93) 「ウーリチ人」(уличи) はは年代記史料では *уличи, улучи, угличи, улутичи, лютичи, лучане* などと綴られる東スラブ人の部族。ドニエストル川下流域、南ブーグ川中上流域から黒海北西岸に居住しており、ポリャネ人とは南辺で接している。*НІ-М* ではさらに、922 年の記事で登場する。

94) 「ポリャネ人を支配しており、ドレヴリャネ人とウーリチ人と戦争状態にあった」(*владѣюща поля[на]ми и бѣша ратнии съ древляны и съ улици*) は、*ПВЛ* 785 年記事、*И бѣ обладаа Олегъ поляны и деревляны, и сѣверены, и радимичи, а с улици и тѣверци имяше рать.* (オレーグは、ポリャネ人とドレヴリャネ人、セヴェリャネ人とラディミチ人を支配し、ウーリチ人とチヴェルツィ人とは戦争をしていた) と構文や語彙が類似しており、*НІ-М* 編者がこれを改変して、アスコルドとゲールのこととしてこの箇所にしたことは明らかである。

95) この「スロヴェネ人」(словѣни) はイリメニ湖(Ильмень; Илмерь)を中心とする水域に居住していた東スラブ人の部族名で、いわゆるイリメニ・スロヴェネ人(ильменские словене)のこと。ノヴゴロドの周辺が活動の中心地となっており「ノヴゴロドの人々と呼ばれていたスロヴェネ人」(*новгородстии людие, рекомии словени*) という句はそのことを指している。словене の語は、*ПВЛ* ではドナウ流域を起源として展開した広い意味でのスラブ人の名称としても使われているが、*НІ-М* ではイリメニ・スロヴェネ人だけを指している。*ПВЛ* のスラブ人の展開を示す冒頭部分で「スロヴェネ人(スラブ人)はまた、イリメニ湖の周辺に住み、自分たちの [スロヴェネの] 名で呼ばれ、城市をつくってそれをノヴゴロドと名づけた(*Словѣни же сѣдоша около езера Илмеря и прозвашася своимъ имянемъ и сѣдлаша градъ, и нарекоша и Новъгород*)[ПСРЛ Т. 1: Стб. 6] という記述があり、この箇所の句はこの記述を踏まえたものだろう。

なお、構文的には「ノヴゴロドの人々と呼ばれていた」をこれに続く「クリヴィチ人とメリヤ人」も含める解釈の余地もあるが、上記の典拠および *ПВЛ* の記述(下注 111)を考慮に入れると、「スロヴェネ人」にだけに限るべきだろう。

96) 「クリヴィチ人」(кривичи) は西ドヴィナ上流域、ヴォルガ上流域のノヴゴロドの地の西南部に居住していた東スラブ人の部族。ポロツク、スモレンスク、イズボルスクなどの城市がその中心地となっていた。

97) メリヤ人(меря) は、ヴォルガ川上流域にスラブ人諸族が移住する時期(9-11 世紀)よりも前からこの地に居住していたフィン・ウゴル系の部族。9 世紀末にはノヴゴロドの地でスラブ人と共住するようになった。*ПВЛ* 907 年の記事にはオレーグの帝都遠征に参加した部族として言及されている。

98) 「チューズ人」(чюдь) は、バルト・フィン系の部族(エストニア人、ヴェプス人、イジョラ人、コレラ人など)に対するスラブ人から見た集合的な呼び名で、語源的には「異なる人々」を意味している。ここでは、主にエストニア人の祖先にあたるフィン系の部族を指しており、スロヴェネ人とは西辺で居住地が接していた。現在エストニアとロシアの境にあるチューズ湖(Чудовское озеро)(バイブリシ湖)の名称はこの部族名にちなんでいる。

そして、〔かれらは〕ヴァリャーグ人 (варяги) に対して貢税を納めていた⁹⁹⁾。家長 (муж) ひとりあたり白いリス毛皮¹⁰⁰⁾ (по бѣлѣи вѣверици) 一枚だった¹⁰¹⁾。

そして、かれらのもとにいるときには、その者たち〔ヴァリャーグ人〕はスロヴェネ人、クリヴィチ人、メリヤ人、チューヂ人に暴力を振るっていた¹⁰²⁾。

【ノヴゴロドの地の諸部族の反ヴァリャーグ人蜂起とルーシ人招聘】 [№ 9]

そして、スロヴェネ人、クリヴィチ人、メリヤ人、チューヂ人は、ヴァリャーグ人に対して決起して、〔ヴァリャーグ人を〕を海の向こうへ追放した。自分たちで自分たちの支配を始め、城市¹⁰³⁾ (города) を建設した¹⁰⁴⁾。かれら〔諸部族〕はみずから互いに対して決起して掠奪を始め

99) この北方4部族が「ヴァリャーグ人に対して貢税を納めていた」(и дань даяху варягомъ)の文言は、*ПВЛ* 859年記事では *имаху дань варязи из заморья* と別の表現になっている。

100) この貢税額については底本 *Км.по бѣлѣи вѣверици (Гл. Лвр.)* と *по бѣлѣи вѣверицѣ (Бр. Тр. Ил. НКI)* と校訂テキストの読みの違いがあるが、*бѣлѣи* の分綴は校訂者の判断によるところが大きいので、両者の読みをはっきりと分けることは難しい。

вѣверица はスラブ語の語源では「リス」(белка)だが[Аникин Вып. 6: С. 158], リスは毛皮として広く用いられていたために、一般に毛皮を指す語でもあった。さらに社会経済活動の中で貨幣単位としてもこの語が用いられていた。『ルーシ法典』(簡素版)では最小の貨幣単位(1/100 ~ 1/150 グリヴナ)として記されている。他方, *бела* の語については、伝統的な訳(リハチョフなど)では *бела* を少額の銀貨, *веверица* をリス毛皮と解釈して「銀貨〔一枚〕とリス毛皮〔一枚〕」としているが, *бела* を銀貨とはっきり解釈できる史料はみあたらない。*бела* は *белка* の語源からリス毛皮と解釈できると同時に、中世文献には貨幣単位としての用法(『イーゴリ軍記』など)があるが、あくまで毛皮との類比によるものである。そこで翻訳では、*каштанов* の解釈に拠って、*белая веверица* を「白いリス毛皮」、すなわち冬場の白毛に生え変わった高価なリス毛皮と解釈して訳した[Каштанов 2003: С. 66–67]。

なお、貢税取り立ての対象は, *НМ-Мот мужа; ПВЛ от дыма* (竈の煙から転じて課税単位としての一戸: 上注86) だが, *НМ-М* 編者が同じことを説明的に分かりやすく改変した(下注102)と考えれば, *муж* は「家長」と解釈できる。

101) この段落は、*ПВЛ* 859年の記事[ПСРЛ Т. 1: Стб. 19]に「白いリス毛皮を取り立てている」(前注)との共通の表現があるが、そこでは取り立てているのはハザール人(козаре)で、取り立てられるのは南方の部族(ポリャネ人(поляне), セヴェリャネ人(сѣвери), ヴャティチ人(вятичи))になっている。*НМ-М* (*КНС*) 編者は、この貢税額の表現だけを借用して、北方の「スロヴェネ人、クリヴィチ人、メリヤ人、チューヂ人」が「ヴァリャーグ人」によって課されたかのように改変している。

102) 「暴力を振るっていた」(*насилъ дѣяху*) は暴力的手段による徴税のこと(下注197)。この段落は *ПВЛ* に対応記事がなく、*НМ-М* (*КНС*) 編者の独自の書き込みだろう。構文がぎこちないことから挿入が疑われる。おそらく、これに続く「～決起して」(これも *ПВЛ* にない)の理由をつけるための説明的書き込みではないか。ここには以下にも見るように *НМ-М* 編者の「説明癖」がうかがわれる。

103) 「城市」と訳した *город* (もしくは *град*) は、支配や防衛の拠点とするために、土塁、城柵、城壁など構えて周囲を固めた軍事的な市域のことで、支配者や住民が生活するための住居や施設も備えていた。大規模な場合は「都市」と訳すこともあるが、翻訳では「城市」を用いる。なお、これより小規模な *городок*, *градо*к の場合は「城砦」の訳語をあてる。

104) この段落のゴシック体で示した細かい補筆(*ПВЛ* テキストに対する)は, *НМ-М* 編者の「説明癖」(上注102)のあらわれだろう。

た。かれらの間の戦争は大きなもので、内紛も「大きかった」。城市は城市に対して決起し¹⁰⁵⁾、かれらのところには正義はなかった。かれらは互いに言い合った。「われらを支配し、正義によって調停する¹⁰⁶⁾ような公(князь)を、自分たちのために探し求めよう」。かれらは海の向こうへ、ヴァリャグ人のもとへ¹⁰⁷⁾行った。

そして「諸部族は」こう言った。「われらの地は大きく豊かですが、われらのもとには秩序(наряд)がありません。われらのもとに来て公としてわれらを支配(княжити)して下さい」。そこで3人の兄弟が自分たちの氏族とともに選出され、多くの非常に驚くべき従士たちをつれてノヴゴロドへと¹⁰⁸⁾到着した。

最年長(старѣишии)の者がノヴゴロドに座した、その名はリユーリク[01](Рюрикъ)だった。次の者シネウス(Синеусъ)がペロオゼロ(Бѣло-озеро)に座した。三番目がイズボルスク(Изборьск)に座し、その名はトゥルーヴォル(Труворъ)だった。

そしてこれらのヴァリャグ人から、この来訪者たち(находники)から、ルーシ人¹⁰⁹⁾(русь)

105) 「城市は城市に対して決起し」(въсташа град на град)は、旧約『イザヤ書』19:2の*восстанет град на град и закон на закон*。(町は町と、国は国と戦う：新共同訳)からの引用。*HI-M* 編者による挿入である。

106) 「正義によって調停する」(*рядил... по праву; Лер. судил по праву; Ил. рядил... по ряду и праву*)の*рядити*, *ряд*(調停)は*наряд*(秩序)と同根の語で、相手との話し合いによって合意を得て、その結果、平和や秩序を回復することを意味している。911年の対ビザンツ条約では、より具体的に「協定」の意味で使われ、後年には「協定書」「遺言状」のような政治・社会制度化した用法が発達した[Горский 2019: С. 291]。

また、「正義がない」(*не бѣше... правды; Ил., Лер. не бѣ... правды*)の*правда*, *прав*(正義)は共同的な秩序の根幹にあるとされる規範概念で、文書として具体化されるときには「法律」になり(『ルーシ法典』(*Русская Правда*)), キリスト教の神に根拠があるとされるときには「神の正義」(*Божья правда*)と呼ばれた。後年には、ルーシの地の支配者としての公の一族にとっての共同的な秩序・法観念(信義)として用いられることが多かった。

107) *HI-M* 「ヴァリャグ人のもとへ」(*к варягомъ*)は、*ПВЛ*の並行記事では「ヴァリャグ人、ルーシ人のもとへ」(*к варягомъ, к руси*)と付加がある。さらに*ПВЛ*では続けて、この補筆を説明するように「このようにそのヴァリャグ人は自らをルーシ人と呼んでいたからである。ある者がスヴェイ人と、ある者がウルマネ人、アングリャネ人と呼ばれ、ある者がゴート人と「呼ばれている」)ように、これらも「ルーシ人と呼ばれていたのである」(Сиде бо звахуть ты варягы русь, яко се друзии зовутся свее, друзии же урмани, аныгыне, инѣи и готѣ, тако и си.)[ПСРЛ Т. 2: Стб. 14]の文言がある。これは、「ルーシ人」の由来を語ることが主要モチーフとしている*ПВЛ*編者(その表題を参照)の手になる挿入であることは明らかである。

108) *ПВЛ*では「ルーシ人をすべて連れて」(*попаша по собѣ всю русь*)のところが、*HI-M*では「多くの非常に驚くべき従士たちを連れてノヴゴロドへ」(*попаша со собою дружину многу и предивну, и приидоша к Новугороду*)となっている。これは明らかに*HI-M*編者の「説明癖」(上注102)によるものだろう。

109) この段落の、*HI-M* *находникъ тѣхъ*, (прозвашася) русь(この来訪者たちから、ルーシ人と呼ばれた)が*ПВЛ*の並行記事に対して付加されている文言だが、これは*HI-M*編集段階における挿入が疑われる。ヴァリャグ人の説明として「来訪者」(*находники*)を付したのは、*ПВЛ*にリユーリクが単独支配を初め、自分の家臣にボロツク、ロストフ、ペロオゼロなどの諸城市を与えたことから、それらの城市に「外来者のヴァリャグ人がいるようになった」(*суть находники варязи*)という文言があり(*HI-M*にはない)、これを借用して説明に使ったのだろう。これを*HI-M*編者の「説明癖」(上注102, 108)のあらわれではないか(下注127も参照)。

と呼ばれた。かれらからルーシの地¹¹⁰⁾ (руская земля) と名付けられた。

ノヴゴロドの人々は、今日に至るまで、ヴァリャーグ人の氏族からきているのである¹¹¹⁾。[107]

【リユーリクの単独支配】 [№ 10]

2年後にシネウスが死に、その兄弟トゥルーヴォル〔も死んだ〕。ひとりリユーリク [01] が〔支配〕権力を、二人の兄弟の権力を手にした。そして、ひとりで支配し始めた¹¹²⁾。

【息子イーゴリと家臣で軍司令官のオレーグ】 [№ 11]

そして息子が生まれた。イーゴリ [02] と名付けられた。そして、かれ、イーゴリ [02] は生長して¹¹³⁾、勇敢で賢明になった¹¹⁴⁾。

かれ〔イーゴリ〕のもとで軍司令官 (воевода) になった¹¹⁵⁾ のは、オレーグ [00] という名で、

110) 「ルーシの地」(руская земля) はルーシ人 (русь) およびその公 (князь) の支配する土地くらいの意味である。

111) 「ノヴゴロドの人々は、今日に至るまで、ヴァリャーグ人の氏族からきているのである」(и суть новгородстии людие до днешняго дни от рода варяжска) のは、下線部分が [№ 6] のルーシ諸公のハザール人支配についての記事の句とまったく同じことから (上注 88), 「今日」についても同じ時点、すなわち、*КНС* 成立の時点である 1095 年ころと考えるのが妥当ではないか。

なお、*ПВЛ: Лер.* ではこの文言は новгородьци ти, суть людее ноугородьци от рода варяжска, преже бо бѣша словѣни (このノヴゴロド人、ノヴゴロドの人々はヴァリャーグ人からきており、以前はスロヴェネ人だったが) となっており異同がある (*Ип* では 12 世紀 10 年代の、ノヴゴロドびいきのいわゆる *ПВЛ* 第 3 版編者の手で、このノヴゴロド人にかかわる文言がそっくり削除されている)。この異同はすべて *ПВЛ* の編者の改変によるもので、до днешняго дни の句は *ПВЛ* 編集当時 (11 世紀末～12 世紀初) の実態に合わないことから削除され、直後の *ПВЛ* にある「ノヴゴロドにおける最初の住人はスロヴェネ人だった」(а перьвии насельници в Новѣгородѣ словѣне) (これは *НІ-М* にはない) の記述をふまえて *ПВЛ* の編者が преже бо бѣша словѣни の句を補筆したのである。

112) この段落のゴシック体で示した *ПВЛ* に対する *НІ-М* の付加の句は、内容的にはすでにあるテキストの繰り返しであり、この前後の箇所における *НІ-М* 編者の過剰とも言える「説明癖」(上注 102, 108, 109) のあらわれである。

113) この възрастъю же ему, Игорю に対応する表現は *ПВЛ* では 903 年のオリガとの結婚の記事に Игореву възрастъю [ПСРЛ Т. 2: Стб. 20] とある。*НІ-М* (*КНС*) の編者がここから表現を流用したのである。

114) イーゴリの誕生については *ПВЛ* には記述はない。リユーリクが死んだときイーゴリは「子供だった」(дѣтескъ) ことが述べられているだけである。イーゴリが「勇敢で賢明」(храборъ и мудръ) であることは、以下の妻のオリガの性格付け「賢明で思慮深い」(мудра и смыслена) (下注 136) に対応している。

115) この「かれのもとで軍司令官になった〔だった〕のは～」(бысть/бѣ у него воевода...) というのは、*НІ-М* においては、ルーシの公が交代したときに、その直属の軍司令官を紹介する定型表現であり、*НІ-М*(*КНС*) 編者の編集部分に同様の表現が 4 回繰り返されている [Шахматов 1908: С. 8]。

賢明で勇敢な家臣 (муж) だった¹¹⁶⁾。

【イーゴリとオレーグの略奪遠征。キエフの発見。アスコルドとヂールの殺害】 [№ 12]

そして二人は掠奪を始めた。ドニエプル川 (Днѣпръ рѣка) [上流域] とスモレンスク (Смоленскъ) の城市を発見 [到達] した。そして、そこから進軍してドニエプル川を下った¹¹⁷⁾。

キエフの丘に到来した。そして二人はキエフの城市を見た。そして、そこでは誰が公として支配 (княжити) しているかを訊いた。[これに答えて] 言った。「二人の兄弟¹¹⁸⁾、アスコルドとヂールです」。

イーゴリ [02] とオレーグ [00] は通り過ぎると見せかけて、船の中に隠れていた。そして、少数の従士たちとウゴルスコエ [の丘]¹¹⁹⁾ のふもとの (под угорьскими) 川岸に着岸すると、商

116) *ПВЛ* では、この段落と内容的に対応する箇所は、879 年の記事の冒頭で「リユーリク [01] が死ぬときに、かれは自分の公位をオレーグに引き渡した。[オレーグ] は、かれにとって一族の者だったからである。そして、かれの手に自分の息子イーゴリ [02] を任せたのである。[イーゴリ] が非常に年少 [子供] だったからである」(умѣршо же Рюрикови, предасть княжение свое Олгови, от рода ему суща, выдавъ ему на руцѣ сына своего Игоря, бѣше бо молодѣ велми.) となっている。これは、*НІ-М* のオレーグをイーゴリ配下の「軍司令官」(воевода) および「家臣」(муж) としている記述とは大きく異なっている。

ПВЛ の編者は、912 年の記事に載せられているオレーグが結んだビザンツとの協定書に、オレーグが「ルーシの大いなる公」(великий князь руский) とあることから、かれを自立した公 (князь) として描く立場は一貫している。ただ、かれは傍系の公族に属していたため、かれの活動期間については「イーゴリは非常に年少だった」という説明をしているのだろう。

それに対して、*НІ-М* の以下の記述では、オレーグの役割を一貫してイーゴリに対して従属的に描いており、「軍司令官」「家臣」もそれに対応している。オレーグを「賢明で勇敢」(мудръ и храборъ) と性格付けているが、これは直前のイーゴリの性格の反復であり、いかにも素っ気ない。このような *НІ-М* (*КНС*) におけるオレーグに対する低い評価の理由として、異教的な予言能力を持つとされたオレーグ (Олег Вещий) に対して、教会に属する *КНС* 編者がこれを嫌って過少に評価したという説も出されている [Комарович 1960: С. 93–94]。

117) *ПВЛ* 882 年の対応の記事では、「オレーグが多くの軍兵 [すなわち] ヴァリャーグ人、チューヂ人、スロヴェネ人、メリヤ人、ヴェシ人、クリヴィチ人を引き連れて出陣し、クリヴィチ人とともにスモレンスクへ到来して、城市を占領し、自分の家臣を [代官とに] 据えた。かれ [オレーグ] はそこから下流へ進み、リユーベチを奪い、自分の家臣を [代官に] 据えた」(Поиде Олегъ, поимъ воя многи, варяги, чюдѣ, словѣни, мерю, весь, кривичи, и приде къ Смоленську съ кривичи, и прія градъ, и посади мужъ свои. Оттуда поиде внизъ, и взя Любещъ, и посади мужъ свои) とより詳しく説明されている。

118) アスコルドとヂールを「兄弟」(братие) としているのは *ПВЛ* ではなく、この箇所が唯一の言及である。これは、[№ 7] のテキストの冒頭で「兄弟」(братие) (キイ等三兄弟のこと) と「二人のヴァリャーグ人」(два варяга) が近接して書かれていたため、補筆した *НІ-М* 編者が誤解した可能性もある。

119) この「ウゴルスコエの丘」(угорское) については、*ПВЛ* 898 年の記事の冒頭で「ウゴル人 [ハンガリー人] (угры) が、現在ウゴルスコエ (угорское) と呼ばれている丘を通過してキエフのそばを通り、ドニエプル川に着いて移動幕舎を張った」(идоша угри мимо Киевъ горою, еже ся зоветь нынѣ Угорское, и пришедше къ Днепру, и сташа вежами.) [ПСРЛ Т. 1: Стб. 26] と、地名起源譚が語られている。

人(гости)に見せかけて¹²⁰⁾、アスコルドとヂールを呼び寄せた。二人[アスコルドとヂール]は「キエフの丘から」降りて来た。すると、他の者たちがすべてイーゴリ [02] の船から岸へと飛び出してきた。イーゴリ [02] はアスコルドに言った¹²¹⁾。「お前たち二人は公ではない、公の一族でもない。わたしこそが公である¹²²⁾。わたしが公として支配する(княжити)ことがふさわしい¹²³⁾」。

そして、アスコルドとヂールを殺し、すぐに丘に運び、かれらを埋葬した。アスコルドは、現在ウゴルスコエ¹²⁴⁾ (Угорское) と呼ばれている丘に「埋葬された」。オルマの屋敷(двор Олминь)がある場所である。オルマ(Олма)はこの墳墓の上に聖ニコライ教会(святой Никола)を創建した。ヂールの墳墓は聖イリーナ¹²⁵⁾ [教会] (святая Ирина) の向こうにある。

【イーゴリによるキエフ支配】 [№ 13]

そして、イーゴリは「公座に」座してキエフを公として支配(княжити)した¹²⁶⁾。

かれ「イーゴリ」のもとにはヴァリャグ人の家臣(мужи)がいたのだが、スロヴェネ人と

120) 底本(Км.) は на берегъ, творящася подугорьскими гостьми だが「ボドウゴル商人」(ハンガリーの近くから来た商人?) という語と語順が不自然であり、他の写本は全て(Тл., Бр., Тр.) на берег под Угорьскими творящася гостьми と自然な構文であるため、後者を採用した。

121) *Н1-М* は рече Игорью Асколду だが、*ПВЛ* では рече Олегу Асколду и Дирови (オレーグがアスコルドとヂールに言った)」と主語が異なっており、さらにヂールに対しても語っている。文脈からは二人に対して語ることが自然であり、*Н1-М* の読みは不作為の削除による二次的なものである可能性が大きい。

122) *Н1-М* はイーゴリの言葉として вы нѣста князя, ни роду князя, азъ есмь князь (お前たち二人は公ではない、公の一族でもない。わたしこそが公である)。それに対して、*ПВЛ* はオレーグの言葉として вы нѣста князя, ни рода князя, азъ есмь роду князя (お前たち二人は公ではない、公の一族でもない。わたしが公の一族である)。これを比較すると、ни роду(а) князя の句は *ПВЛ* では文脈上で必要だが、*Н1-М* では不要であり余計な文言であることが分かる。つまり、*Н1-М* では編者が先行資料を改変するときに、この句を残してしまった可能性が大きく、*Н1-М* が二次的な読みと考えられる。

123) 「わたしが公として支配することがふさわしい」(мнѣ достоить княжити) は *Н1-М* における追加の文言。その代わり、*ПВЛ* の対応箇所にある「イーゴリを前に連れてきて『これこそリューリクの子である』[と云った]」の文言を削除している。これらの改変は、イーゴリの主体性を強調するための *Н1-М* 編者の意図によるものだろう。

124) この地名については上注 119 を参照。

125) イリーナ教会については、*ПВЛ* 1037 年の記事に「ヤロスラフが(...) 聖ソフィアを、その後に聖ゲオルギイと聖イリーナの修道院を定礎した」とある。これは、ヤロスラフの妃インギゲルダ(洗礼名イリーナ)の守護聖人に献堂されたもので、1240 年にバトゥ軍に破壊されるまで建っていた。

126) *ПВЛ* 882 年の対応記事では、「オレーグが座してキエフを公として支配した」となっており、キエフ支配の主体が入れ替わっている。なお、*ПВЛ* ではこの文言の後にキエフについて「オレーグが言った。『見よ、ルーシの諸城市の母となれ』」(и рече Олегъ: «Се буди мати градомъ руками») の文言があるが、イーゴリ一族によるキエフ支配正当化を編集の動機とする *Н1-М* 編者にとって、これは受け入れられなかったに違いない。

その他の者たちは、このときからルーシ人と呼ばれるようになった¹²⁷⁾。

【イーゴリの城市建设と徴税政策】 [№ 14]

このイーゴリ [02] は¹²⁸⁾ 諸城市¹²⁹⁾ を建て始めた。そして、スロヴェネ人とヴァリャーグ人のために貢税を納めるよう制定した¹³⁰⁾。そして、クリヴィチ人とメリヤ人に対しては、ヴァリャーグ人のために貢税を納める〔よう定めた〕¹³¹⁾。他方、ノヴゴロドからは、平和のために、一年

127) この段落は、*HI-M* (全写本同じ) и бѣша у него варязи мужи словенѣ, и оттолѣ прочии прозвашася русью だが、これは *ПВЛ* の и бѣша у него варязи и словенѣ и прочии, прозвашася русью のテキストに мужи と оттолѣ を挿入した (おそらく上注 108, 109, 112 の「説明癖」による) ものであることは明らかである。しかし、*HI-M* テキストの語順では挿入した語のかかりかたが不明瞭なため、翻訳では оттолѣ の位置を変えて、и бѣша у него варязи-мужи, (а) словенѣ и прочии оттолѣ прозвашася русью と訂正読みを行った。ルーシ人の呼び名がヴァリャーグ人から発していることは上注 109 の箇所ですでに説明されているが、それ以外のスロヴェネ人など在地の諸部族 (прочии は 921 年の記事で言及されている полянь (ポリャネ人), кривичи (クリヴィチ人) などを指すだろう) も、イーゴリ公の配下であれば русь (ルーシ人) と呼ばれるようになった、と言いたいのではないか。そのことは、以下の帝都遠征の記事 [№ 16] ではルーシ人だけが言及されていることから分かる。ステファノヴィチはこれについて、外來のヴァリャーグ人と在地のスラブ系諸部族 (племена) とが融合することで、あるいは共生 (симбиоз) することによって、ルーシ人とよばれる集団が出現したと説明している [Стефанович 2012] [Стефанович 2018: С. 365]。

128) *ПВЛ* の並行記事では、主語は「オレーグ」である。上注 121, 126 を含めたこの「オレーグ」と「イーゴリ」の取り替えの異読は、*HI-M* 編者が、*ПВЛ* (もしくはその共通資料) の「オレーグ」を「イーゴリ」に改変した結果と考えるべきだろう。

129) この「諸城市」(грады) は、950 年前後の成立とされるコンスタンティノス七世紫袍帝 (ボルフュロゲネトス) 『帝国統治論』(DAI)9 章で、ルーシの公 (時代的にイーゴリに相当する) の支配下にあった城砦 (τὸ κάστρον) として列挙されているスモレンスク (Μιλινίσκα; Смоленск), リューベチ (Τελιοῦτζαν; Любеч), チェルニゴフ (Τζερνιγῶγα; Чернигов), ヴィシェゴロド (Βουσεγγραδέ; Вышегород) などに対応していると考えられる [帝国統治論 2017: 221 頁] [山口 1983: 54-55 頁]。

130) この箇所の *HI-M* и дани устави словеномъ и варягомъ даяти, と *ПВЛ*: Ил. и устави дани словѣном, はともに解釈が難しい不明瞭な構文である。与格形の словеномъ и варягомъ は、貢税の「支払人」とも「受取人」とも両方の解釈が可能だが、ヴァリャーグ人は公の家臣 (мужи) でスロヴェネ人はそれと同様に扱われているのだから (上注 127), ここでは「受取人」と理解するのが自然ではないか。その場合、誰が「支払人」であるか書かれていないが、文脈から、キエフおよび新設諸城市周辺のイーゴリ支配下にある部族 (主にポリャネ人) に対して貢税を課したと理解できるだろう。

131) 「クリヴィチ人とメリヤ人に対しては、ヴァリャーグ人のために貢税を納める〔よう定めた〕」(и кривичемъ и мерямъ дань даяти варягомъ) の一節 (*ПВЛ* и кривичемъ и мерямъ, и устави варягомъ дань даяти は編者による分かり易さのための改変がある) については、与格形で示されているクリヴィチ人とメリヤ人 (кривичемъ и мерямъ) は明らかに貢税の「支払人」の側の部族である。また、「ヴァリャーグ人のため」(варягомъ) は直前の一節の繰り返しのようにも見えるが、ここではヴァリャーグ人の出自をもつノヴゴロド人 (上注 111) のことを指しているかもしれない。なお、ステファノヴィチは、テキストの比較分析と表現の不自然さを根拠に、この一節はそっくり早い段階の編者 (*HI-M*, *ПВЛ* 共通資料) による解釈的挿入だったと考えている [Стефанович 2010: С. 26-27]。確かにこれがない場合この前後の部分の理解は明瞭になる。

あたり 300 グリヴナ¹³²⁾の貢税¹³³⁾を〔自分に納めるよう定めたが〕、これは納められなかった¹³⁴⁾。

【イーゴリとオリガの結婚。スヴァトスラフの誕生】 [№ 15]

そしてそれから〔イーゴリは〕自分のために、プスコフ (Плесков) からオリガ (Олга) という

132) 最初期 (10 世紀) のグリヴナは、ビザンツのノミスマ金貨 (4.3g 相当 = золотник) の価値を、アラブ・ディルハム銀貨が流通していたルーシにおいて、銀によって表現する単位であり、主に外交・交易のためのものだった。ПВЛ 907 年のオレーグのビザンツとの交渉の中で樞座に対して 12 グリヴナの貢税 (賠償) を求めたという記事がある。1 グリヴナ = 1 ノミスマ金貨 = デルハム銀貨 20 枚と換算すれば、9 世紀のディルハム貨が 2.9-3.0g だから、1 グリヴナは銀重量にすれば 58 ~ 60g 相当になる [Назаренко 1996: С. 76-77]。本記事の 300 グリヴナなら銀 18kg ほどになるが、これは計算上のことで、実際にどのような形で定期的な貢税が支払われていたかについては史料がない。なお、後代のグリヴナは対銀の価値が大きく変わり、場所によって 1 グリヴナが銀 200 ~ 400g に評価されるようになった。

133) この、「ノヴゴロドからの平和のための年額 300 グリヴナ」(от Новгорода 300 гривенъ на лѣто мира дѣля) の貢税について、ステファノヴィチは、イーゴリの徴税政策における、ノヴゴロドの特別な地位を示すために、他の諸部族への徴税とは分けて、ここに書かれたと考えている。確かに、『帝国統治論』(DAI) によれば、ノヴゴロド (Νεμογαρδάς) にはイーゴリの息子スヴァトスラフ (Σφενδοσθαβρος, ὁ υἱὸς Ἰγγωρ) [DAI 成立の時点で 15 歳前後だっただろう] が座しており、DAI の記述から、ノヴゴロドからの徴税は公による巡回徴貢 (πολύδια; полюдье) によらず、別個の徴税の方法がとられていたと推察することが可能である [帝国統治論 2017: 219, 221 頁]。

また、ステファノヴィチは「平和のため」(мира дѣля) の文言について、12-13 世紀のチェコの農民が国王に定期的に支払っていた tributum pacis (平和の税) が、自由民が安全を含む保障のために支配領主に支払う税の最初期の形態 (その場合 мир は正義・法の意味合いも持っている) だったことなどを参照して、イーゴリとノヴゴロドの間でもこのような合意に基づく徴税がなされたのではないかと考えている [Стефанович 2010: С. 28-33]。なお、ノヴゴロドからキエフへの徴税については、HI-M (ПВЛ) 1014 年記事に 2000 グリヴナという額が示されているが、これについては当該の記事の項で検討する。

134) 「これは納められなかった」(еже не даютъ) は、HI-M すべての写本が共通の読みだが、文脈から見て不自然な表現である。ПВЛ の並行記事では「この〔貢税は〕ヤロスラフの死 [1054 年] までは、ヴァリャグ人に対して支払われていた」(еже до смерти Ярославѣ даяше варягом)[ПСРЛ Т. 1: Стб. 24] と明らか違った記述がなされている。

この相違はおそらく、KHC には еже и донныне дают (シャフマトフの再構成では еже и нынѣ дают [Шахматов 1916 (2003): С. 946]) とあったのを、後代の ПВЛ 編者の時代は、すでにノヴゴロドからキエフ公への定期的な納税はなくなっていたために、до смерти Ярославѣ と改変し、さらに、варягом の語を書き加えたのだろう。ПВЛ の編者が、公 (ここではイーゴリ公) のヴァリャグ人出自を肯定的に見ていたことによる加筆の可能性をリハチョフは指摘している [Лихачев 1950: С. 254, 113]。これに対して HI-M の読みは、KHC の еже (и донны) не дают のカッコの部分が欠落したテキストが、現存の写本に伝わったのではないか。この相違を、何らかの意図的な書き換えで説明することは難しい。

名の女〔妻〕を連れて来た¹³⁵⁾。賢明で思慮深い¹³⁶⁾〔女だった〕。かの女から息子のスヴァトスラフ [03] が生まれた¹³⁷⁾。

その後、再び時間が〔経過した〕。

【イーゴリの帝都遠征】 [№ 16]

6428¹³⁸⁾ (920) 年。

135) イーゴリとオリガの結婚について *ПВЛ* では 903 年の年紀が付された記事があり、プスコフから「連れてきた」(приводити) という部分だけが共通している。ただ、*ПВЛ* では「プスコフからかれ〔イーゴリ〕のところに、オリガという名の妻が連れて来られた」(приведоша ему жену оп Пьскова, именемъ Ольгу) と、イーゴリにとって受け身の行為（もしくは文脈からはオレーグ主導の行為）であるのに対して、*НІ-М* では「自分のために連れてきた」(приведе себѣ) とイーゴリ自身の主導性が強調されている。

136) 「賢明で思慮深い」(мудра и смыслена) の句は上のボリャネ人の家臣を形容する句と同じ（上注 65）であると同時に、夫のイーゴリの性格付けの句「勇敢で賢明」(храборъ и мудръ)（上注 114）にも対応している。

137) このスヴァトスラフの誕生の一節 (от нея же родися сынъ Святославъ) は明らかに *НІ-М* 編者による補筆によるものである。かれのイーゴリー族の支配の正当化の方針（オレーグの役割の過小評価にもつながる）によるものだろう。なお、*ПВЛ Ин. Хлб.* には、942 年の記事の最後に в се же лѣто родися Святославъ у Игоря（この同じ年イーゴリのもとにスヴァトスラフが生まれた）という補筆があり、*НІ-М* における補筆との関連が当然疑われる。

138) この 6428(920) 年が *НІ-М* における二番目の年紀である。最初の 6362(854) 年（上注 56）の年紀と同時に記事に付されたことは確かである、実質的にはここが *НІ-М* の記年（1 年ごとの年代設定）の始まりの年になっている。これ以下底本 (*Км.*) では、6954 (1446) 年まで、ケアレミスによる数例の年紀の脱落と重複をのぞけば、1 年ごとに几帳面に年紀が付されている。

年紀の基準年になった 6428(920) 年は、ルーシ人の帝都遠征は、*ПВЛ* 941 年の記事でより詳しく記されている一回目の遠征（ビザンツ史料から 941 年 6 月～9 月の出来事であったことが確かめられる）と同じものを指している。ではなぜ、941 年ではなく 920 年の年紀が付されたのか。これについて、シャフマトフは、*НІ-М* (*КНС*) 編者が使った資料（省略されたフロノグラフ (*Хронологографическая компиляция*)) には、6428 年はロマノス帝（下注 145）の即位の年とあるだけで、ルーシ人の帝都遠征の記述がその直後にきていたために（省略されていない *ХГА* には、ロマノス帝即位は「6428 年 8 インディクティオン」(919 年 9 月～920 年 8 月)、ルーシ人の来襲は「14 インディクティオンの 6 月」(941 年 6 月) と書かれている [Истрин 1920: С. 553, 567]), 編者はこの年を遠征の年であると勘違いしたのではないかと説明しており [Шахматов 1900 (2003): С. 176–177], これが現在の通説になっている。

イーゴリ公はギリシア人を攻めるべく¹³⁹⁾、ルーシ人の軍兵を一万の小型船で¹⁴⁰⁾派遣した¹⁴¹⁾。
 [船は] 帝都へ向けて航行し、ルーシ人は多くの悪事をなした¹⁴²⁾。スード〔金角湾の岸〕をすべ
 て火で焼いた。ある者は捕虜に獲り¹⁴³⁾、他の者は斬り殺し、また他の者は斬って地に倒し、他の
 者は〔的として〕立たせて [108], 矢が射かけられたりした。戦士たちがよく行うように¹⁴⁴⁾。腕
 を折ったり、後ろ手に縛り上げ、鉄釘を頭に打ち込んだりした。また、多くの教会に火を掛けた。
 そのとき、ロマノス¹⁴⁵⁾ (Ρομαν) が〔帝都の〕城市を統治していた。皇帝ロマノスは、パトリキ

139) この段落の記事は、基本的に *ПВЛ* 941 年のイーゴリによる帝都襲來の記事に対応しており、そのテキストもしくは *ПВЛ* が資料としたビザンツ年代記 (共通資料) *ХрВН* を利用したことは明らかである。一連の *ХрВН* グループの記事と詳細な比較を行ったヴィルクルは、*Н1-М* (*КНС*) 編者が使った *ХрВН* 系列のテキストについて、パレヤ完全版 (Полная паляя) の初期の版もしくは省略される以前の *ХрВН* の初期の版を用いた可能性を指摘している [Вилкул 2019: С.192]。たださらに、*ПВЛ* 907 年のオレーグ帝都遠征の記事も参照した痕跡もある (下注 143, 144)。

なお、二倍以上の分量がある *ПВЛ* 941 年の対応記事と比較すると、*Н1-М* 編者は資料のテキストを不器用に切り貼りしていることがわかる。他方、*ПВЛ* では『聖新ヴァシレオス伝』(Житие Василия Нового) からとった戦いの細部についての資料を活用して記述を拡大しているが、*Н1-М* はこの資料を使っていない [Комментарии 1950: С. 285][Шайкин 2007: С. 613–614]。

140) 「ルーシ人の軍兵を一万の小型船で」は底本 (*Км.*) の *вои русь скидыи* 10 тысящ の読みを採用した。他の写本 (*Бр. Тл. Тр.*) は下線部が *русский* になっているが、これは *скидыи* (σκηδια の音写で小型の船のこと) が理解できなかったための訂正 (誤写) によるものだろう。この部分の典拠になった *ХрВН* 系の資料は в лодях тысящ 10, иже и скъди (一万の船で、すなわち小型船で) との説明文がある [Вилкул 2019: С. 204]。なお、一万隻はいかにも大げさだが、*ПВЛ* の並行記事にも同様の記述があり、これは典拠資料を正確に写した結果である。

141) 「イーゴリ公が (...) 派遣した」(посла князь Игорь) は *ПВЛ* では「イーゴリが進軍した」(Иде Игорь) になっている。この違いについて、シャイキンは *ПВЛ* の編者が、イーゴリが直接戦ったことについての伝承の記事に利用したと推定している [Шайкин 2007: С. 613]。

142) 「ルーシ人は多くの悪事をなした」(и многа зла створиша русь) の文言は 854 年のルーシ人の帝都遠征の記事 [№4] で使われており (上注 78), ここは再使用である。

143) 戦闘の描写で「捕虜に獲る」(имати плѣнники) と「斬る」(посѣкати) は、*ПВЛ* 907 年のオレーグの帝都遠征記事にもあり、*Н1-М* はこの表現を借用した可能性もある (次注参照)。

144) 「戦士たちがよく行うように」(елико же ратнии творят) の文言は、*ПВЛ* の並行記事にはないが、興味深いことに、*ПВЛ* 907 年のオレーグの帝都遠征の記事の中に見出すことができる [ПСРЛ Т. 2: Стб. 21, стрк. 25] (前注参照)。その代わり、以下の [№ 19] の記事では、*ПВЛ* の対応する一節が欠落 (引用されない) している。

145) ロマノス一世レカペノス (Ρομανός Α' ο Λεκαπηνός) (在位 920-944 年)。アルメニアの出身で、海軍の士官、司令長官になり、920 年には前帝コンスタンティノス紫袍帝の岳父の地位を利用して皇帝に即位する。教会政策や外交で手腕を発揮した。*ПВЛ* 945 年に収録されているイーゴリとの協定 (944 年) の当事者でもある。944 年 12 月に息子ステファノスにより廃位、追放され、948 年に流刑地で没している [ODB: p. 1806]。

オスのテオファネス¹⁴⁶⁾ (патрикый Феофан) に軍兵を率いさせてルーシ人を攻めるべく派遣した。そして、火器 (огненным строем) によってルーシ人の船を焼いた¹⁴⁷⁾。ルーシ人は故郷へと帰還した。

【イーゴリの帝都再遠征の準備】 [№ 17]

この年と次の〔年には〕は休んだが、三番目〔の年に〕に進軍した¹⁴⁸⁾。

【イーゴリとオレーグの帝都再遠征の準備】 [№18]

6429(921) 年¹⁴⁹⁾。

イーゴリ [02]とオレーグ¹⁵⁰⁾ [00]の二人は、多くの軍兵¹⁵¹⁾の装備を調えた。〔すなわち〕ヴァリヤー

146) 「パトリキオスのテオファネス」 (патрикый Феофан) の「パトリキオス」は、ビザンツの高級貴族の終身称号である πατρίκιος の音写。「テオファネス」 (Θεοφάνης) は、ロマノス帝（前注）の側近高官。かれは 927 年のブルガリア、934 年のハンガリーとの交渉で政治家としての手腕を発揮し、941 年のルーシ人との海戦の主要な指揮を執った。ロマノス帝廃位後その復位を図ったが失敗して追放された。947 年以降に没している [ODB: p. 2061]。

147) この段落は内容的には *ПВЛ* に対応箇所があるが、テキストは異なっている。ロマノス帝によるテオファネスの派遣については、*ХрВН*, *ХГА* に近い記述があり、*НІ-М* 編者はこれに拠ったのだろう [Вилкул 2019: С. 188–189]。

148) この段落の記事は、コンスタンティノポリスから帰還した年は「この年」（6428(920) 年）と「次の年」（6429(921) 年）（イーゴリとオレーグによる準備の記事がある）は遠征はせずに「休み」、6430(922) 年の記事にあるように「三年目」に、オレーグが遠征を行ったことを指している。明らかに *НІ-М* (*КНС*) 編者が上下の記事を結びつけるために挿入した説明の文言である。

なお、対応する *ПВЛ* のイーゴリの再遠征の準備の記事は、まったく異なった内容である。「イーゴリはやって来て〔帰国して〕、多くの軍兵を集め始め、海の向こうの多くのヴァリヤーク人を呼ぶための使者を遣った。かれらをギリシア人を攻めるよう招いた。再びかれら〔ギリシア人〕を攻める遠征を望んだのである」（Игорь же, пришедь, нача совокупляти воѣ многи, и посла по варяги многи за море, вабя є на греки, паки хотя поити на ня）。*НІ-М* 編者は、この記事（あるいは共通記事）を収録するのを避けて、この段落のいささかそっけない説明文を創作したことになる。

149) この 921 年の段落の *НІ-М* Игорь и Олегъ пристроиста воя многы, и варягы и поляны и словены и кривичи, は *ПВЛ* 944 年冒頭のイーゴリの帝都再遠征の記事 Игорь совокуди воя многы: варягы, и русь, и поляны, и словены, и кривичи, и тиверцы, и печенгы, に対応している。*ПВЛ* のこの部分を改変して、921 年の記事に使った可能性が大きい。下線部の тиверцы и печенгы を削ったのは、*НІ-М* にはこれまでこの部族についての言及がないため。русь を削ったのは *НІ-М* 編者が варяги と русь を同じものと見ていたことによるのではないか。

150) *НІ-М* に Олегъ が挿入されているのは、次の 922 年記事ではオレーグが遠征を指揮しているのに合わせたもの。Игорь を削除せずに、双数形「二人は準備した」（пристроиста）と共同行動であるかのようになっているのは、*НІ-М* 編者のイーゴリ一族中心主義に拠るものだろう。

151) 「軍兵」（вои）は、公が遠征や戦争の際に集め（собрати）、装備を調べて（пристроити）て戦い、帰還したら解散する（опустити）非常備の軍勢のこと。以下に部族名が列挙されていることから、支配下の城市の市民を徴兵したり、傭兵として雇い入れたものと思われる。これは「従士」（дружинники, дружина）と呼ばれている公直属の常備軍とは、はっきりと区別されている。

グ人、ポリャネ人、スロヴェネ人、クリヴィチ人であり、数え切れないほど多くの船だった¹⁵²⁾。

【オレーグの帝都来襲と勝利】 [№ 19]

6430(922) 年¹⁵³⁾。

オレーグ [00] はギリシア人を攻めべく進軍した。そして、帝都へ到来した。ギリシア人はスード〔金角湾〕を封鎖した、城市の城門を閉じた。オレーグ [00] は上陸すると、船を岸に引き揚げるよう命じた。そして、城市の周辺を掠奪し、ギリシア人を多く殺害し、多くの建物 (палаты) や教会が壊された¹⁵⁴⁾。

オレーグ [00] は、車輪を作り船を車輪の上に据えることを自分の軍兵に命じた。順風だった。帆を張った。そして野原から城市〔帝都〕へ向けて進んだ¹⁵⁵⁾。ギリシア人はこれを見て恐れた。そして、オレーグ [00] のもとに使者を遣って言った。「城市を滅ぼさないで下さい、あなたが欲しいだけの貢税¹⁵⁶⁾を課しなさい」。そこでオレーグ [00] は軍兵を止めた。

〔ギリシア人は〕かれに対して食物 (брашно) と酒 (вино) を運んできた。かれ〔オレーグ〕はそれを受け取らなかった。毒が盛ってあったからである。ギリシア人は恐れて言った。「見よ、

152) *HI-M* 編者の挿入句「数え切れないほど多くの船」(и корабля многы бещисленны) は、上注 75 の表現の再使用と考えられる。

153) この 922 年の遠征記事 [№ 19-21] は、イーゴリの帝都遠征記事 [№ 16-18] (*ПВЛ* では 941 年記事に対応) の続きとして考えるなら、*ПВЛ* 944 年のイーゴリの帝都再遠征に対応する記事が置かれるべきである (*HI-M* 編者は *ПВЛ* 944 年記事を知っていたはずである：下注 161)。ところが、*HI-M* のこの箇所では、*ПВЛ* (*Ип.*) 907 年のオレーグによる帝都遠征記事と共通の記事 (部分的に省略され、協定文はない) が置かれている。なぜこのような〈ねじれ〉が生じたのだろうか。ひとつの説明としては、*HI-M* 編者は、イーゴリが直接遠征に参加している記事 (*ПВЛ* 944 年) を避けて、配下の軍司令官であるオレーグを派遣していると解釈できる記事 (*ПВЛ* 907 年) を選んだのではないか。*HI-M* 編者にとってイーゴリは、遠征の英雄というより、キエフの統治者、ルーシの地の支配者としての役割が重要と見なされていたと考えられる。

154) *ПВЛ* の対応記事テキストと対照すると、この箇所で *ПВЛ* にある пожьгоша, а ихъже имяху полоняники, овѣхъ посѣкаху, другыя же мучаху, иныя же растрѣляху, а другыя въ море вметаша, и ина многа зла творяху русь грѣком, елико же ратнии творять. の文言が *HI-M* では欠けている。

155) 車輪を付けた船による帝都攻撃や次の使者による供応と毒の話は、その伝奇性から見て、公の事跡をほめたたえるルーシで成立した讃歌 (слава) 的なフォークロア (『イーゴリ軍記』のジャンルの原型) から題材をとったものではないだろうか。ダニレフスキは、オレーグを「予知の人」とする根拠を旧約『エゼキエル書』の内容に求めているが、テキスト的な対応がなく可能性は低い [Данилевский 2004: С. 151-155]。

156) このビザンツ皇帝との和議のときに言及されるビザンツ側が支払う「貢税」とは、同じ дань の語が使われているが、これはこれまで使われてきた支配者が周辺の諸族に定期的に課する税とは異なり、大国が平和の維持のための贖い金として周辺の諸族に支払う贈物 (一時的の場合も定期的な場合もあった) のことを指している ([田中 1995: 73 頁] 参照)。『帝国統治論』第 8 章にベチェネグ人のもとに派遣される皇帝の使節団の儀礼について述べられているが、ベチェネグ人が和平 (襲撃しないこと) を誓った場合に与えられる「皇帝の贈り物」(βασιλικὰ δωρεῖα) が、この「貢税」(дань) に相当するだろう。これについては以下に記述されるスヴァトスラフ [03] とビザンツ皇帝との交渉の場合も同様である。

これはオレーグ [00] ではない。聖デメトリオス (святѣи Дмѣтрии) がわれらを攻めるべく神から遣わされて来たのだ¹⁵⁷⁾」。

オレーグ [00] は 100 と 200 隻の船¹⁵⁸⁾ に対し、一隻につき 12 グリヴナずつを貢税として納めるよう命じた。一隻の船には 40 人の家臣が〔乗船していたのである〕。¹⁵⁹⁾

【オレーグの戦利品と課税】 [№ 20]

〔オレーグは〕自分では黄金と絹織物¹⁶⁰⁾ (паволокы) を取り¹⁶¹⁾、貢税を課した¹⁶²⁾。これは、今に至るまで¹⁶³⁾ ルーシの諸公に納められている¹⁶⁴⁾。

【オレーグの帝都からの帰還とかれについての評判】 [№ 21]

そして、オレーグ [00] は言った。「お前たちはルーシ人のためには絹織物の (паволочти), ス

157) 「聖デメトリオス」 (святѣи Дмѣтрии; Ἅγιος Δημήτριος) は、3 世紀末～4 世紀初めのテサロニケの聖人。多くの奇蹟譚が伝えられ、中世期にはテサロニケを中心にバルカン半島の南スラブ人に広く崇敬されていた。レフチェンコは、勝利のしるしに盾を城門に吊るしたエピソード [№ 21] も、813 年のブルガリアの王クルムがやはり帝都の城門に槍を立てかけたというテオファネス年代記のエピソードと合わせて、この物語を南スラブ起源のものとしている [Левченко 1956: С. 100]。なお、中世バルカン半島 (ブルアリア) における聖デメトリオス信仰については、[根津 2020] を参照。

158) *Н1-М* では「100 と 200 隻の船に」 (на 100, 200 корабль) だが、*ПВЛ* の対応記事は「2000 隻の船に」 (на 2000 корабль) になっている。2000 隻については、*ПВЛ* の和平協定文にも繰り返されており本来の読みだろう。他方、*Н1-М* の不自然な読みは、二次的に起こった誤記によると考えられる。

159) この [№ 19] のテキストは、欠失部分 (上注 154) とわずかな語順や語形の異同を除けば、*ПВЛ* の対応するテキストと一致している。これは、これまでの「説明癖」による補足や削除とは編集方法が異なっており、編集方針の転換もしくは編者の交代が想定される。

160) 「絹織物」 (паволокы) は、повлекати (覆う) という語から派生した語で、一般に高級な織物を意味する。キエフ・ルーシでは諸公の贈物や交換などに用いられ、加工された高価な絹織物を指すと思われる。この語は『イーゴリ軍記』などキエフ時代の中世ロシアの創作・翻訳文献に広く用いられている [Комментарии 2012: С. 276]。

161) この「黄金と絹織物」 (злато и паволокы) は、*ПВЛ* 944 年のイーゴリの帝都遠征の記事の最後に「自分はギリシア人から黄金と絹織物を取った」 (а самъ вземъ у грекъ злато и паволоки) とあり [ПСРЛ Т. 1: Стб 46]、高価な財物を意味する句としてここから借用した可能性が大きい。さらに、下の記事 (*ПВЛ* に並行記事あり) にキエフへの持参した戦利品として「黄金と絹織物」の言及があるので (下注 172)、その個所も参照したのだろう。

162) この貢税 (дань) は具体的には分からないが、*ПВЛ* 945 年のビザンツとの和平協定文に「ルーシの諸都市に税を払うように。最初はキエフで、さらにチェルニゴフ ...」 (даяти углады на русские города: пѣрвое на Киев, также и на Черниговъ...) [ПСРЛ Т. 1: Стб. 31] とあり、これを指しているのではないか。

163) この「今に至るまで」 (доселѣ) は以下のオリガの事績についての記述にも同じ表現があるが (下注 249)、これと同様に *ДКС* が成立した 1039 年頃を「今」と考えるのが妥当ではないか。

164) ここ [№ 20] は *ПВЛ* のテキストに対応がなく、*Н1-М* 編者の加筆と考えられる。なお、*ПВЛ* ではこの位置に、オレーグとビザンツ皇帝との間で結んだ和平協定書が挿入されている。

ロヴェネ人のためには絹布の¹⁶⁵⁾(кропинны) 帆を縫え¹⁶⁶⁾」。そしてそのようになった。〔オレーグは〕勝利を誇示して自分の盾を門に吊るし、帝都から出発した。ルーシ人は絹織物の帆を、スロヴェネ人は絹布の帆をあげた。すると風が絹布の¹⁶⁷⁾〔帆を〕裂いた。スロヴェネ人は言った〔109〕「われらは自分たちの厚い布 (тольстины) を取り出そう」¹⁶⁸⁾。スロヴェネ人には〔代わりの〕帆¹⁶⁹⁾ が与えられなかったのである¹⁷⁰⁾。

165) 「絹布の」(кропинны) は古スラブ語で絹を意味する коприна の形容詞形[Срезневский Материалы Стб. 1282]とされているが、中世文献の孤語であり解釈は難しい。кропинны прѣ (複数形) は絹布を縫い合わせた帆を意味しているだろうが、直前の高価な「絹織物の」(паволочны) (上注160) と対比されており、絹が材料だと言っているだけなので、特別に加工した織物ではない薄い(風で破れた、「厚い布」と対比されている) 絹布を指しているのではないか。古スラブ語(南スラブ) 起源の語が使われていることからブルガリア産の安価な絹の可能性もある。

166) ここで「縫え」(шите) とオレーグが命じている相手はテキストからは不明だが、貢税(戦利品)を与えるビザンツ側の人間のことでないか。あるいは自分の配下の軍兵たちに命じている可能性もある。

167) 「絹布の」(кропинны) の語の挿入は *Н1-М* 編者によるもの。*ПВЛ* のテキストでは「それを」(я) となっているだけなので、「絹織物の」(паволочны) の帆も破れたと解釈される可能性もあるため、限定したと思われる。

168) *Н1-М* および *ПВЛ* の校訂テキスト ([ПСРЛ Т.3: С.108–109][PVL 2003 vol. 1: p. 184]) の全ては、次の文(「～与えられなかった」)までをスロヴェネ人の言葉としている。しかし、自分たちのことを「スロヴェネ人」と呼ぶのは不自然であり、次の文を著者(編者)の言葉としても意味が通ることから、ここまでをスロヴェネ人の言葉と解釈した。

169) ここ箇所の「帆」(прѣ) は、対応の *ПВЛ*: *Ин, Хлб* のテキストでは「絹布の帆」(пре кропинныя) となっている。なお、リハチョフの校訂は内容的な整合性を優先して、「絹織物の帆」(прѣ поволчиты) という大胆な推定読みを提案している [PVL 2003 vol. 1: p. 184]。

170) この絹の帆を張った船での帰国のエピソードは、やはりフォークロアに基づくエピソード(上注155)と考えられるが解釈が難しい。

大きな枠組みとして、ルーシ人(руси)とスロヴェネ人(словѣне)を対比・対立させていることは確かであろう。そしてここでは、「ルーシ人」はオレーグの配下(мужи)の従士たち、すなわちキエフ人を指しており、これに対して「スロヴェネ人」をノヴゴロドから来た戦士たち、すなわちノヴゴロド人としていることは、これまでの文脈から見てほぼ間違いないだろう。

オレーグは協定を結んだビザンツ人に対して、貢税(戦利品)として、高価な「絹織物」(паволоки)を帆布のかたちで、配下の従士たちのために差し出すよう要求した。ここには盾のエピソードと共通の勝利の誇示(показати победу)があったに違いない。他方、ノヴゴロドから招集(もしくは傭兵)した戦士のためには、おそらく安価な「絹布」(кропинныя)の帆を要求し、それが風で千切れてもオレーグはそれを補充しなかった。常識的には、ここに著者(編者)のルーシ人の優位性の主張とスロヴェネ人に対する嘲笑があるとする解釈が可能である [Тихомиров 1979: С. 39]。他方、リハチョフのように、ノヴゴロド人の質実剛健さを肯定的に描いていると読む立場もある [Комментарии 1950: С. 270]。ペトルーヒンは、このエピソードでルーシ人とスロヴェネ人の対立をことさら見せることで、異教時代のルーシ人を強く肯定したい(特にキリスト教徒であるギリシア人との対立において)という動機が著者(編者)にあったという興味深い見解を示している [Петрухин 2014: С. 270–271]。

オレーグ [00] はキエフに、イーゴリ [02] のもとに¹⁷¹⁾ 帰り着いた。黄金と絹織物¹⁷²⁾ と酒と果実¹⁷³⁾ を携えていた。

〔人々は〕オレーグ [00] を予知の人 (въщии) と呼んだ。それは人々が異教徒であり、無知だったからである¹⁷⁴⁾。

【オレーグの死】 [№ 22]

オレーグ [00] はノヴゴロドへと行き、そこからラドガ (Ладога) へと行った。他の者はまたこう証言している。「かれは海の向こうへ行こうとして、〔その途上で〕で蛇に足を噛まれて、そのために死んだ¹⁷⁵⁾。かれの墳墓はラドガにある」¹⁷⁶⁾。

【イーゴリのドレヴリャネ人とウーリチ人討伐遠征】 [№ 23]

イーゴリ [02] はキエフに座した。公として支配 (княжити) を行い、ドレヴリャネ人 (древляны) と

171) 「イーゴリのもとに」 (и ко Игорю) は、オレーグの遠征が、キエフにいるイーゴリの指示のもとに行われたと印象づけ、イーゴリの主導性を示すための *HI-M* 編者による挿入である。

172) この「黄金と絹織物」 (злато и паволокы) については、オレーグが貢税 (戦利品) として「取った」ものとして、すでに上で言及されている (上注 161)。

173) この「酒と果実」 (вино и оwoщъ) のあとに、*ПВЛ* の並行記事では「あらゆる装飾品」 (всякое узорочье) の語句があったが、*HI-M* 編者は削除したようである。

174) このオレーグについての文言は前後の文脈から浮いており、後年の挿入が疑われる。なお、「それは人々が異教徒であり、無知だったからである」 (и бяху людие погани и невѣгласи) のコメントは 983 年の記事 [№ 83] にも非常に類似した文言があり (下注 492)、同じ編者の手によるものと考えられるべきだろう。

175) オレーグが蛇に噛まれて死んだことについては、*ПВЛ* 912 年の記事にまとまった昔話エピソードが記されている。*HI-M* 編者はこれを知っていた上で、異説として紹介しており、どうやら *ПВЛ* の説には賛同していないようである。さらに、*ПВЛ* では、オレーグの死は情況的にキエフにおける出来事と読めるが、ここでは「海の向こう」 (за море) に行く途上として、オレーグのヴァリャグ人の故地への志向を暗示している。これは、キエフ支配を全面的にイーゴリに帰して、オレーグにその役割を与えない、*HI-M* 編者のオレーグ過小評価の態度の表れではないだろうか。

176) オレーグの墳墓 (могила) の場所については、*ПВЛ* 912 年の記事のオレーグの死の記事の末尾で、「すべての人々は、かれを悼んで激しく泣き、かれを運んでシチェコヴィツァと呼ばれる丘に〔かれを〕埋葬した。今に至るまで〔そこに〕かれの墳墓があり、オレーグの墓と呼ばれている。かれの治世は全部で 33 年であった」 (И плакашася людье вси плачемъ великим, и несоша и погребоша его на горѣ, еже глаголетъся Щеговица; есть же могила его и до сего дни, словеть могила Ольгова. И бысть всѣхъ лѣтъ княжения его 33.) と、キエフで埋葬されたと場所とそれが現存している旨が明記されており、本記事とは事実関係が相違している。

ウーリチ人¹⁷⁷⁾ (угличе) を攻めて掠奪を行った¹⁷⁸⁾。

【スヴェネリドはドレヴリャネ人とウーリチ人に貢税を課す。イーゴリの従士の不満】 [№ 24]

かれ[イーゴリ]にはスヴェネリド¹⁷⁹⁾ (Свенелдъ) という軍司令官がいた¹⁸⁰⁾。かれ[イーゴリ]はウーリチ人を征服して、かれらに貢税を課して、[イーゴリは貢税を] スヴェネリドに与えた¹⁸¹⁾。

ペレセチェン¹⁸²⁾ (Пересѣчень) という名の城市だけが降伏しなかった。[イーゴリは] およそ3年間その周りを攻囲したが、少しのところでは占領できなかった。ウーリチ人はかつてドニエプル川の下流のほうに定住していたが、その後にはブーグ川 (Бугъ) とドニエストル川 (Днѣстръ)

177) 「ウーリチ人」については上注 93 を参照。

178) この段落は、[№ 7] の「[アスコルドとヂールは] ドレヴリャネ人やウーリチ人と戦争状態にあった」を内容的に引き継いでおり、昔キエフを支配したアスコルドとヂールが征服できなかった部族を、今度は新たなキエフ公イーゴリが征服しようとした、という繋がりになっている。同時に以下の、イーゴリはドレヴリャネ人とウーリチ人を征服して課税したが、スヴェネリドを利することになり、それがイーゴリの死の切掛けとなるという物語 ([№ 24-27]) の始まりにもなっている。

179) スヴェネリド (Свѣндель; 標準綴 Свенельд, Н1-М 写本には他に Свенелд, Свинелд) は、ここではイーゴリの「軍司令官」(воевода) で、すぐあとでは「家臣」(муж) であるとされている。他方、*ПВЛ* ではそのような肩書はなく、幼いスヴァトスラフ [03] の後見人、のちにビザンツ遠征に参加した軍司令官として描かれている。*ПВЛ* 971 年の対ビザンツ協定の序文にも、スヴァトスラフ [03] と並んで「スヴェネリドの治世に」(при Свѣнгельдѣ) と共同の統治者とされており、975 年記事では、ヤロ波尔ク [04] を使喚して、弟のオレーグ [05] を殺させている (最後の言及)。Н1-М のこの部分におけるスヴェネリドの扱いは、先のオレーグについての扱いと肩書においても同じであり、編者のイーゴリ公族中心主義 (上注 150) の動機付けに拠っている可能性が大きい。

実際のスヴェネリドは、イーゴリー族とその配下のヴァリャーグ人集団と、ときに共同で行動し、ときには競合していた、独立した集団 (おそらくヴァリャーグ人の) の首長 (公) の一人だったと考えるべきだろう。そのような独立公として、年代記にはオレーグの他にログヴォロド (Рогволод) やトゥール (Тур) などの名を見ることができる。

なお、Н1-М では最初のスヴェネリドについての言及を 922 年の記事に置いているが、その場合かれは 50 年以上 (最後の言及が 975 年 : *Ин.* は 977 年) イーゴリとスヴァトスラフの周辺にいた人物ということになり、これは不自然である。このことは、イーゴリの諸部族平定の記事を編者がオレーグの死の記事に、年代についての配慮なしにそのまま接続してしまったことに拠っている。総じて、Н1-М の 6452(944) 年までの年紀は、*ПВЛ* と比べても歴史的な信頼性は格段に低い [Шахматов 1908: С.6-7]。

180) この表現も公にとっての軍司令官を紹介する定型表現である (上注 115)。

181) イーゴリがウーリチ人から徴収した貢税をスヴェネリドに与えたことについては、下注 190 でも繰り返されている。表現の重複については下注 184 を参照。

182) 「ペレセチェン」(Пересѣчень, 標準綴 Пересечень) は、ウーリチ人の根拠地で、堅固な城砦だったようだが、正確な場所は特定されていない。現在のウクライナの、ドニプロ・ペトロウスク市 (Дніпро; Днепр) 近くに求める説と、現在のモルダヴィアのペレセチノ (Пересечино; Peresecina) に同定する説などがある。われわれの解釈 (下注 183) によれば、ドニエストル川中流域にある後者のほうが可能性は高い。

の間にやってきて、そこに定住したのである¹⁸³⁾。

〔イーゴリは〕ドレヴリャネ人の貢税をスヴェネリドに与えた¹⁸⁴⁾。一戸あたりクロテン(черна куна)〔毛皮一枚づつ〕を取った¹⁸⁵⁾。

従士たちはイーゴリに言った。「見よ、あなたは一人の家臣〔スヴェネリド〕だけに多くを与え過ぎです¹⁸⁶⁾」。

われらは後でこれらの年々に起こったことを話そう¹⁸⁷⁾。

【空の年代】[No. 25]

6431(923) 年。

6432(924) 年。

6433(925) 年。

6434(926) 年。

183) *ПВЛ* には、ウーリチ人(チヴェルツィ人も含む)の居住地について次のような記事がある。「また、ウーリチ人(улучи)とチヴェルツィ人(тиверьци)は、ドニエストル川〔異読：ドニエプル川〕にそって(Лер по Днѣстру; *Ип. Рдз, Акд.* по Днепру)住んでおり、ドナウ川まで(к Дунаєви)広がり住んでいた。かれらは数が多く、ドネストル川に沿って(по Днѣстру)〔異読：ブーグ川とドニエプル川に沿って(*Ип* по Бугу и по Днѣпру)〕あるいは海〔黒海〕まで住んでいた。かれらの城市はいまも残っており、かれらはギリシア人から、大スキタイ(Великая Скуфь)と呼ばれていた」。HI-M の記事は、*ПВЛ* *Ип* 写本の異読と類似ではあるが、「ドニエストル川」と「ドニエプル川」とが異なっており、どれが本来の読みであるかテキスト学的には定め難い。ここでは、HI-M の記述は歴史地理学的に整合であることから、テキスト通り解釈した。すなわち、ドニエプル川下流(右岸)に住んでいたウーリチ人が西進して南ブーグ川とドニエストル川の中流域に移住すれば、キエフの支配地(ポリャネ人の居住域)に南辺で接することになり、キエフの公が征服のための遠征を試みることに適した立地になるのである。

184) この文言は 942 年の記事でも繰り返される(下注 191)。このような重複的な表現は HI-M 編者の編集手法の特徴でもある。

185) この段落の原文、И дасть же дань деревъскую Свѣнделду, и имаша по чернѣ кунѣ от дыма. は、*ПВЛ* 883 年のオレーグの事跡とされている記事「オレーグがドレヴリャネ人を攻めて略奪し、かれらを征服し、かれらからクロテン〔毛皮一枚づつ〕を貢税として取った」(Поча Олегъ воевати деревляны, и примучивъ а, имаше на них дань по чернѣ кунѣ). に対応しており、明らかなテキスト関係がある。「一戸あたり」(от дыма)は、*ПВЛ* の語句を借用したと考えられる(上注 100)。

このような徴税の記事を、スヴェネリドによるものとして改作してここに置いたのは、以下に続く記事にあるように、豊かな貢税を得るスヴェネリドと貧しいイーゴリとその従士の不満(次注)を強調し、945 年の記事につなげる意図が HI-M 編者にあったためだろう。

186) この段落のイーゴリの従士の不満の文言も、945 年のイーゴリの死の記事への導入の意味を持たせるために、HI-M 編者が創作して、この年の記事として挿入したもの(前注参照)。

187) この段落の軍司令官スヴェネリドにかかわる長い記事は、922 年の項に置かれているが(それが不自然であることについては上注 179 参照)、以下に見るように、実際には、940 年～944 年の記事[No. 26]の出来事に接続しており、それを予め解説しているかたちになっている。「後で」(посем)というのはそのことを指している。

6435(927) 年。
6436(928) 年。
6437(929) 年。
6438(930) 年。
6439(931) 年。
6440(932) 年。
6441(933) 年。
6442(934) 年。
6443(935) 年。
6444(936) 年。
6445(937) 年。
6446(938) 年。
6447(939) 年。[110]

【ウーリチ人はイーゴリに課税され、イーゴリはその貢税をスヴェネリドに与える】 [№ 26]

6448(940) 年¹⁸⁸⁾。

この年、ウーリチ人 (уличи) はイーゴリへの貢税を課された〔納税に同意した〕。ペレセチェン〔の城市が〕占領されたのである¹⁸⁹⁾。

この年、〔イーゴリは〕かれら〔ウーリチ人〕に課した貢税をスヴェネリドに与えた¹⁹⁰⁾。

6449(941) 年。

【イーゴリはドレヴリャネ人からの貢税をスヴェネリドに与える】 [№27]

6450(942) 年。

188) 940～944年の記事[№ 26, 27]は空の年紀も含めて、次の945年記事のイーゴリの死のエピソード（ここから *HI-M* と *ПВЛ* のテキストは一致する）に接続させるために、いわばその前置きとして *HI-M* 編者の手で創作され、あまり時間的に離れすぎないように、かつ二つの年に振り分けてこの位置に置かれたと考えられる。

189) この段落の記事を上[№ 24]の内容との関連で解釈すれば、ウーリチ人の中でもあくまで納税を拒否していたペレセチェンの住民も、この城市が最終的にイーゴリの手で征服されたために、イーゴリへの納税に同意したということになる。

190) この内容は上注 181 の 922 年の記事の文言の繰り返しである。同時に、上注 186 の「一人の家臣だけに多く与えず」（се даль еси единому мужевъ много）を具体的に説明するために *HI-M* 編者によってここに置かれた記事だろう。主語が省略されているが、文脈から主語は明らかにイーゴリである。

〔イーゴリは〕ドレヴリャネ人の貢税を、同じくスヴェネリドに与えた¹⁹¹⁾。

6451(943) 年。

6452(944) 年。

**【イーゴリはドレヴリャネ人のもとに徴税に行くが、より多くを望んで殺害される：
945 年】 [№ 28]**

6453(945) 年¹⁹²⁾。この年、従士たちはイーゴリ [02] に言った。「スヴェネリドの従卒たち¹⁹³⁾ (отрочи Свѣньлжи) は武器や衣服を身に付けていますが、われらは裸です。公よ、われらとともに貢税を取りに行ってください。そうすれば、あなたは〔貢税を〕得ることができるでしょう。われらもまた〔得ることができます〕」。イーゴリはかれらの言うことを聞いて¹⁹⁴⁾ 貢税を取りに行き、¹⁹⁵⁾かれら¹⁹⁶⁾〔ドレヴリャネ人〕に暴力を振るった¹⁹⁷⁾。かれの家臣たちもまた〔そのようにした〕〔イーゴリは〕貢税を取って自分の城市〔キエフ〕へ向けて出発した。

かれ〔イーゴリ [02]〕は、帰る途中、いろいろ考えた末、自分の従士たちに言った。「貢税を持っ

191) この文は 922 年の記事の文言の反復（上注 184）であると同時に、前注のウーリチ人の貢税をスヴェネリドに与えたことと、主語の省略も含め同じ構文であり、やはり同じ趣旨で *HI-M* 編者によって創作されて、この年代に置かれた記事だろう。

192) この 6453(945) 年から 6523 (1015) 年までの記事は、それ以前の記事とは異なり、*HI-M* と *ПВЛ* とはテキストの順番も内容も基本的に同一であり、テキストの異同は部分的な語句の加筆・修正や削除・脱落にとどまっている。つまり、*HI-M* では、この箇所から明らかに記事編集の仕方が変わっている。*ПВЛ* にとってもここが編集の切れ目であることは、「6453(945) 年」の年紀がここでダブって繰り返されていることから分かる。

193) 「従卒」(отрочи; отрок) とは、語の本来は「未成年者」を意味するが、ここでは公の従士団(дружина)において、бояре(貴族)(本文では муж とも呼ばれている)の身分に対して低い身分の構成員を指している。年代記の 10 世紀の記事に頻繁に言及され、бояре が公に対して一定の独立的地位を保っていたのに対して、отроки は側近集団として公に仕えて、遠征に参加するだけでなく、徴税や裁判など公の業務を執行していた[Горский 2019: С. 238]。

194) この箇所に、*ПВЛ* 並行記事では「ドレヴリャネのところへ」(в Деревя)の句があるが、*HI-M* では欠落している。これは、*ПВЛ* では、914 年記事にイーゴリはドレヴリャネ人からすでに徴税していたことが書かれているが、*HI-M* ではこれに対応する記事はなく、反対に[№ 24,27]で、ドレヴリャネ人の貢税はスヴェネリドに支払われていたことが二度にわたって記されていることから、矛盾を生じさせないために *HI-M* 編者がこの文言を削除したと考えられる。ただ、以下の展開から、イーゴリはドレヴリャネ人のもとに行ったのは明らかである。

195) ここに *ПВЛ* 並行記事では「最初の貢税を増やすことを企図して」(примышляше к первой дани)があるが、*HI-M* では欠落している。これも、前注と同じ理由による *HI-M* 編者による削除だろう。

196) この「かれらに」(имъ)が誰であるか、資料の文言の削除によって、*HI-M* では分からなくなっているが、*ПВЛ* の文脈からはドレヴリャネ人であることは明らかである（上注 194）。

197) 「暴力を振るった」(насиляше)は暴力的手段による徴税のこと（上注 102 参照）。

て故郷へ帰れ。わたしは引き返して、もっと先に行くつもりだ」。かれ〔イーゴリ〕は自分の従士たちを故郷へ返し、より多くの財物(имѣния)を〔得ようと〕望んで、少数の従士たちを連れて引き返した。

ドレヴリャネ人は〔イーゴリが〕再びやって来ると聞いて、ドレヴリャネ人は自分たちの公(князь) マール¹⁹⁸⁾ (Мал) と相談して〔言った〕。「もしも、狼が羊たちのところに入出入りするようになれば、群を全部くわえ出すでしょう。それを殺さないかぎりには。〔今まさに〕それと同じなのです¹⁹⁹⁾。もしも、われらがかれ〔イーゴリ〕を殺さなければ、かれは、われらすべてを滅ぼすでしょう」。

そして、〔ドレヴリャネ人は〕かれ〔イーゴリ〕に使者を遣って、こう言った。「あなたは何のために再び来るのですか。すでに貢税を全て取り立てたではありませんか」。イーゴリは、〔それを〕聞き入れなかった。すると、ドレヴリャネ人はコロステニ²⁰⁰⁾ の城市から (из града Коростеня) 出撃して迎え撃ち、イーゴリとかれの従士たちを殺した²⁰¹⁾。かれらは少数だったのである。

そして〔ドレヴリャネ人は〕イーゴリを埋葬した。かれの墳墓²⁰²⁾ (могила) は今日に至るまで²⁰³⁾、ドレヴリャネ人のところ、コロステニの城市の近く (близъ града Коростеня) にある。

198) ドレヴリャネ人の公「マール」(Мал) はこのエピソードの中では名が言及されるだけで、つねに受け身に描かれている。また、15世紀のポーランドの歴史家・ヤン・ドゥウゴシュは、イーゴリ殺害を語る一節の中で、ドレヴリャネ人は「ルーシの氏族で自らの公ニスキナを」(Ruthenici generis ducem proprium Niszkinam) 持っていたと、「ニスキナ」(Niszkinam) という別の名を紹介している [Щавелева 2004: С. 79]。このように見ていくと、名前も存在も伝説的な要素が強い人物ではないか。なお、*НІ-М (ПВЛ)* 970 年記事に、マルーシャ (ウラジーミル聖公の母) とドブリニャの父親としてリユーベチ人マルコ (Малко Любцианинъ) が言及されており、これと同一人物とする説も提起されているが (シャフマトフなど) 根拠は薄い。

199) この文言は以下にも繰り返されており、内容はいかにも諺に似ていて、フォークロア起源であることは疑いない。ウラジーミル・ダーリの諺集にも、狼と羊の例えとしては、И волки сыты, и овцы целы。(狼が満腹なら羊は安全), Будут овцы целы, коль стадо волк сторожит。(狼が群れを見張っていれば、羊は安全), Волка бьют не за то, что сер, а за то, что овцу съел。(狼が打たれる〔殺される〕のは灰色だからではなく、羊を喰うからだ) などの類似の諺を見出すことができる。

200) 「コロステニ」(Коростень) は、ドレヴリャネ人の拠点城市で、通説では現在のウクライナ、ジトミル州の都市コロステニ Коростень に相当し、プリピャチ川支流のウジ川 (Уж) 河岸に立地している。キエフから北西へ 142km ほど離れている。*НІ-М* の綴りでは Коростень (部分的に *Км. Коростень*) だが、*ПВЛ* はすべての写本が Искорогѣнь (Изькоростень) と綴られている。これは、接頭辞 из- (ис-) と語根 Коростень が膠着して形成されたもので、*НІ-М* の読みが本来的だろう。*ПВЛ* の表記は изъ града изъ-Корьстѣня の前置詞との結合形が、記事制作・編集過程で地名として再認識されたことによる可能性もある。

201) レオン・ディアコノス (Λέων ο Διάκονος) は『歴史』(Ιστορία) 第 6 書 10 節の中で、945 年にビザンツ遠征したイーゴリの末路について触れている皇帝ヨハネス・ツィミスケスのスヴァトスラフ [03] 宛の書簡を引用しており、その中でイーゴリは「ゲルマン人のところに (παρὰ τοὺς Γερμανοὺς) 遠征したときに、捕らえられて、木柱に縛り付けられ、二つに引き裂かれた」とされている [Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 194-195]。この「ゲルマン人」は「ドレヴリャネ人」が誤ってビザンツに伝えられたと考えられるが、イーゴリを「殺した」状況については事実を伝えている可能性が高い。

202) このイーゴリの墳墓 (могила) を妻のオリガが造らせたことについては、下注 228 参照。

203) この「今日に至るまで」(до сего дни) の「今日」は、上注 67 の記述および記事内容が類似している下注 397 のオレーグの墳墓についての記述と同様に、*ДКС* が成立した 1039 年頃と考えるべきだろう。

【ドレヴリャネの公マールはオリガのもとに求婚の使節を派遣する：945年】[№ 29]

オリガは自分の息子の幼いスヴァトスラフ [03] とともにキエフにおり、かれの養育係 (кормилец) はアスムード (Асмудь)²⁰⁴⁾ だった。軍司令官はスヴェネリド (Свъньделдь) だった²⁰⁵⁾。この者はまたミスチシャの父 (тътъ же отецъ Мьстишинъ) でもある²⁰⁶⁾。

ドレヴリャネ人は互いに言い合った。「見よ、われらはルーシの公を殺した。かれの妻オリガを自分たちの公マール (Мал) の〔妻とする〕ために捕らえようではないか。そして、スヴァトスラフ [03] も〔捕らえて〕、かれ〔マール〕の思うままにしよう」²⁰⁷⁾。

ドレヴリャネ人は、その数 20 人の最良の家臣を船でオリガのもとへ派遣し、ポリチェフ²⁰⁸⁾ [の坂の] 下に船を停泊させた。当時、水がキエフの丘のそばを流れていて、人々は平地²⁰⁹⁾ (на

204) 「養育役」(кормилец) は公族の息子の養育、教育にあたる師傳に相当し、おそらく貴族 (боярин) に相当する高位の人物が担当し、公の息子が成人しても一定の影響を持っていた。キエフ・ルーシ時代の年代記には数人のそのような人物が言及されている (ヤロスラフ賢公の養育役ブーディ (Буды)、モノマフ公の息子ユーリイの養育役ゲオルギイ・セミョノヴィチなど) [Комментарии 1950: 295]。アスムード (Асмуд) の出自等は不明だが、後の記事でもスヴェネリドと並んで言及されている。

205) このスヴェネリドの紹介の文言は、*НМ* 編者による公の交代の際の定型表現である (上注 115)。

206) 「この者はまたミスチシャの父でもある」(тътъ же отецъ Мьстишинъ) は構文的に文脈から浮いており、後年の加筆の可能性はある。内容から Мьстиша は加筆の時点では有名だったようだが、その名はこの箇所以外には年代記にない。そのことから、シャフマトフは、Мьстиша が、*ПВЛ* 975 年記事で紛争の末にオレーグ [05] に殺された、スヴェネリドの息子リュート (Лют) と同一人物ではないかと推定している。М(ь)стиша は正式名 Мстислав の指小形 (Святоша ← Святослав) であり、Лют は形容詞形 лютый (苛烈な) からきたあだ名 (通用名) と解釈できることから、同一人物とみなす可能性はある。そして、*Н41024* 年記事で、ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [18] が Лютый Мстислав と呼ばれていることから、この名の人物が登場するフォークロア伝承 (歴史歌謡) があったことを想定して、その原型がミスチシャであり、*ПВЛ* 975, 977 年記事の資料ともなったと考え、プリリーナ資料 (Волга Святославич и Микюла Селянинович) などを分析して、同一人物説を提起している [Шахматов 1908: С. 3–12]。

207) 「かれの思うまま」は、ひとまず底本 (*Км.*) の якоже хочеть (三人称単数) を採用した。*Бр.* (および *Ип*, *Лвр*, *НК1*) では якоже хочемь (一人称複数)、*Тр.* では якоже хочеш (二人称単数) である。

なお、このドレヴリャネ人の言葉は、これに続いて求婚の使節が派遣されることから見て、通常の協定による王族間通婚のことを言っているだろう。後年のスヴァトスラフ [03] にとってのリュウベチのマルーシャやヤロ波尔ク [04] とウラジーミル [06] にとってのボロツクの公女ログネダの例に見るように、征服したり協定を結んだ土地の公や族長の娘を妻とすることは、ルーシ人のみならず、東スラブに展開した征服者集団 (広い意味でのヴァリャーグ人) にとっては通常の慣習として存在したと考えられる [Петрухин 2000: С. 157]。この言葉からは、ドレヴリャネ人の支配公たち (マールに代表される) は、ルーシ人支配公と同様に、ヴァリャーグ人起源であった可能性も考えられる。

208) 「ポリチェフ [の坂]」(Боричев) については上注 60 を参照。

209) この「平地」(поле) は、*ПВЛ* 記事ではキエフの下町である「ポドール」(на Подольи; на Подолѣ) になっている。土地勘のない *НМ* 編者が *ПВЛ* の固有名詞 (こちらが本来的な読みだろう) を誤読して普通名詞の поле にしたのではないか。

полѣ)に住んでおらず、丘の上に〔住んでいた〕。〔そこにあった〕城市(град)がキエフだった。そこにはいま、グロジャタとニキフォル〔111〕の屋敷(Гродятинъ и Микифоровъ дворъ)がある。公の屋敷は城市の中にあった。そこには今²¹⁰⁾、ヴォロチスラフとチュダの屋敷(дворъ Воротиславль и Чюдинъ)がある。最初は、屋敷はこうして城市の外にあった²¹¹⁾。二番目〔の屋敷〕はそこ〔城砦内〕の石造りの高樓²¹²⁾(теремъ камень)だった²¹³⁾。

ドレヴリャネ人が来たことがオリガに告げられた。そこでオリガはかれらを自分のもとに呼び入れ、かれらに「よい客人が来た」と言った。²¹⁴⁾そしてオリガは言った「何のためにあなたはここへ来たのか、言いなさい」。ドレヴリャネ人は言った。「ドレヴリャネ人の地がわれらを遣わしました。次のことを言付かりました『われらはあなたの夫を殺した。あなたの夫が狼のように盗みや掠奪を行っていたからである。他方、われらの公たちは善良であり、われらの地を豊かに満たしている²¹⁵⁾。われらの公マールに嫁がれよ』」。ドレヴリャネ人の公の名はマールだったのである。

210) この箇所のキエフの丘についての地勢情報は非常に詳しいが、名が挙がっている屋敷の所有者についての詳細はほとんど分かっていない。公の屋敷(宮廷)が別の場所(おそらくヤロスラフ城区(город Ярослав)に移ったあとに、最も古いこの城区に移り住んだ貴族(бояре)たちではないかと推定できるに過ぎない。なおР・トロチコはこれらの屋敷の位置を推定してウラジーミル城区(город Владимира)の地図上に示している[Толочко 1983: С. 195]。なお、ここの「今」(ныне)の語はНІ-М, ПВЛ, НКІすべての写本にあり、本年代記のこの語の用法から推察して(下注467)КНСが編纂された1095年頃と考えるべきだろう。

211) この文 а первѣ сие бѣ внѣ града дворの「最初は」(первѣ)の語は、ПВЛ(НСГも同じ)ではすべての写本で перевѣсичеになっており、「こうして」(сиче)はない。перевѣсичеの語はПВЛ(НІ-М)947年記事にもあり、「狩場」(ловище)と並んで公と従士たちの支配と活動の象徴である「鳥網場」を意味している。ПВЛの読み(Ип. а переѣсиче бѣ вне города)が公の住居と活動の描写としては自然であり、НСГにも伝わっていることからより古く、НІ-Мの読みは上注209と同じく、土地勘のなさから後年に改変された二次的なものではないか。

212) 「高樓」(теремъ)はтѣремѣновの音写語で、支配層が居住する高い建物を指し、天蓋の屋根がかけられていたという。都市民の住居(хором)とは異なり通常は石造りだった[Колесов 1986: С. 206–207]。

213) ПВЛ(Рдз.)では続いて и бѣ внѣ града дворъ другой, идеже есть дворъ Демьстиковъ. За святою Богородицею, надъ горою дворъ теремный, бѣ бо ту теремъ камень(城市の外にも一つの屋敷があった。そこにはデメスチクの屋敷が〔いまは〕ある。聖母教会のうしろの丘の上方に高樓の屋敷があるが、それはそこに石造りの高樓あったからである)と長い文言がある。НІ-М編者は大幅にこれを削除して、下線部分だけをテキストに残したと考えられる。

214) ПВЛではこの個所に и реша деревляне: «Придохомъ, княгине»(ドレヴリャネ人は言った『公妃よ、われらは来ました』)の文言があるが、НІ-Мでは欠落している。これについてはНІ-Мでの削除、ПВЛでの加筆の両方の可能性がある。

215) 「われらの地を豊かに満たしている」(расплодили землю нашу)は、「序文」の著者が表明している、公(князь)の理想的な統治の姿であり(上注38)、ここでは自分の公について理想像をドレヴリャネ人の口から言わせていると考えられる。

【オリガの第一の復讐：ドレヴリャネ人の使者たちを船ごと穴に埋める：945年】[№ 30]

オリガはかれらに言った。「わたしにはあなたたちの言葉が気に入りました。もうわたしは、自分の夫を生き返らせることはできない²¹⁶⁾。しかし、明朝にわたしは、自分の家臣たちの前であなたたちに榮譽を表したいと思います。今は自分たちの船に戻り、威張って²¹⁷⁾ 船に入りなさい。わたしは、明朝、あなたたちを迎えに人を遣ります。〔そのとき〕あなたたちは威張ってこう言いなさい。『われらは馬でも行かぬ、徒歩でも行かぬ。われらを船に乗せたまま運べ²¹⁸⁾』。そうすれば、あなたたちは船に乗せたまま運ばれるでしょう」。そして、かれらを船に帰らせた。

それからオリガは、城市の外の高楼(терем)のところに、大きくて深い穴を掘るように命じた。

翌朝、オリガは高楼に座して、客人を迎えに人を遣った。〔使者たちは〕かれらのところにやって来て言った。「オリガが大きな榮譽を表するためにあなた方を呼んでいます」。かれらは言った。「われらは馬でも車でも行かぬ、徒歩でも行かぬ。われらを船に乗せたまま運べ」。キエフ人は言った。「われらは仕方ありません。われらの公は殺され、またわれらの公妃はあなた方の公に嫁ごうとしています」。そして、かれらを船に乗せたまま運んだ。かれら〔ドレヴリャネ人の使者たち〕

216) 「自分の夫を生き返らせることはできない」(уже мнѣ своего мужа не въскреси́ти [ПВЛ крѣсити]) は、『イーゴリ軍記』では、「イーゴリの栄えある軍団を生き返らせるすべはない」(а Игорева храбраго плъку не крѣсити) の形で二度繰り返されており、また уже не крѣсити の句は年代記の他の箇所 (ПВЛ1015 年 ヤロスラフ賢公 [13] の言葉、К/Г 1148 年記事イジャスラフ [D112:I] の言葉) にもあらわれており、何らかの慣用句であることは明らかである。リハチョフは、この箇所を参照して、元来は親族による復讐(血讐)を行わないことを宣言する誓言句だったが、時代が移るにつれて近親者を亡くした者への労りの言葉に変化したと推定している [Лихачев 1950: С. 419–420]。

他方、チジェフスキイは、公族の文化におけるスカンジナビアの要素とその年代記における表現についての記述の中で、ヴァリャグ的伝統としての血の復讐を宣言する文言と解釈している [Чижевський 1956: С. 33–34]。これは、次の記述に復讐物語が続くことからの推定だが、オリガやヤロスラフ賢公の例では、この文言を相手に伝えたあとで、油断した相手に復讐をしていることから、やはり本来は〈降伏〉もしくは〈和解〉を伝える文と理解すべきではないか。『イーゴリ軍記』の用法でも敗北した側の言葉として語られている。定型句として残されてきたことから見て、起源的には死者が出た抗争や戦争のときに、主に非勢の側から交渉を提案するときに慣用されていた宣言文と考えられないだろうか。なお、Н/М въскреси́ти は ПВЛ крѣсити に対して、明らかに二次的な読みである。

217) この使者の態度としての「威張る」(величати́ся) (以下にもすぐに繰り返されている) は、ここでは道徳的な意味合いよりも、「自分を偉く見せる」「着飾る」、すなわち求婚儀礼における正装を身に着けるという意味に解釈すべきだろう (下注 219, 220)。

218) このエピソードで二回繰り返される「われらは馬でも行かぬ、徒歩でも行かぬ。われらを船に乗せたまま運べ」(не иде́мъ на конехъ, ни пѣши иде́м) はそのリズムからフォークロア起源であり、前半部を謎かけ(загадка)と解すれば、謎とき(отгадка)が「船」(ладья)になるような句である。オリガは、使者に対して謎をかけることで、使者に対して「榮譽を表して」いると同時に、その謎の裏にある埋葬礼儀(下注 221 参照)を暗示していることになる [Карпов 2009: С. 92]。

は〔船の中に〕座って、マントを羽織り、〔それを〕大きな留金でとめて²¹⁹⁾ 驕り高ぶっていた²²⁰⁾。再び、かれらをオリガの屋敷に運んで来ると、たちまち、かれらを船もろとも穴の中に投げ込んだ²²¹⁾。

オリガは〔高樓から〕かれらのほうへ降りてきて、身をかがめると、見て、かれらに言った。「あなたたちはドレヴリャネの地の使者で、自分のたちの公マールのところからわれらのもとに来た。この栄誉はあなたたちにとって良かったか²²²⁾」。かれらは言った。「われらにとって、イーゴリの死よりも悪い」。オリガ公妃は、かれらを生きのまま埋めることを命じた。そしてたちまち、かれらは埋められた。

【オリガの第二の復讐:ドレヴリャネ人の高級使節団を風呂の中で焼き殺す:945年】 [No. 31]

一方、オリガはドレヴリャネ人のもとに使者を遣り、かれらにこのように言わせた。「もし本当にあなたたちがわたしを求めるのなら、[112] 身分の高い家臣²²³⁾を派遣しなさい。そうすれば大なる栄誉をもってあなたたちの公に嫁ぎましょう。なぜならば、キエフの人々はわたしを行かせないでしょうから。ドレヴリャネ人はこれを聞いて、ドレヴリャネ人の地を統治していた最良の身分の高い家臣を選び出し、オリガを迎えに遣った。

ドレヴリャネ人がキエフに、公妃オリガのところに到着すると、オリガはドレヴリャネ人の

219) 「大きなマントを羽織り、〔それを〕大きな留金でとめて」(в великих перегахъ и сустугахъ) の перегахъ は高価な飾り布で仕立てたマントのこと、сустугъ は金属の留金(ボタン)のこと。перегахъ については「腰を突き出す」動作とする解釈([Срезневский Материалы: Стб. 902][Львов 1975: С. 75][ロシア原初年代記: 63 頁])が従来なされてきたが、近刊の辞典による語義研究の成果([СлРЯ XI-XVII Вып. 14: С. 230][СДРЯ Т. VI: С. 368])や色鮮やかなマントと丸い留金が描かれている『ラヂヴィール年代記』の対応の挿画(No. 63)、さらに文脈の自然さから判断して「マント」と解釈した。

220) 「驕り高ぶっていた」(гордящися) は先の使者たちの儀礼的態度「威張る」(величашися)(上注 217)の同義的な繰り返しだが、ここではキリスト教的な罪と結びついた гордиться の語が使われている。オリガによる使者殺害をキリスト教な懲罰として解釈するために、後代の編者が語の置き換えを行った可能性も考えられる。

221) このドレヴリャネ人の使者を船に乗せて運び、生き埋めにする行為について、リハチョフは、スラブ人の葬儀の儀礼における初めの段階に比している。つまり、使者たちにとって、求婚儀礼の初めの段階である嫁迎え(сватовство)だったが、オリガにとってはドレヴリャネ人の葬式という二重の意味で描かれているとする。そして、ルーシ人の風習に関するアラブ史料などを参照しながら、「船による埋葬」はもっとも古層に属する葬儀儀礼だったとしている[Комментарии 1950: С. 297-298]。

222) ПВЛ 並行記事ではこの箇所は「オリガは身を屈めて、かれらに言った。この栄誉はあなたたちにとって良かったか」(прикикъши Ольга и рече имъ «Добра ли вы честь?»)だが、НІ-М ではゴシック体で示したように、オリガの言葉が拡大されている。これはその前後の細かい付加も含めて、НІ-М 編者の「説明癖」による過剰な補筆と考えるべきだろう。

223) 「身分の高い家臣」(мужи нарочиты) は、語源的には、誰もがその人物の名を口にする(нарекати)するような共同体における著名人のこと[Колесов 1986: С. 177-178]。ここでは、以下に「ドレヴリャネ人の地を支配する」(иже держаша деревьску землю)とあることから、ドレヴリャネ人の諸氏族を代表する族長たちを指しているのだろう。

家臣たちを榮譽をもって受け入れ、かれらのために風呂を調える²²⁴⁾ (МОВЬ СТВОРИТИ) よう命じて「入浴を終えたら、わたしのところへ来なさい」[と言った²²⁵⁾]。かれら〔キエフ人〕は風呂小屋をひどく熱くした。ドレヴリャネ人が入浴するために〔風呂場に〕入った。そして、かれらを風呂小屋に閉じ込めた。〔オリガは〕かれらを戸口から〔火をつけて〕焼くように命じ、すべての者が焼け死んだ。

【オリガの第三の復讐：自らドレヴリャネの地へ行き、夫の追善の酒宴で招いた5千人のドレヴリャネ人を切り殺す：945年】 [№. 32]

〔オリガは〕これに付け加えてドレヴリャネ人に使者を遣って、次のように言わせた。「見よ、いまからわたしはあなたたちのもとへ行くとことです。わたしの夫を殺したその城市のところに多くの蜂蜜酒²²⁶⁾ (МЕДЫ) を準備しなさい。わたしがかれの墓 (ГРОБ) の上で泣き、自分の夫の

224) 「風呂を調える」 (МОВЬ СТВОРИТИ) は、*ПВЛ* 1071 年記事で、呪術師が人間の創造について「神が風呂場で入浴して汗をかき、布で体をぬぐったところ、天上から地上へ〔人間が〕落ちた」 (МЫВСЯ БОГЪ В МОВНИЦИ И ВЫСПОТИВСЯ, ОТЕРЬСЯ ВЪХТЕМЬ, И СВЪРЖЕ С НЕБЕСИ НА ЗЕМЛЮ) と語っており、また、*ПВЛ* の使徒アンドレアスのノヴゴロド訪問のエピソードでも描かれているように、スラブ人にとって儀礼的な意味が強かった。さらに、*ПВЛ* 907 年のビザンツ皇帝の協定書の中で、オレーグは「〔ルーシ商人が〕望むように風呂を調えさせる」 (ДА ТВОРЯТ ИМ МОВЬ, ЕЛИКО ХОТЯТ) ことを要求しており、スラブ人の上流層の儀礼においては、相手に「榮譽を表する」 (ПОЧЕСТИ, ЧЕСТЬ СОТВОРИТИ) 手段だったと考えられる。また、ТВОРИТИ МОВЬ の定型句は、後年の、異教風習を摘発する文献の用法と対照すると、結婚、埋葬、出産の際の民間の通過儀礼としての「儀礼的な入浴」を表現している。その意味では、オリガは第二の復讐において、使者に対して求婚の通過儀礼を象徴的に行わせながら、巧みにこれを埋葬儀礼に象徴転換するという、策略（もしくは呪術的な行為）を行使したと解釈することができるのではないかと [Бобров 2004: С. 95–100] (上注 221 も参照)。なお、ボブロフは、入浴の儀礼的な行使を、北方ロシアの入浴慣習（体を叩いたり、香料を使用する）と関連させて考察しており、オリガのこの復讐も北方のプスコフ出身者ゆえに可能だったと考えている [Бобров 2004: С. 109, 116]。

225) 対応の *ПВЛ* には「と言った」 (РКУЩИ СИЦЕ) とあるが、*НІ-М* (全写本) では抜けている。*НІ-М* 編者の不注意による脱落ではないか。

226) 「蜂蜜酒」 (МЕДЫ) は、水と蜂蜜を混ぜて放置するとアルコール発酵することから、最も原始的な発酵飲料である。その酤配作用は古代的な社会では広く宗教・儀礼行為と結びついて使われていた。森の国であるドレヴリャネ人の地では、蜂蜜が多く採取されたはずであり、蜂蜜酒を醸す（蜂蜜を発酵させ、熱を加えてアルコール度数を上げる）ことは伝統的な産業だっただろう。

ために追悼会²²⁷⁾ (тризна) をすることができるように」。かれらはこれを聞くと、非常に多くの蜂蜜を持ち寄って醸し始めた。

他方、オリガは少数の従士たちを率いて、軽装備でかれ〔イーゴリ〕の墓 (гробъ) のところへやって来ると、自分の夫を思って泣いた。非常に激しい泣きかただった。そのとき、〔オリガは〕自分の家来たち (люди) に、土を盛って大きな墳墓²²⁸⁾ (могила) を造るよう命じ、かれらが土盛りをすると、追悼会を催すことを命じた。

その後、ドレヴリャネ人が酒席につくと、オリガは自分の従卒たちに命じて、かれら〔ドレヴリャネ人〕の前で給仕させた。ドレヴリャネ人はオリガに向かって言った。「われらの従士たち²²⁹⁾はどこにいるのか。われらは、あなたを迎えにかれらを派遣したのだが」。かの女は言った。「かれらは、わたしの後からわたしの夫の従士たちとともに来るところです」。ドレヴリャネ人が酔うと、〔オリガは〕かれらの〔栄誉の〕ために飲む²³⁰⁾ よう自分の従卒たちに命じ、自分は脇へ退いて、従士たちに命じてドレヴリャネ人を斬り殺させた。斬り殺したのは5千人だった。

他方、オリガはキエフに戻ると、かれら〔ドレヴリャネ人〕の残りを攻めるべく、軍兵の装備を調えた。

【スヴァトスラフのドレヴリャネ人討伐遠征 :946 年】 [№ 33]

スヴァトスラフ [03] の公支配のはじまり²³¹⁾。

227) 「追悼会」(тризна) は、スラブ人の伝統的な葬礼の締めくくりに行われる、共食、儀礼的哀泣、遊戯、供犠などをともなう一連の葬送儀礼を指している。10 世紀のビザンツ歴史家レオン・ディアコノスは、『歴史』第 9 書 6 節でトラキアに遠征したスヴァトスラフ [03] の陣営で 971 年に行われた、戦死者の葬礼にともなう捕虜の焼殺を「祖先の風習」の供犠として描き出しており [Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 208]。また、ロシアの民間に保持された追悼儀礼でも、儀礼的な拳闘や闘争が行われたという記録がある [Славянские древности Т. 5: С. 317]。これまでのオリガの復讐譚のフォークロア的性格 (上注 218, 221, 224) を考慮に入れると、以下のオリガの命令による 5 千人のドレヴリャネ人斬殺も、事実の記述というよりも、そのような儀礼的な供犠や闘争がフォークロアとして伝わったものが資料となった可能性が高い。

なお、後代の教会文献では、このような民間の追悼儀礼 тризнище を異教的として非難しており、のちにキリスト教に改宗したオリガ自身も、自分の葬儀に тризна を行うことを禁じている (下注 333 参照)。

228) オリガがその前 (上) で泣いた「墓」(гробъ) が、イーゴリが埋められた (погребоша) 場所であるのに対して、「墳墓」(могила) (上注 202 参照) は、その上にさらに盛り土をしたり、副葬品を埋めたりする埋葬施設のこと。日本の古墳に相当し、現在のロシア語では курган と呼ばれている。

229) ここでは「われらの従士たち」(дружина наша) と言っているが、第一 [№29, 30] と第二 [№ 31] の復讐のエピソードでオリガを迎えるために派遣され殺された、ドレヴリャネ人の高位の家臣たち (лучшие мужи) のことを指している。

230) 「かれらのために飲む」は底本 (K.) の пи́ти на нѣ の読みを採用した (Ип., Лер., НК1. пи́ти на ня)。Ак пи́ти на конѣ (馬上で飲む), Бр. съ́сти на конѣ (馬に乗る), Тр. наливати (注ぐ) の異読は文脈に合わない。

231) 「スヴァトスラフの公支配のはじまり」(Начало княжества Святослава) の表題的な文言は、Н1-М と ПВЛ のすべての写本にあり、もっとも古い編集の際に記されたものだろう。

6454(946) 年

オリガは自分の息子スヴァトスラフ [03] とともに多くの勇敢な軍兵を集め、ドレヴリャネ人の地に進軍した。ドレヴリャネ人は「城市から」出撃して迎え撃った。双方の部隊が遭遇すると、スヴァトスラフ [03] は、ドレヴリャネ人に向かって槍を投げた。[113] 槍は馬の両耳の間を飛んだ「ただだった」²³²⁾。かれがとても幼かったからである。スヴェネリド (Свѣнделдъ) とアスムード (Асмуд) は言った²³³⁾。「公はすでに頑張っている」²³⁴⁾。従士たちよ、われらも公に続いて頑張ろうではないか」。そして、ドレヴリャネ人を打ち負かした。²³⁵⁾

【オリガはドレヴリャネ人に対する貢税を定める：946 年】 [№ 34]

そしてかれらに重い貢税を課した。貢税の「三分の」二はキエフに行き、三分の一はヴィシエゴロド²³⁶⁾ (Вышегород) のオリガのもとに「行った」。ヴィシエゴロドはオリガの城市だったからである。

232) この公が槍を投げるのは、矢を射かける行為と並んで、軍の指揮者が戦闘開始を宣する儀礼的な行為だった [Комментарии 2012: С. 294–295][Творогов 1997: С. 499]。これについて、チジェフスイはゲルマン民族をはじめとするヨーロッパ古代・中世の戦争儀礼、後年の『キエフ年代記』からの事例などあげて考証している [Tschizewskij 1968: pp. 15–18]。

「両耳の間を飛んだ」というのはスヴァトスラフ公が年少だったため、敵に届かなかったということ。*ПВЛ* では「馬の足に当たった」(и ударил в ноги коневу) の文言があり、自分の馬の脚元に落ちたということを知りたいのだろう。*НМ* 編者は、戦闘開始の象徴としての槍投げの意味を解さなかったために、この文言を削除したのではないか。

233) 「スヴェネリドとアスムードは言った」(рече Свѣнделдъ и Асмуд) は動詞が単数形であることから文法的に乱れており、どちらかの名があとから挿入されて伝わった可能性がある。上のテキストにスヴェネリドについての挿入の痕跡があることから (上注 205, 206)、この箇所も同様に «Свѣнделдъ и» が後で挿入された可能性が高い。

234) 「頑張った」(потягълъ) は *ПВЛ* では *почаль* (始めた) になっている。*ПВЛ* の文脈では何を「始めた」のかを理解できなかった (上注 232 参照) *НМ* 編者が、次の語を先取りして、ここに繰り返したと考えられる。なお、「頑張る」(потягнуги) の語の原義は、筋肉と神経を張り詰めて行動することで、戦闘、行進など様々な行為を表すことができる。971 年記事のスヴァトスラフの従士団に対する呼びかけにも使われている (下注 356)。

235) 『原初年代記』ではこのあとに、「オリガの第四の復讐」の長い物語が挟まれている。[№ 33] と [№ 34] は内容も構文もスムーズにつながっていることから、現在の通説では *ПВЛ* 編者による挿入があったと考えられている [Шахматов 1908 (2002): С. 90–91][Творогов 1976: С. 22–23]。

236) 「ヴィシエゴロド」(Вышегород) は、キエフの上流 (выше), 北方約 20km のドニエブル右岸に位置する付属城市 (пригород)。実質的な支配者であっても「公」(князь) ではないオリガの居館が置かれていたと考えられる。次に「オリガの城市だった」(бѣ бо Вышегород Олгинъ град) とあるのは、オリガがイーゴリと結婚したときに、かの女に個人的な財産 (婚資) としてこの城市が与えられたということだろう。このような慣習はヤロスラフ賢公の皇妃イリーナにおいても見ることができる。この城市については、コンスタンティノス七世紫袍帝 (ポルフィロゲネトス) の『帝国統治論』9 章にロス (ルーシ) 人の支配都市のひとつ「ブセグラデ」(Βουσεγραδέ) として言及されており、おそらくオリガの拠点城市として知名度が高かったのだろう [帝国統治論: 211, 228 頁]。

それから、オリガは自分の息子および従士たちとともに、ドレヴリャネ人の地 (по деревьсти земли) を巡り²³⁷⁾, [貢税の] 規定 (уставы) と税額 (уроки) を定めた²³⁸⁾。そこにはかの女の陣屋²³⁹⁾ (становища) と狩場²⁴⁰⁾ (ловища) が [今も] ある²⁴¹⁾。

それから [オリガは] 自分の息子のスヴァトスラフ [03] とともに自分の城市キエフに戻ってきて, [キエフで] ひと夏滞在した²⁴²⁾。

【オリガはノヴゴロド, プスコフ, チェルニゴフ地方に徴税の拠点を定める】 [№ 35] 6455(947) 年。

237) 「ドレヴリャネ人の地を巡り」(иде... по деревьсти земли) とあり, 段落の最後に「自分の城市キエフに戻ってきた」(прииде в свои город Киевъ) とあることから, [№ 34] (および [№ 35] も) の記事は, 支配地となったドレヴリャネ人の地への巡回徴貢 (полюдь) について述べていることが分かる。10 世紀中頃の『帝国統治論』9 章によれば, その様子は次のようであった。「11 月に入ると, ただちにかれら [ルーシ人] の首長たちは, 全てのルーシ人 (Рѡς) とともにキエフ (Κίαβον) を離れて, 巡回 (γύρα) すなわち〈ポリュディエ〉(πολύδια) に出る。その行き先はスラブ人 (Σκλαβηνία) であるドレヴリャネ人 (Βερβιάνο), ドレゴヴィチ人 (Δρουγουβίται), クリヴィチ人 (Κριβιτζοί), セヴェル人 (Σεβέριοι), およそ他のスラブ人 (Σκλάβοι) のところである。かれらはルーシ人の貢納者 (πακτιῶται) である。[ルーシ人は] 冬の間ずっとそこで給養され, ドニエプル川 (Δάναπρις) の氷が溶けると, 再び 4 月からキエフへと戻る」[帝国統治論 2017: 219 頁] (上注 133 も参照)。

なおリハチョフは, деревская земля をノヴゴロド地方の行政区で, のちに Деревская пятина と呼ばれる, ロヴァチ川とムスタ川に挟まれた一帯のことと解釈して, 次のドニエプル上流域, プスコフ, チェルニゴフへの巡行とスムーズに繋げる読みを提案している [Комментарии 1950: С. 305–306]。魅力的な説ではあるが, これまで деревская земля は русская земля と対比されるかたちの重要語として使われており, 年代記記者がこれと誤解されるように書くことは考え難い。

238) 「規定と税額を定めた」(устанавлиючи уставы и уроки) の「規定」(уставы) は貢税の内容 (納税品やその単位, 納税の手続き) を「税額」(уроки) (上注 46 も参照) は毎年納めるべき納税品の数や額などを指しているのだろう [Карпов 2006: С. 115]。ПВЛ, НІ-М にはこれについてと思われる記述が幾つかあり, たとえば, 上注 184 の「一戸あたりクロテン毛皮一枚ずつ」の文言は, 定められた「規定」と「税額」のコンパクトな表現と考えられる。

239) 「陣屋」(становища) は, 巡回徴貢のときに公が宿泊, 滞在する施設のことだろう。

240) 「狩場」(ловища) とは巡回徴貢などのときに, 同行したルーシ人従士たちが食料調達や軍事訓練のために狩り (лов) を行う場所のこと。住民にとっては一種の禁猟区であり, かれらに対する公の支配の象徴でもあった [Карпов 2009: С. 115]。

241) [№ 35] の同類の文言と同じく現在形であることから, 現在までであるということ。15 世紀の『ベレスラヴリ=スーズダリ年代記』(Летописец Переяславля Суздальского) の該当箇所には, и до сего дни (今日に至るまで) の語句が追加されている [ПСРЛ Т. 41: С. 17]。

242) 「ひと夏滞在した」(пребывши лѣто едино) とは, 公の巡回徴貢における季節による滞在地の違いのことを言っており, 上注 237 にあるように 11 月～4 月の冬季は徴貢先を巡りながら各地に滞在しているのに対して, 春, 夏, 秋の期間は拠点城市に滞在しているということ。

オリガはノヴゴロドへ行った。そして、ムスタ川²⁴³⁾(Моста)沿いに郷²⁴⁴⁾(погосты)と貢税を定めた²⁴⁵⁾。
かの女の狩場(ловища)は全地にわたってある²⁴⁶⁾。しるし(знамение)と料地(мѣста)²⁴⁷⁾も全地にあり²⁴⁸⁾、郷もある。かの女の櫓(санки)が今日に至るまで²⁴⁹⁾プスコフ(Псков)にある²⁵⁰⁾。ド

243) ムスタ川(Моста)は、ヴァルダイ丘陵の中のムスティノ湖(Мстино)を水源として、現在のノヴゴロド州を西に貫いて、イリメニ湖(Ильмень)の北東端に注ぐ445kmにおよぶ川。バルト海からラドガ湖、ヴォルホフ川、イリメニ湖、ムスタ川に入り、連水陸路を経てヴォルガ川に入る古くからの交易路が、ヴァリャーグ人(ヴァイキング)たちによって利用されていた。この川の流域はイリメニ・スロヴェネ人(上注95)の居住地であり、ここでは、オリガがかれらに対する支配機構を整備したことが語られている。

244) 「郷」(погост)は、ここで貢税(дань)と並べて書かれているように、支配者(ここではオリガ)が、支配領地(волость)において貢税を徴収する際の拠点として設けた居住地で、大きな川沿いなど、徴収巡行のための交通や貢税品の輸送に便利なところに置かれていた。その名称(погостить 滞在する)から、貢税徴収の巡行の際に公や配下の従士たちが滞在して給養を受ける(上注237参照)場所であったことが推定される。貢納者である原住民にとってはかれらの本来の拠点地(族長の居館のあるところ)とは別のもう一つの経済的な中心地だった。

研究者の中には、これをヴァリャーグ人の伝統的慣習に結び付ける見方もあり、中世スカンジナビアの王も徴税行のときには、裁判や儀礼などの行事を行うために、現地にフサバ(húsbaby)と呼ばれる特別な拠点を定めたという。そのような地点はスウェーデンに70、ノルウェーに46を数えた。郷(погост)はこのフサバに対応する拠点地であり、古くはスモレンスク郊外のグニョズドヴォ(Гнёздово)やチェルニゴフのシェストヴィツァ(Шестовице)などがこれに比定され、支配者の巡行拠点としては、オリガ時代よりも古くから存在したと考えられている。この公と従士の駐屯地が、時代が降ると商業・運輸の中心地へと変化し、キリスト教受容の後には教会や行政の中心地に変貌したり、都市になるものがあった[Комментарии 2012: С. 295–296]。

245) *ПВЛ*の並行記事ではこの個所に「またルーガ川沿いに貢租と貢税を(定めた)」(по Лузѣ [погосты и] оброки и дани)とあるが、*НІ-М*では省かれている。

246) 「かの女の狩場は全地にわたってある」(ловища ея суть по всей земли)とは、オリガの政治的版図であるルーシの地のいたるところに支配の象徴でもある狩場(上注240)を定めたということ。

247) 「しるし」(знамение)とは、公の支配もしくは所有下にあることを示す標識物で、『ルーシ法典』(拡大版)第73条に、「所有者を記したり、境界となっている(знаменьный или межъный)カシワ(дуб)の太木」の伐採に対する罰金が規定されているが[БЛДР Т. 4: С. 510]、これなどは「しるし」の典型的なものだろう。次に述べられている「櫓」(санки)も文脈から「しるし」の例と見なされていたのかもしれない。「料地」(мѣста)は解釈が難しいが、№2の用法や文脈から推察すると、個人や一族の家計をまかなうための領地のことを指すのではないか。

248) 「しるしと料地も全地にあり、郷もある」(и знамение, и мѣста по всей земли, и погосты)の下線の「全地に」の句は*НІ-М*編者による過剰な繰り返しであり、*ПВЛ*にはない。*ПВЛ*が本来に近い読みだろう。

249) この「今日に至るまで」(до сего дни)の「今日」は、すぐ後にある「今に至るまで」(доселѣ)の句と同じ時点を示しているが、これは上注67の記述およびイーゴリの墳墓にかかわる上注203と同様に、*ДКС*が成立した1039年頃と考えるべきだろう。

250) 「プスコフ」(Псков)はオリガ妃の出身地であり([№15]上注135)、オリガの「櫓」(санки)もそのことに関連していることは疑いない。自らの料地のしるしとして置かれていたか(上注247)。

ニエブル川に沿って鳥網場 (перевѣсища) と村々 (села) があり²⁵¹⁾, デスナ川²⁵²⁾ (Десна) 沿いにはかの女の村²⁵³⁾ (село) が今に至るまである。

〔オリガは〕キエフの自分の息子のもとに戻り²⁵⁴⁾, かれと愛をもって過ごしていた。

【空の7年の年紀：948～954年】 [№ 36]

6456(948) 年。

6457(949) 年。

6458(950) 年。

6459(951) 年。

6460(952) 年。

6461(953) 年。

6462(954) 年。

【オリガはコンスタンティノポリスに行き、洗礼を受けてキリスト教徒となってキエフへ戻る】 [№ 37]

6463(955) 年。

251) 「ドニエブル川に沿って鳥網場と村々があり」 (по Днѣпру перевѣсища и села) の「鳥網場」については上注 211 を参照。「狩場」(上注 246) と同じく支配の象徴だった。「村々」(сѣла) の語は *ПВЛ* ではなく、*HI-M* 編者が次に来る語を繰り返した過剰な説明の補筆だろう。

252) 「デスナ川」(Десна) は、スモレンスク高地からチェルニゴフ地方を貫いて南下し、ヴィシェゴロドの対岸でドニエブル川に注ぐ主要な川。

253) *ПВЛ* の並行記事では「かの女の村」(село) の次に「オリジチ」(Ольжичи) と村の名称が示されているが、*HI-M* は疎遠で不要と見たのだろう、名称は省かれている。ここの「村」(село) は上注 236 のヴィシェゴロドと同様に、個人に属する御料地としての村のこと。

254) 「キエフに戻った」(възвратися) ことについては、上注 237 と同じ表現で、[№ 35] 全体がオリガの巡回徴貢について述べている。なお、*ПВЛ* では изрядивши, възвратися (秩序を定めて、戻った) となっている。

オリガはギリシア人のもとへ向かい、帝都に着いた。当時、ツイミスケス²⁵⁵⁾ という名の皇帝がいた。²⁵⁶⁾ オリガは皇帝のところに来た。皇帝はかの女の顔が非常に見目よく、叡智によって聡明であるのをたちまち²⁵⁷⁾ 見て、かの女の理知に驚き、それから²⁵⁸⁾ かの女に言葉をかけて²⁵⁹⁾ 言った。「あなたはわしとともに²⁶⁰⁾ この都市〔コンスタンティノポリス〕で帝として統治する (царствовать) ことが相応しい²⁶¹⁾」。かの女は意味を悟って、皇帝に言った。「わたしは異教徒です。もしあなたがわたしを洗礼させようとするのなら、自身でわたしを洗礼して下さい。そうでなく、あなたがこれをなさないのなら、わたしは洗礼を受けるつもりはありません」。皇帝は、この言葉を聴いて、[114] たちまち総主教²⁶²⁾ (патриарх) とともにかの女を洗礼した。

〔オリガは〕啓示〔の光〕を受けた²⁶³⁾ ので、かの女はそのとき身も心も喜んだ。これによって、総主教はかの女に信仰について教えて、かの女に言った。「あなたはルーシの女たちの中

255) 「ツイミスケス」(*Км.*, *Ак.*, *Чемьскыи*; *Бр.* *Чемискии*; *Тр.* *Чемескъ*; *НКИ.* *Ивань Чемьскыи*) は、ビザンツ皇帝ヨアンネス一世・ツイミスケス (Ἰωάννης Α' Κομνηνός ο Τσιμισκής) (在位 969-976 年) を指している。ただし、*ПВЛ* では *Лер.* が *Цѣмьскый* であるのを除いて、他の写本は *Костянтин сын Леонов* すなわち、コンスタンティノス七世紫袍帝 (ポルフュロゲネトス) (在位: 913-920, 945-959 年) になっている。おそらく、ヨアンネス帝の在位期と訪問の時期が合わないため、他写本は皇帝名を訂正したのに対して *Лавр* と *Н1-М*, *НКИ* の共通資料はツイミスケスのままだったと考えられる。

オリガの帝都訪問については、ビザンツ年代記、ラテン語年代記やコンスタンティノス七世の『儀典の書』(洗礼の記録はない) にも記録があるが、時期については 946 年から 959 年まで資料と研究者の考証によって差がある。対応した皇帝についても、コンスタンティノス七世、ロマノス二世、ヨハネス・ツイミスケスなど諸説がある。かりに、もっとも可能性がある説による 957 年の出来事で、皇帝はコンスタンティノス七世とすると、年代記の 6463 年は、ビザンツ資料の暦法に拠った可能性もある [栗生沢 2015: 220-238 頁] [Комментарии 2012: С. 296]。

256) *Км.* ではこの箇所には、они же повѣдаша цесарю приходъ ея; и абие цесарь возва ю к собѣ. (かれらはかの女の来訪について皇帝に報告した。皇帝はすぐに、かの女を自分のところに呼び寄せた) の文言があるが、他の *Н1-М* 写本にはない。「かれら」が誰かも曖昧であることから、これは *Км.* 系列の写字生による固有の挿入と考えられる。

257) 「たちまち」(абие) は *Ак.*, *Бр.* の読み。 *Км.* および *Тр.* にはない。

258) 「それから」(паки) は *Км.* の固有な読み。この写本系列の写字生による追加と思われる。

259) *Км.* и *паки бесѣдовавши* で分詞が女性主格形だが、文脈から判断して動作主はオリガではなく、皇帝である方が自然なので *Ак.*, *Бр.*, *Тр.* *ПВЛ* の読み *бесѣдова к ней* を採用した。

260) 「わしとともに」(с нами) は、「尊厳の複数」(Pluralis Majestatis) の一人称複数形が使われている。

261) オリガが帝国の皇妃になることを指しており、あとで述べられる皇帝の求婚をここで遠回しに言ったもの。

262) この「総主教」(патриарх; πατριάρχης) は、オリガの訪問が通説の 957 年 (上注 255) とすると、コンスタンティノポリス総主教ポリュエウクトス (Πολύευκτος 在位 956-70 年) ということになり、もしそれより早い時期なら、テオフュラクトス (Θεοφύλακτος 在位 931-56 年) に相当する。

263) 「啓示〔の光〕を受けた」(просвещена же бывши) は次の総主教の光と闇についての言葉と併せて、異教徒がキリスト教に改宗したことを指している。

で祝福された者である²⁶⁴⁾。こうして、闇を棄てて、光明を愛したのだから。ルーシの息子たちは、あなたの孫たち〔末裔〕の最後の一族のときにも、あなたを祝福するだろう²⁶⁵⁾。〔総主教は〕教会法規²⁶⁶⁾ (церковный устав) について、祈りと精進について、施しと身体を清浄に保つことについてかの女に教えた。かの女はそこで頭を垂れて、ちょうど水を吸う海綿のように教えを聞きながら立っていた。かの女は総主教の教えを聞きながら立っていた。かの女は総主教に頭を下げ、「いとも尊い猊下、あなたの祈りにより悪魔の網²⁶⁷⁾ からわたしが守られますように」と言った。かの女の洗礼において、エレナ²⁶⁸⁾ (Елена) と名付けられたからである。それは、にしえの皇后 (цесария), 大帝コンスタンティヌス (Великий Костянтин) 〔一世〕の母に倣ったものだった。総主教はかの女を祝福し、かの女を行かせた。

洗礼の後、皇帝はかの女を呼び、かの女に言った。「わたしはあなたを自分の妻にしたいと思う」。かの女は言った。「どうしてあなたはわたしを妻にできましょう。自分でわたしを洗礼し、わたしを自分の娘と呼びながら。キリスト教徒の中にはそのような法はありません。皇帝陛下、あなた自身が知っていることではありませんか」。

皇帝は御前に立っている貴族たち²⁶⁹⁾ (боляре) に向かって言った。「オリガは、その言葉によっ

264) 新約『ルカによる福音書』1:42 の大天使ガブリエルの聖母への言葉「あなたは女の中で祝福された方です」からの引用を改変したもの。

265) この箇所 の底本 (Км.) は、и благословити тя имуть сынове русѣи в послѣдняя дни родове внуку твоих だが、他の写本 (Б, А, Тр.) および ПВЛ の主要写本はすべて下線部が в послѣдний родъ внуку твоих となっている。底本も意味はとれるが固有読みであり、Км. の写字生による дни の混淆もしくは過剰修正と判断して、他の写本の読みを採用した。いずれにせよ「最後の一族のとき」(в послѣдний родъ) の句には著者 (おそらく КНС) のルーシの終末的選民イデオロギー (上注 4) が投影されているだろう [Стефанович 2018: С. 364]。

266) 「教会法規」(церковный устав) とは、一年のサイクル、とくに大斎準備期間から復活祭、五旬節にいたる時期の教会における奉事 (典礼) の次第のことで、これを記した書物は типикон / τυπικόν (典礼法規書) と呼ばれる。

267) 「悪魔の網」(сѣтъ неприязненны) は新約『テモテへの手紙上』3:7 に類似表現がある。

268) 「エレナ」(Елена) の洗礼名は、コンスタンティノス一世の母后ヘレナ (Ελένη) のスラブ語名。息子と同様にキリスト教を保護したことにより聖人に列せられ、正教会でも崇敬された。のちに、孫のウラジーミル聖公 [06] がルーシをキリスト教化したことから、息子 (孫) との関係で、母后ヘレナとオリガは聖人伝や聖像画などで類比的に扱われるようになった。このオリガの洗礼名は後代の付会ではなく、史実と考えられる。その根拠として、10 世紀末の『続レギノ年代記』959 年の項にドイツ王オットー一世へのルーシの使節の記述があり「ルーギ [ルーシ] の女王ヘレナの使者、かの女はコンスタンティノポリスにおいてコンスタンティノポリス皇帝ロマノスの治世に洗礼を授けられていた」(Legati Helenae reginae Rugorum, quae sub Romano imperatore Constantinopolitano Constantinopoli baptizata est) と記されている。ただし、オリガがヘレナ母后の名に倣って洗礼名を受けたというのは、年代記記者の解釈で、コンスタンティノス七世の妻が「ヘレナ」だったためビザンツの慣習に従って名づけられたという説が有力である ([栗生沢 2015: 222, 239-243 頁] 参照)。

269) この「貴族たち」(боляре) の語義については下注 329 を参照。

てわしを賢くしてくれた²⁷⁰⁾」]。かの女は言葉において賢かったのである。

皇帝ツィミスケスはそれから、かの女の言うことを聞いて²⁷¹⁾、かの女に多くの贈物、黄金と銀、絹織物と種々の器物を与え、皇帝はすぐに、自分の娘と呼んでかの女を行かせた。

ルーシの公妃オリガは、自分の国に戻ることを望んで、総主教のもとに行き、自分の家へ〔帰る旅の安全のための〕祝福を願い、かれに言った。「わたしの民は異教徒でわたしの息子もまた異教徒です。神がわたしをあらゆる悪からお守り下さいますように」。総主教は言った。「信仰篤い子よ、[115] あなたはキリストにおいて洗礼を受け、キリストを身にまとった。キリストはあなたを守って下さるでしょう。ちょうど〔神が〕最初一族のときにエノクを、その後箱舟のノアを〔守り〕、アブラハムをアビメレクから、ロトをソドム人から、モーセをファラオから、ダビデをサウルから、三人の少年を炉から、ダニエルを獣から守ったように²⁷²⁾。そのようにあなたを悪しき者とその罠から救って下さるでしょう」。

総主教は全地の主教たちとともに(со вселенскими собором)、かの女を祝福し、かの女を心安らかに自分の地へと帰らせた。かの女はそれからキエフに着いた。帝都でいとも尊い総主教から聖なる洗礼と聖体を受けたのである。

【オリガへの讃詞】 [№38]

見よ、〔かつて〕そのようなことがあった。ソロモン王の治世である。エチオピアの女王がソロモンのもとにやってきた²⁷³⁾。ソロモンの多くの叡智を聞くことを、そのしるしを見ることを望んだのである。同様に、この祝福されたオリガも、神の善と知恵を求めていた。だが、かのもの〔ソロモンの知恵〕は人間のものだったが、このもの〔オリガが求めた知恵〕は神のものだった。〔叡

270) 皇帝の言葉は *Км., Ак.* упремудри мя Ольга словесы (глаголании) своими (オリガは、その言葉によってわしを賢くしてくれた) だが、*ПВЛ* では переключала мя еси, Ольга (そなたはわたしを見事に欺いたな、オリガよ) となっている。*Тр.* が *ПВЛ* と同じ読みであることから、*НІ-М* 編者による改変であることが推定される。

271) この文言と以下の細かい付加は、*НІ-М* 編者による説明のための補筆によるものである。

272) ここに類比として引かれている、神が一族の長を悪から守った旧約の故事は、エノクについてはスラブ語の旧約外典『エノク書』(Книга Еноха) ([БЛДР Т. 3: С. 204–241] 参照) から、ノアについては『創世記』6-9章、アブラハムについては同20章、ロトの救済については同19章、モーセについては『出エジプト記』3章、ダビデ王については『サムエル記上』18-19章にある。また、三少年の救済は『ダニエル記』3章、ダニエルが獅子から救われた話は同6章にそれぞれ記されている。

273) 旧約『列王記上』10:1-13と『歴代誌下』9:1-12にみえるソロモン王とシバの女王のエピソードを指している。エチオピアの女王(ефиопская цесария)となっているのは、スラブ語訳『バレヤ(旧約抜粋)』に拠っていることによる。

智を求める者は見出すだろう²⁷⁴⁾。なぜなら、「叡智は巷で歌い、通りでは大胆に声をあげ、城壁の端で教えを宣べ伝え、城市の門では大声で語る。悪なき人はどれほどの年月、義によって振舞っていても〔恥じることはない〕²⁷⁵⁾」。この祝福されたオリガは、成人してからこの世の中のあらゆる知恵を求めており、〔ここで〕高価な真珠、すなわちキリスト²⁷⁶⁾を手に入れたのである。

ソロモンは言っている「敬虔な者の願いは心を楽しませる²⁷⁷⁾」「そして、あなたは英知に心を向ける²⁷⁸⁾」「わたしはわたしを愛する者を愛し、わたしを探し求める者は、〔わたしを〕見出す²⁷⁹⁾」。そして主は言われた。「わたしのもとに来る者たちを、わたしは決して追い出さない²⁸⁰⁾」。

【キエフのオリガはビザンツ皇帝の使者を追い返す】 [№ 39]

このオリガがキエフに着くと²⁸¹⁾、すでにかの女についてわれらが言ったように、ツィミスキスの皇帝²⁸²⁾は、かの女のもとに使者を送って言った。「わたしはあなたに多くの贈物をした。あなたがわたしにこう言ったからである。〈自分がルーシに戻ったならば、多くの贈物を

274)「叡智を求める者は見出すだろう」Ищущи бо премудрость обрящутъは『マタイによる福音書』7:8（『ルカによる福音書』11:10）の ищй обрѣтаетъ（求めるものは見出す）の有名な文言や『箴言』8:17（下注 279）の文言を改変したものだろう。

275) これは、旧約『箴言』1:20-22 からのほぼ文字通りの引用。教会スラブ語訳では премудрость во исходѣхъ поется, въ стогнахъ же дерзновение водить, на краехъ же стѣнь проповѣдуются, у вратъ же сильныхъ присѣдигъ, во вратѣхъ же града дерзающе глаголетъ: елико убо время незлобивии держатся правды（知恵は〔町の〕出口で歌われ、路上で大胆に振る舞い、外壁で語られ、強力な者たちの門口に腰を下ろし（または「身を寄せ」）、町の門（または「出入り口」）で大胆に言う。『悪意を持たない者たちはどれほどのあいだ義を堅持するのだろうか』と）。ただし、引用は 22 節の途中で切れている。

276)「高価な真珠、すなわちキリスト」（бисеръ многоцѣнный, еже есть Христосъ）の語句は、初期スラブの祈祷文献（イラリオン書簡、オフリドのクリメント作の讃詞）にも見かける定型表現である [Чекова 2013: С. 105]。

277) スラブ語訳『箴言』13:20 からの引用。ただし、現行の新共同訳（ヘブライ語）や七十人訳（ギリシア語）には対応の文言は存在しない。

278) 旧約『箴言』2:2 からの文字通りの引用。

279) 旧約『箴言』8:17 からの引用。出典の аз любящия мя люблю, ищущи же мене обрящутъ благодать。の下線部が本文では欠落しているが、意図的ではないようである。新共同訳は「わたしを愛する人をわたしも愛し、わたしを捜し求める人はわたしを見いだす」。

280) 新約『ヨハネによる福音書』6:37 からの引用。なお、本文の「来る者たち」は приходящая だが、古教会スラブ語の諸写本は градѣштаго の語で訳している。

281) *Ак., Бр., Тр.* の *прииде к Киеву* の読みを採用した。*Км. по* *внегда* *пришедши* *ей* *уже* *в Киев* は固有読みであるばかりか、いたずらに文が複雑になっており、二次的な読みである。

282)「ツィミスキスの皇帝」（царь Чемыскыи; Чемьскый）（*НІ-М* 全写本および *НСГ*）は、*ПВЛ* *царь грѣцкыи* を上注 255 の固有名詞に書き換えたのだろう。上注 271 の補筆もそうだが、より分かりやすくするための *НІ-М* 編者の改変と思われる。

あなたに送らしましょう。すなわち、奴隷(челядь)、蜜蝋(воск)、毛皮²⁸³⁾(скура)であり、援軍の軍兵です」)。オリガはソロメルに²⁸⁴⁾(к Соломѣру) 答えて言った。「もしそなたがツィミスキエスの皇帝から〔の言葉を〕言っているのなら、かれ〔皇帝〕にこう言いなさい。〈あなたがやって来たら、わたしのところのボチャイナ川²⁸⁵⁾(Почаина)でとどまりなさい。わたしがスード²⁸⁶⁾(Съсуд)に〔とどまった〕のと同じように。そのときには、わたしはあなたに〔贈物を〕与えましょう〉」。〔オリガはこう〕言って使者たちを帰らせた²⁸⁷⁾。

【母オリガは信仰を勧めるが、スヴァトスラフは受け入れず。不信仰者についての訓話】[No. 40]

[116] オリガは自分の息子スヴァトスラフ [03] とともに暮しており、母はかれに洗礼を受けることを教えた。しかし、かれはその言葉を気にもかけず、耳に入れようとしなかった。しかし、もし誰か望んで洗礼を受けようとする者があれば、制止することはなかったが、その者はさらに(паче)罵られた。

「キリストの信仰は、不信仰の者には愚かなことだからである²⁸⁸⁾」。「かれらは知らず、悟らずして、闇の中を行く²⁸⁹⁾」。また主の栄光を知らないのである。「かれらの心は頑になり、〔主の

283) 「毛皮」(скура) は年代記では交易や贈物の品名として頻繁に使われており、毛皮の中でも最も多く流通したリス毛皮と推定される[Львов 1975: С. 81]。なお、ここに列挙されている、「奴隷、蜜蝋、毛皮」は、*ПВЛ* 945(1) 年記事の最後の、イーゴリがキエフを訪問したビザンツ皇帝の使者に贈物として与えた品目名[ПСРЛ Т. 1: Стб. 54]とまったく同じである。この記事が踏まえているのだろう。

284) 「ソロメルに」(к Соломѣру) は *Км.*, *Тл.*, *Ак.*, *Бр.* に共通 (*Тр.* は к Соломону) は初出の固有名詞であり、*ПВЛ* と *НКІ* の読み к слом / к послом (使者たちに) と比べると不自然である。*НІ-М* 編者は上注 282 の補筆をしたため「あなた(そなた)」(ты) が使者のことになってしまい、ここで単数形の固有名詞によって再解釈したと考えられるが、*ПВЛ* では「あなた」は皇帝のことを指している。そのことから、*ПВЛ* の読みが本来であり、*НІ-М* の読みは二次的である。

285) 「ボチャイナ川」(Почаина) は、ドニエプル川右岸の支流でオボロニという沼地から発する細流。キエフの下町で港の施設があるボドリエ地区は、ドニエプル川本流ではなく、並行して流れていたこのボチャイナ川に面していた。現在は川筋が変わったため存在しない。

286) 「スード」(*Км.* Съсуд, *Ак.*, *Бр.* Суд, *Тр.* Сут) については上注 76 を参照。*ПВЛ*, *НКІ* では в Суду である。

287) *А.*, *Б.*, *Тр.*, И отпусти послы рекши の読みを採用した。底本の *Км.* は И сиа пакы словеса глаголавши много, и абие отпусти приходящая послове къ Царьскому (さらにこのような言葉を沢山言っていると、やって来た使者たちを帝都に帰らせた) とかなり拡大された文言になっており、*пакы* や *абие* のような *Км.* 系列の写生字が好む語が挿入されていることから、明らかに固有の補筆である。

288) 新約『コリント人への手紙上』1:18 の「十字架の言葉は、滅ぶ者には愚か」を改変した引用。

289) 旧約『詩編』81:5 (邦訳 82:5) からの引用。「彼らは知ろうとせず、理解せず、闇の中を行き来する」(新共同訳)。

栄光を〕耳で聞いたり、目で見たりすることが難しい²⁹⁰⁾〕。ソロモンは言っている。「正しくない者たちの行いは、理性から遙かに遠い²⁹¹⁾」「なぜなら、わたしがあなたたちを呼んでも、あなたたちはわたし〔の言うこと〕を聞かず、わたしが言葉をかけたが、あなたたちは聞かず、わたしの忠告を退け、またわたしの非難をも聞かなかったからである²⁹²⁾」「かれらは叡智を憎み、主を恐れることを選ばず、わたしの言葉を聞こうともせず、わたしの非難を嘲っていたのである²⁹³⁾」。

オリガもまたしばしば言っていた。「わが子よ、わたしは神を認めて、喜んでゐる。もしもお前が〔神を〕認めれば、お前は喜ぶことでしょう」。だが、かれ〔スヴァトスラフ〕はそれを聞かずに、こう言った。「どうして、わたしひとりだけが異国の法を受け入れられましょう。従士たちが嘲り罵ることでしょう」。オリガはかれに言った。「息子よ、もしお前が洗礼を受けらるなら、すべての者が同じようにするでしょう」。かれ〔スヴァトスラフ〕は母の言うことを聞かず、異教の習わしを行っていた。母〔の言うこと〕を聞かない者は、さらに災い陥ることを知らなかったからである。それは「父や母のいうことを聞かない者はさらに死を受けるであろう²⁹⁴⁾」と言われていた通りである。そればかりか、かれ〔スヴァトスラフ〕は母に腹を立てていた。ソロモンは言っている。「悪人を罰する者は、自分に怒りを受けるであろう。悪人を非難する者は自分が憎まれるであろう²⁹⁵⁾」。

それにもかかわらず、オリガは、自分の息子スヴァトスラフ [03] を愛しており、自分に対してこう言っていた。「神の御意志があらわれますように。もし神がわたしの一族とルーシの地に慈悲を垂れて下さるならば、神がかれら〔一族〕の心にも神に向かう〔気持を〕起させて下さいますように。神がわたしにして下さったように」。〔オリガは〕こう言って、昼も夜もずっと家来たちと²⁹⁶⁾ (люди) と息子のために祈った。〔そして〕自分の息子が自ら一人前の男 (мужество) になり、かれが成年に達するまで養育した。[117]

【8年間の空の年紀：956～963年】[No. 41]

6464(956)年

290) 旧約『イザヤ書』6:10からの改変した引用。「この民の心をかたくなにし耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなくその心で理解することなく」(新共同訳)。

291) 旧約『箴言』13:20からの引用。

292) 旧約『箴言』1:24-25からの引用。

293) 旧約『箴言』1:29-30からの引用。

294) 旧約『レビ記』20:9からの引用

295) 旧約『箴言』9:7-8からの引用。ただし、HI-M編者は引用を半分で切っている。

296) 「家来たち」の люди / людье は「ノヴゴロドの人々」(новгородстии людие)[№8]のように広い意味でも用いられるが、同時に、公(支配領主)の配下の者たち、家来、家人という狭い意味で使われることがあり、ここはその意味である。

6465(957) 年

6466(958) 年

6467(959) 年

6468(960) 年

6469(961) 年

6470(962) 年

6471(963) 年

【スヴァトスラフは成人し、軍事遠征を盛んに行う】[No. 42]

6472(964) 年

スヴァトスラフ公 [03] は成年に達して一人前の男になると、多くの勇敢な軍兵を集め始めた。かれ自身も勇敢だったのである。かれは狩猟豹²⁹⁷⁾ (пардус) のように身軽に遠征し、遠征しては多くの戦争を行った。かれは自分の〔軍の〕後ろに〔輜重の〕荷車を伴わず、大鍋も〔持たず〕、肉も煮ずに、馬肉であれ、獣肉であれ、肉を細かく切り刻んで串に²⁹⁸⁾〔刺して〕炭の上で焼いて食べるのが常であり、天幕も持たずに鞍褥を掛け、鞍を枕にしていた。かれのもとでは他のかれの軍兵も同様だった。さらにかれは諸国に使者を遣り、かれらにこう言った。「わしはお前たちを攻めに行く²⁹⁹⁾」。

【スヴァトスラフはヴァティチ人からハザール人の支配について聞く】[No. 43]

そしてたちまちオカ川 (Ока рѣка) とヴォルガ川 (Волга) に向かって兵を進めた。ヴァティチ人³⁰⁰⁾に出会って³⁰¹⁾、ヴァティチ人に言った。「お前たちは誰に貢税を納めているのか」。かれら

297) 「狩猟豹」(пардус)については、K/7 1147, 1160 年記事で、スヴァトスラフ [C43] がユーリイ手長公 [D17] 贈与した品として言及されている。これは、ステップ地帯に生息していた狩猟用に訓練したアジア・チータ (Asiatic cheetah; *Acinoyx jubatus venaticus*) のことで [Словарь-СПИ 4: С. 57]、ルーシでこの豹が広く知られていたことは、キエフのソフィア大聖堂南塔の壁画や、『1073 年スヴァトスラフ文集』の挿絵などからも推察することができる。

298) 「串に」は K, Б, грядину, Тл. или грядину でこれは串焼きの棒 (串) のことを指している。Лвр. Ил. НКI は или говядину (あるいは牛肉を) となっているが、これは後の改変による二次的な読みの可能性が高い [Гиппиус 2008a: С. 49–54]。

299) このスヴァトスラフの言葉 Хощу на вы ити は、971 年記事でスヴァトスラフがギリシア人のもとに派遣した使者に託した言葉としてそのまま記されている (下注 359)。

300) 「ヴァティチ人」(вятици; 標準綴り вятичи) はオカ川 (Ока) の中上流域一帯において、11 世紀末まで諸公の勢力から自立性を保っていた東スラブの部族名。『原初年代記』によれば、ポーランドの伝説的始祖であるリャビヒから出ている。「リャビヒには二人の兄弟、ラヂムともう一人のヴァトコがいた。(…) ヴャトコは自分の氏族とともにオカ川に沿って住んだ。そこでかれにちなんでヴァティチと呼ばれたのである」と記されている。[ロシア原初年代記 1987: 12 頁, 329 頁 (注 183) 405 頁 (注 2) 参照]

301) スヴァトスラフの遠征路は、キエフからおそらくデスナ川を遡って、現在のブリャンスクのあたりで、オカ川上流域に居住するヴァティチ人と遭遇し、さらにオカ川を遡ってヴォルガ川に入ったのだろう。

は言った「われらは犁ごとに³⁰²⁾、1シチリヤグずつ³⁰³⁾(по щылягу)をハザール人に納めています」。

【スヴァトスラフはハザール人との戦闘に勝利して、拠点城市を占拠する】[№ 44]

6473(965)年

スヴァトスラフ [03] はハザール人を攻めるべく兵を進めた³⁰⁴⁾。ハザール人は「このことを」聞くと、自分たちの公 (князь) であるカガン³⁰⁵⁾ (каган) とともに「城市から」出撃して迎え撃ち、「両軍が」遭遇して戦った。そして戦闘があり、スヴァトスラフが、ハザール人に勝利し、か

302) 「犁ごとに」(от рала)の「犁」(рало)は牛馬に引かせて耕作する農具で、刃板は鉄ではなく木製の原始的なもの。ここでは、課税単位として、農家一戸を指しており、「一戸」(дым)(上注185)と同義と見てよいだろう。ただここでは、納税者(ヴァティチ人)の生業が農業であったことをうかがわせる。

303) 「1シチリヤグずつ」(по щылягу; по щелягу)の貢税額については、*ПВЛ*885年の記事にラディミチ人(радими́чем)がそれまでハザール人に納めていたものを、オレーグ[00]に納める貢税の額として記されている。シチュリヤグは貨幣単位でドイツ語の「シリング」(Schilling)と同根の語。リハチョフによれば、ポーランド語にszelagという単位があることからこれからの借用としており、ヴァティチ人からこの単位で貢税を取ったのは、ヴァティチ人がラディミチ人と同様にその出自がリヤヒ人(ポーランド人)(ляхи)の部族であるという根拠をあげている(上注300)[Лихачев 1950: С. 254]。しかしながら、ここでは当時ハザール国の間で流通していたアラブのディルハム銀貨(上注132)のことを指しており、ユダヤ商人の間の呼び名шэлэг(白、銀色を意味する)を介して伝わったと思われる[Новосельцев 1990: С. 117]。さらに、ディルハム銀貨は、中世ロシアの貨幣システムにおいては、テン毛皮(куна)一枚にほぼ相当していた[Назаренко 2001: С. 157][Петрухин, Раевский 2004: С. 294–295]ことから、貢税の単位としては普遍性があつたのではないか。

304) 前年の記事[№ 43]でスヴァトスラフはヴォルガ川に達していることから、キエフには戻らずに、ヴォルガ川を下り、ハザールの拠点地である下流域一帯に攻撃を仕掛け、さらにヤース人(北カフカス)、カソグ人(クバン川下流域)の地を略奪し[№ 45]、その後にドン川下流のサルケル(下注306)を襲撃したというルートが合理的なようである[Щавелев 2020: С. 125]。

なお、この記事は年紀が変わっているが、本来は[№ 42–45]の記事はひとつの資料に基づいた一回の遠征行について記しており、あとから年代記記者が年紀を施したと考えたほうがよいだろう[Шахматов 1908 (2002): С. 96–97]。そのため、遠征路や記述された事件の順番は、かならずしも記述に沿っていない可能性もある。

305) 「カガン」(каган; 古テュルク語 qaqan; 漢語 可汗)は主にテュルク系の遊牧民族のあいだで使われていた君主号で、ハザール国では、カガンの他にベクトと呼ばれた君主とともに、二重王権の支配体制のもとで宗教的な権威を担っていたとされている。ただし、ここでは、「公」(князь)と解説していることから、実質的な指揮官を兼ねていたのだろう。

これらの城市ベーラヤ・ヴェジャ³⁰⁶⁾ (Бѣла Вежа) を占領した。

【スヴァトスラフはヤース人とカソーグ人を征服する】 [№ 45]

かれ〔スヴァトスラフ〕はまたヤース³⁰⁷⁾ 人 (ясы) を打ち負かした。カソーグ人³⁰⁸⁾ (касоги) も〔打ち負かした〕。キエフに〔捕虜を〕連れて来た³⁰⁹⁾。

【スヴァトスラフはヴァティチ人を征服して貢税を課す】 [№ 46]

6474(966) 年

スヴァトスラフ [03] がヴァティチ人を打ち負かし、かれらに貢税を課した³¹⁰⁾。

306) 「ベーラヤ・ヴェジャ」(Бѣла Вежа; 標準綴り Белая Вежа) は、ドン川沿岸にあった当時のハザール人の最大の拠点都市のひとつ。10 世紀半ばのコンスタンティノス七世紫袍帝 (ポルフュロゲネトス) 『帝国統治論』第 42 章には、ハザール人の要塞 (κάστρον) である「サルケル」(Σάρκελ) について記されており、これは「白い家」(ἄσπρον ὀσπίτιον) の意味だと解説されている [DAI: p. 182]。中世ロシア語で вежа は遊牧民の幕舎を意味することから、この「サルケル」を翻訳借用した語であることが分かる。834 年コンスタンティノープルから技術者を呼んで建設されたとされ、ビザンツに通じる交易都市として栄えた。現在のロストフ州のドン川河口から 230km ほどさかのぼったサルケル市のあたりに相当するが、要塞の遺構そのものは水没している。

スヴァトスラフのベーラヤ・ヴェジャ攻略は、地理的にみて、ヤース人、カソーグ人略奪の前後に行われたと考えられる。

307) 「ヤース人」(ясы) は騎馬民族であるアラン系の民族で、10 ～ 13 世紀には黒海からカスピ海にかけての広い地域に定着した種族のこと。当時は、ハザール人から独立して、ヴォルガ川下流域から北カフカス一帯に居住していたと考えられる。その後、12 世紀には、黒海北岸の「キプチャク平原 (ポロヴェツの地)」に移り、現在はハンガリーに少数民族として定着している。

308) 「カソーグ人」(касоги) は当時現在のクバン川下流地帯から北カフカスに居住していたアディグ人の呼び名。アラブ史料で「カサク」(kšk / kāsāk), ギリシア史料では「カサヒア」(Κασαχία) として言及されている [Щавелев 2020: С. 125]。10 世紀にハザール人の支配下に入ったが、その後、ドニエプル川の下流域 (現在のチェルカースィ州辺り) に移住し、現在のチェルカースィの基礎を築いた。かれらは、現代のチェルケス人に近い種族で、のちにコサックの原型となったとも考えられている。

309) 「そしてキエフに〔捕虜を〕連れて来た」と приведе Києву は *Км. Бр. Тр.* の読み。 *Ин. Хлб.* は *приде къ Києву* (キエフに来た) だが、*Лер. Рдз.* には句そのものがない。この句は文脈からやや浮いており、ないかたちがおそらく本来のものだろう。 *НІ-М* の読みは、のちに年紀入りの記事として編集されたときに付け加えられたものか [Щавелев 2020: С. 123–124]。

310) 981 年の記事 (下注 479, [№ 79]) でウラジーミル [06] がヴァティチ人に対して「父が取り立てていたように、掣ごとに課税した」とあることから、スヴァトスラフはハザール人と同様の方法でヴァティチ人に課税したのだろう。

【スヴァトスラフはブルガリア人との戦闘に勝利してドナウ川の諸城市を占領し、ペレヤスラヴェツの支配を始める：第一次ブルガリア遠征】[No. 47]

6475(967) 年

スヴァトスラフ [03] はドナウ川のブルガリア人 (болгары) を攻めるべく兵を進めた³¹¹⁾。両軍が戦い、スヴァトスラフ [03] が、ブルガリア人に勝利し、ドナウに沿った 80 の城市を占領した。そこのペレヤスラヴェツ³¹²⁾ (Переяславец) に座して、公として支配 (княжити) した。そして、ギリシア人から貢税を取りたてた。[118]

【ペチェネグ人はルーシへ来襲しキエフを攻囲する。オリガと孫たちは籠城する】[No. 48]

6476(968) 年

311) ビザンツ史料 (ヨハネス・スキュリツェス『歴史概観』, レオン・ディアコノス『歴史』) によると、スヴァトスラフのドナウ遠征は、皇帝ニケフォロス二世フォカス (Νικηφόρος Β' Φωκάς) (在位 963-69 年) が、パトリキオスのカロキロスをつらねとする使節団を派遣し (967 年 6 月)、莫大な黄金の贈物を与えて対ブルガリア戦の援軍を要請したことがきっかけとなっている。これを受けて、スヴァトスラフは 968 年 6 月末～7 月初めにドナウ川を突破して、ドロストル (下注 312) 付近でブルガリア帝ベタルー一世の軍を撃破すると、8 月末にはドブルジャ地方 (Добруджа) を占領した。当時、シリアと戦っていたビザンツ皇帝は、スヴァトスラフの援軍によってブルガリアの侵攻を防ぎとめる思惑だったが、スヴァトスラフ自身は 968 年末までにブルガリアの全土を掌握し、ペレヤスラヴェツを拠点にした国家経営を考えるまでに至った [Комментарии 2012: С. 301]。

312) 「ペレヤスラヴェツ」 (Переяславец; ギリシア語 Πρεσθλαβίτζα) は、ドナウ川下流域に、おそらくスヴァトスラフがブルガリア人の交易・商業都市を占領して、みずからの拠点にしたものだろう。当時のブルガリア帝国の首都プレスラフ (Преслав; Πρεσθλάβα) (現在のヴェリキ・プレスラフ Велики Преслав) に対して、指小形のかたちで自らの拠点を命名したのではないか。ビザンツ史料には「小ベレスラフ」 (Μικρᾶ Πρεσθλάβα) と呼ばれる地名があり、それと同じとする説もある。その所在地については諸説あり、現ヴァルナ市に近いトラヤヌス帝時代 (1 世紀) の古都「マルキアノポリス」 (Μαρκιανούπολις) や、ルーマニアのドブルジャ地方トゥルチャ (Tulcea) から 11km 東のヌファル村 (Nufăru) の遺構などが候補に挙がっている。また、現在のブルガリアのドナウ川右岸の港町シリストラに相当する「ドロストル」 (Доростол; Δουρόστολον; Durostorum) そのものに比定する説もあり、969 年からのスヴァトスラフ公第二次侵攻の際にもルーシ軍はここを占拠して籠城しており、971 年の皇帝ヨハネス一世ティミスケスとの協定はここで結ばれている。いずれにせよ、「ペレヤスラヴェツ」は、ルーシにとってはビザンツおよび東ヨーロッパ諸国との接触の入り口のような位置にあった。

ペチェネグ人³¹³⁾(печенѣзѣ)が、初めてルーシの地に攻めて来たが³¹⁴⁾、スヴァトスラフ [03] は、ペレヤスラヴェツにいた³¹⁵⁾。

オリガは自分の孫ヤロ波尔ク (Ярополкъ)[04]、オレーグ (Олег; Олг, Олыг)[05]、ウラジーミル (Володимиръ; Володимеръ)[06] とともに、キエフの城市に立てこもった。そこで〔ペチェネグ人は〕大軍で城市を包囲した。数え切れないほど多数の〔軍勢〕が城市の周りを〔取り巻き〕、城市から出ることも報せを送ることもできなかった。また〔城内の〕家来たち (людие) は飢えと渴きによって³¹⁶⁾ 弱ってきた。

【従卒の機転と勇敢な行動によって対岸の従士団に救援を依頼する】[No. 49]

ドネプル川対岸の家来たちは³¹⁷⁾、船で集まり対岸に陣を布いていたが、かれらのうちの誰ひとり、キエフに入ることができなかった。城市からかれらのところへ〔も行けなかった〕。城内の家来たちは悲しんで言った。「われらの中に、向こう側にたどり着ける者は誰かいなか。³¹⁸⁾〈明朝になっても誰も城下に来てくれなければ、われらは³¹⁹⁾ ペチェネグ人に降伏するでしょう〉」。すると、ひとりの従卒が言った。「わたしが渡りましょう」。かれらは言った。「行

313) 「ペチェネグ人」(печенѣзѣ; 標準綴り печенеги) はテュルク系遊牧民族連合体で、その名称は「義兄弟」を意味していた。ビザンツ史料では πατζινακαι 中国史料では音写で「北褥」[pæk nuok] と表記される。その故地はアラル海の東だが、9世紀初めにオグズ人の移動によって、エンバ川とヴォルガ川の間に移住し、9世紀中頃からハザール人とオグズ人に圧迫されてヴォルガ川下流からドナウ川河口に広がる広大な平原(ステップ)に居住地を定め、遊牧民族連合体を形成した。10世紀中頃には退潮しつつあったハザール人に代わってドニエプル川下流域を占め、ルーシ人の支配地を南から脅かすようになった[森安 1990: 170-173 頁]。これ以降、11世紀前半までの年代記史料には、ルーシとペチェネグ人との交渉について多く記されている。また、10世紀のコンスタンティノス七世紫袍帝(ポルフィロゲネトス)の『帝国統治論』1～8章はビザンツ帝国北辺の異民族について記されているが、その殆どはペチェネグ人についての記述であり、いかに帝国の為政者がこの民族を重視していたかが分かる[山口 1965][山口 1966]。

314) 「ペチェネグ人が初めてルーシに地に攻めてきた」(Приидоша печенѣзѣ на рускую землю в прѣвѣ) は *ПВЛ(Ин.)* は、915年記事に全く同じ文言があり、ここはその繰り返しである。この時はイーゴリ [02] と和を結んでドナウ川へ引き返したことになる。

315) 底本 (*Км.*) は затворися (立てこもった) だが、これは直後のオリガがキエフに「立てこもった」という箇所からの影響による誤記で、*Бр. Тр. Ин. Лер.* は бѣше (～にいた) であり、後者の読みを採用した。

316) 「渴きによって」(жажю / жаждею) は、*ПВЛ* では водою (水不足によって) となっている。

317) 「ドニエプル川対岸の家来たち」(людие оной страны Днѣпра) は、救援のためにスヴァトスラフのもとから軍船で駆け付けた先遣隊の兵士たちのことで、軍司令官ブレティチ (下注 320) が指揮を執っていた。ペチェネグ人の攻囲軍がいたため、城市の対岸(左岸)に布陣せざるを得なかったのだろう。

318) この箇所に *ПВЛ* の *Лер. Рѣз.* は и рещи имъ (かれら〔対岸のものたち〕に次のように言う) の句があり、*НМ-М* 全写本と *Ин. Хлб.* にはない。これは、後者が本来の読みで、前者は分かりやすくするための補筆であろう。

319) 底本 (*Км.*) は「かれらは」(имут) だが、*Бр. Тр. Лер. Ин. НКЛ.* は「われらは」(имам) となっていることから、これを採用した。

け」。かれは、轡（くつわ）を持って城市から出て、ベチェネグ人の中を走り抜けて、「誰も馬を見ませんでしたか」とかれらに言っていた。かれはベチェネグ人の言葉ができたので、かれらはかれを味方の者と思ったのである。そして、川に近づくとかれは着物を脱ぎ捨ててドニエブル川に飛び込み、渡河し始めた。ベチェネグ人はこれを見ると、かれを目がけてたちまち矢を射かけたが、かれにいかなる悪をなすことはできなかった。

かれら〔家来たち〕は、対岸からかれを見ていた。そして船で来て、船の中に引きあげ、従士たちのもとに連れて行った。かれはかれらに言った。「もしあなたが明朝城市に来てくれないければ、家来たちはベチェネグ人に降伏するでしょう」。プレティチ³²⁰⁾ (Притиць) という名のかれの軍司令官が言った。「明日、船に乗って〔城下に〕近づこう。到着したら、公妃〔オリガ〕と公の子供たちと [119] 家来たち³²¹⁾ をこちら側へ連れて来よう。もし、われらがそうしなければスヴァトスラフ [03] がわれらを滅ぼすであろう³²²⁾」。

【対岸の援軍の威嚇に恐れをなしたベチェネグ人は籠城の軍司令官プレティチと和を結ぶ】 [№ 50]

翌朝になると、明け方近くに船に乗り込んで、非常に激しくラッパを吹き鳴らした。城市の中の家来たちは関の声をあげた。ベチェネグ人は〔スヴァトスラフ〕公が到着したと思い、城下から散り散りに逃げ出した。そこでオリガは孫と家来たちとともに〔城市を出て〕船の方へ出て行った。

ベチェネグ人の公はこれを見て、ひとりで軍司令官のプレティチのところに戻ると、言った。「これは誰が来たのか」。〔プレティチ〕は言った。「対岸の家来たちである」。ベチェネグ人の公は言った。「あなたが公であるのか?」。かれ〔プレティチ〕は言った。「わたしはかれ〔公〕の家臣であり、先遣隊として来たのだ。わたしの後から、数えきれないほど多数の軍兵が、公とともにやって来る」。これはかれを脅して言ったのである。

320) 「プレティチ」(Притиць; 標準綴り Претич) はスヴァトスラフ公配下の軍司令官で、スヴァトスラフのブルガリア遠征のとき、キエフ守備隊の指揮者として従士団とともに残されたのだろう。かれとその部隊がドニエブル川対岸（左岸）にいたとき（あるいはその機会を利して）、ベチェネグ人はキエフ城市を包囲したのではない。なお、ナソーノフはかれをドニエブル川左岸のルーシの地を遊牧民から防衛する役割の軍司令官で、おそらく下注 322 の発言から、この時は一時的にスヴァトスラフに従属していたと考えている [Насонов 1950: C. 62]。

321) 「家来たち」(людии) の語は *HI-M* の全ての写本と *Ин. Хлб.* にあるが、*Лвр. Разд. НКI* にはない。この語だけ後置されていることから、*HI-M* の読みは後年の挿入の可能性が高い。

322) この、ベチェネグ人のキエフ包囲の物語 [№ 48-50] は全体として、直面する危機を機知によって敵を欺くことで回避するという、昔話的な難題解決チーフに貫かれており（従卒がベチェネグ人をよそおう。プレティチと城内の家来たちがラッパの音声と関の声で大群をよそおう。プレティチが先遣隊長を偽って公の大軍がまもなく来ることをよそおう）、明らかに、フォークロア伝承に基づいて記述されている。この、軍司令官の苦悩も、課題の困難さを強調するフォークロア・モチーフからとられたものではないか。

そこでペチェネグ人の公はプレティチに言った。「あなたはわたしの友となれ³²³⁾」。かれ〔プレティチ〕は「そうしよう」と言い、互いに手を差し伸べた³²⁴⁾。ペチェネグ人の公はプレティチに馬、刀剣(сабль)、矢を送り、かれ〔プレティチ〕は、かれ〔ペチェネグ公〕に鎧、盾、長剣(мечь)を与えた。

ペチェネグ人は城下から撤退した。ペチェネグ人は、リュベジ川³²⁵⁾(Лыбедь)で馬に水を飲ますことができなかった³²⁶⁾。

【キエフ人はスヴァトスラフに使者を遣り、かれは帰国して平和が回復する】[№ 51]

キエフ人たちは、スヴァトスラフ[03]に使者を遣って、こう言った。「公よ、あなたは他人の地を求めて、守っています³²⁷⁾。自分の〔地を〕放棄して。危ういところで、ペチェネグ人はわれらとあなたの母、あなたの子供たちを捕らえるところでした。もし、あなたが来てわれらを防衛してくれなければ、かれらは再びわれらを捕えるでしょう。あなたは自分の父の地³²⁸⁾(отчины)も、年老いた母も、自分の子どもたちも残念で〔愛おしく〕はないのですか」。

スヴァトスラフ[03]はこれ聞き、従士たちとともに急いで馬に乗ってキエフに帰り、母

323) 「わたしの友となれ」(буди ми друг)は、義兄弟の契りを結ぶときの定型句であり、その儀式として貴重な持ち物の交換がなされる。ここでは、講和遵守の誓約儀礼も兼ねており、ペチェネグ人とルーシ人の軍司令官の間で行われ、武器が交換されている[К остомаров 1863: С. 93]。このキエフ攻囲物語はフォークロア資料にもとづくが(上注 322)、ペチェネグ人の民族名が「義兄弟」を意味する(上注 313)ことからの連想がこのようなエピソードを生み出したのかもしれない。

324) 「互いに手を差し伸べた」(пода руку межю собою)は相手と約束、協定を取り結んだことを確認する儀礼的な身振り(前注参照)。

325) 「リュベジ川」(Лыбедь)は、キエフの城市の南西を流れるドニエプル川右岸支流。その名称は、キエフに名を与えた伝説的創建者キイ等三兄弟の妹リュベジ(Лыбедь)(上注 13, [№ 2])と関連しているだろう。この川は後年の年代記のキエフ城市をめぐる攻防の描写に頻繁に言及され、キエフにとって「外堀」のような役割を果たしていた。その水源であるナドヴェ湖(Надове озеро)はソフィア聖堂から約 2.5km 南西に位置しているが、現在は存在しない。

326) この文は、前の文章と整合しないことから後年の挿入を疑う説もある[Шахматов 1908 (2002): С. 101 (№ 85)]。これは、文の主語(「馬に水をやる」者)を、従来の主な翻訳のように(リハチヨフ訳, [ロシア原初年代記 1987])、城市の者たちとすることから起こる不整合であり、主語をペチェネグ人とすれば、かれらが、馬に水をやる余裕もなく慌てて逃げた、という解釈も可能であり[Насонов 1951: С. 126]、本翻訳もその立場をとった。

327) 「他人の地……を守る」(чужої землѣ... Км. блудиши, Ак. Бр. блюсти, Лер. блюдеши, Ин. Хлб. блюдешь)は、年代記に頻出する定型句「自らの地を守る」(блюсти свою землю)の対義的表現。この定型句は、外敵に対する支配公の担うべき役割を言ったもので[Колесов 2004: С. 183]、ここでは、そのような公の義務を果たさないスヴァトスラフを、キエフ人(都市の上流層)は非難しているように読める。

328) 「父の地」(отчина)は年代記ではここが初出。ここでは父母が住む「故郷」「祖国」くらいの意味。時代が降ると諸公間の支配領をめぐる紛争が激しくなり、11 世紀末くらいからこの語は「世襲・相続領地」という意味合いを持つようになる。

と子どもたちに接吻して、ペチェネグ人のために起ったことを残念に思った。そして軍兵を集めて、ペチェネグ人を平原に追い払った。そして平和になった。

【オリガの死と埋葬】 [No. 52]

6477(969) 年

スヴァトスラフ [03] は自分の母と自分の貴族たち³²⁹⁾に向かって言った。[120]「わたしはキエフに住むのが嫌です。ペレヤスラヴェツ³³⁰⁾に、そしてドナウ川に住みたい。そこはわが地の中心であり、そこにあらゆる財物が集まって来るからです。ギリシア人からは錦、黄金、酒、種々の果物の類が、チェコ人やハンガリー人からは銀と馬が、またルーシ人からは毛皮、蜜蠟、蜂蜜、奴隸(челядь)が〔集まって来るからです〕」³³¹⁾。

オリガはかれに言った。「わたしが病気であることをお前は知らないのですか。お前はわたしから〔離れて〕どこへ行こうとするのですか」。〔オリガは〕すでに重い病にかかっていたのである。そこで〔オリガは〕かれに言った。「わたしを埋葬しなさい。そして、好きなところへ行きなさい」。

オリガは3日後に死に、かの女の息子、かの女の孫たち、およびすべての家来たちは、かの女のことをとても激しく泣いた。そしてかの女を選び、〔遺言で指示された〕場所³³²⁾に埋葬した。オ

329) 「貴族たち」(бояре)の語はビザンツ皇帝の側近としてすでに記されているが(上注 269)、ルーシ人の身分の名称としてはここが初めて。*ПВЛ*では911年オレーグ[00]、941年イーゴリ[02]、971年スヴァトスラフ[03]等ルーシ諸公とビザンツ皇帝との協定書の中にこの語が記されており、公(князь)に次ぐルーシ支配層の高位身分であることが分かる。この時代(10世紀～11世紀)の貴族(бояре)は公の配下において(「重臣」「側近」)従属していたが、12世紀以降になると史料にノヴゴロドをはじめ主要都市における在地貴族(бояре)についての記録があらわれるようになる[Горский 2019: С. 21–23]。

330) ペレヤスラヴェツがスヴァトスラフの拠点城市だったことについては、上注 312 参照

331) スヴァトスラフがブルガリアの地を気に入り、そこを支配して住もうとしたことについては、ヨハネス・スキュリツェス(Ιωάννης Σκυλίτζης)『歴史概観』(Σύνοψις Ἱστοριῶν)には「〔ルーシ人はブルガリアの〕素晴らしい立地に驚嘆して、ニケフォロス帝が結んだ協定を破って、この国に残って支配したほうがよいと考え始めた」と書かれている[Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 220]。また、レオン・ディアコノス『歴史』の第5書2節には、ビザンツ皇帝の使者カロキロス(上注 311)の誘いに対して「〔スヴァトスラフ〕は富を手にし、自分がモエシア人〔ブルガリア人〕の国の支配者になることを夢に見て」とあり、心からの願望だったようである[Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 191]。

332) この「場所」(мѣсто)がどのような場所を指しているか本文からは不明。975年記事にオレーグ[05]の埋葬地について同様の表現があるが具体的な場所が明示されており(у града, зовомаго Вручьяго)(下注 397)、ここでも本来そのような指示があったものが伝承の過程で欠落した可能性が高い。ここでは、後続の文脈から「遺言された」場所と解釈した。なお、スレズネフスキイは「平地」(поле, открытое место)との解釈を行っているが[Срезневский Материалы: Стб.246]、平らという解釈は後代のオリガ伝の墓についての記述に拠ったものだろう(下注 335 参照)。これについては[栗生沢 2015: 287-288 (注 74)]も参照。

リガは自分の追悼会 (трызна) をしないようにかねてから遺言していたからである³³³⁾。〔オリガは〕密かに司祭³³⁴⁾ (прозвутер) を持っており、この者がかの女を、至福のオリガを葬ったのである³³⁵⁾。

【オリガへの讃詞】[№ 53]

この方〔オリガ〕は、このキリスト教の地にとっての前駆者であった。あたかも、日の出の前の明星のように、また夜明けの前の空焼けのように。なぜなら、夜の月のように輝いていたからである³³⁶⁾。まさにそのように、この方は神を信じない人々の中にあって輝いていた。泥の中の真珠³³⁷⁾のように。〔人々は〕罪の泥にまみれて、聖なる洗礼によって洗い浄められていなかったからである。この方〔オリガ〕は聖なる洗礼盤によって洗い浄められ、太古の人アダムの罪深い衣を脱ぎ、新しいアダム、すなわちキリストを身にまとった³³⁸⁾のである。

333) この「追悼会」(трызна)については上注 227 を参照。

334) 「司祭」(прозвутер) は *πρεσβύτερος* の音写語で、原義は「長老」だが、古い教会規則では副次的な役割の司祭職を指していた。ここでもその意味で使われており、オリガのキリスト教徒としての信仰生活のためにルーシに招かれ、司祭として仕えていたギリシア人のことだろう。

335) 16 世紀の『階梯書』の聖オリガ伝の臨終の描写ではその様子が、次のように詳しく記されており、〈遺言〉の内容も具体的である。「わたしの死後はあなたがたの異教の習慣によっては何もせず、わたしの司祭がわたしの罪ある肉体を埋葬するように。キリスト教の慣習により平らな土に。誰であれ墳墓を盛って、追悼会を催してはならない。帝都の総主教に金〔貨〕を送って、総主教がわたしの魂について祈りと儀式を行い、乞食たちに施しをさせるように」(по преставлении моем да не сотворите ничтоже по вашему поганскому обычаю, но презвитер мой той да погребет грѣшное тѣло мое, якоже есть обычай християном погребати равна со землею. Могилы же надо мною да не дерзнет никтоже сыпати, ни тризны творити, но послѣ злато в Царствующий град к патриарху, и той молитву и совершение сотворит к Богу о души моей и нищих милостынею учредит)[БЛДР Т. 12: С. 362]

336) 冒頭からここまでの、「日の出の前の明星のよう」(аки деньица пердъ солнцемъ), 「夜明けの前の空焼けのよう」(аки зоря предъ свѣтомъ), 「夜の月のよう」(аки луна в нощи)の修辭的語句は、洗礼者ヨハネ、聖母、キリストの誕生に捧げる聖歌に頻出する語が使われており、典礼文献が典拠になっている可能性が高い[Гриффин 2020: С. 103]。ただし、テキスト的に対応するものではない。チェコヴァはまた、この修辭に旧約『雅歌』6:9 のスラブ語訳 *кто сия проникающая аки утро, добра яко луна, избрана яко солнце, ужас яко вчиненны* のイメージからの借用の可能性を指摘している[Чекова 2013: С. 106]。

337) 「泥の中の真珠」(бисер в калѣ)の比喩表現は、スラブ語訳の『注釈付使徒書』(толковый Апостол)「ヤコブ書簡」2:25 註解で旧約の義人ラハブ (Rahab) を喩える句として使われている(ギリシア語 *μαργαρίτης ἐν βορβόρῳ*)。『ヨシユア記』2:1-7 によれば、かの女は娼婦であったが、ヨシユアがエリコ攻略のために派遣した斥候を、異教徒にもかかわらず神の意を受けて匿った義人であり、『マタイによる福音書』第1章ではイエスの系図に先祖として含まれている。そのことから、ここではオリガが「生きた信仰の担い手」として旧約の義人に比定されていると解釈することができる[Лихачева 1977: С. 112]。これについてチェコヴァはテキストを対照して、当時すでにあったであろう『注釈付使徒書』が直接の典拠であったと考証している[Чекова 2013: С. 103–107]。

338) 「キリストを身にまとった」(в Христос облечися)はオリガの洗礼の場面[№ 37]に同じ表現がある。

われらはかの女に向かって言おう。「喜べや³³⁹⁾、ルーシ人が神を認めたことを。われらは〔神との〕和解の始まりになった」。この方〔オリガ〕はルーシ人の中で初めて天の国に入った。ルーシの諸公と子らはこの方〔オリガ〕を先達として讃えている。なぜなら〔かの女は〕死後もルーシ人のために神に祈っているからである。義人の魂は死なない。これはソロモンが言っている通りである。「讃えられる義人を民は喜ぶ³⁴⁰⁾」。なぜなら、不死こそがかれ〔義人〕を記念するのだから。神からも民からも認められるのだから。

見よ、すべての人間は、〔義人の魂を〕嘉している³⁴¹⁾。永年にわたって自分の肉体の中に〔義人の魂〕があるのを見てきたからである。預言者は言っている。「わたしを尊ぶ者をわたしは尊ぶ (прославлю)³⁴²⁾」。このような者についてダビデは言っている。「義人は永く記憶せられ、悪評を恐れず、その心は主を恃んで堅く、その心は堅固なり³⁴³⁾」[121]「そして揺らぐことはない³⁴⁴⁾」。またソロモンは言っている。「義人は永遠に生きる。主から報いを受け、いと高き方の配慮をいただく。それゆえかれらは美しい王位を授かり、主の御手から善の冠を受ける。〔主は〕右の手で彼らを覆い、その腕で彼らを守られる³⁴⁵⁾」。主はこの至福のオリガを、敵で対抗者の悪魔から守られたのである³⁴⁶⁾。

339) 「喜べや」(радуися)は、祈祷文形式のひとつ「讃歌」(アカフィスト; акафист, О Ακάθιστος Ὕμνος)の冒頭で繰り返される定型語。そのなかでも、聖母讃歌(акафист Божией Матери)は奉神礼でよく唱えられる。

340) 「讃えられる義人を民は喜ぶ」(Похвала праведному, возвеселятся люди)は旧約『箴言』29:2からの引用。

原典では похваляемым праведным, возвеселятся людиと独立与格構文だが、本文はやや崩れている。

341) *HI-M*の「嘉している」(блажать)は*ПВЛ*では прославляють (尊んでいる)になっており、*ПВЛ*の読みは次の預言者の言葉に対応していることから本来もので、*HI-M*の読みは後の二次的改変である。

342) 旧約『サムエル記上』2:30からの引用。教会スラブ語 а ныне глаголет Господь: никакоже мне, зане токмо прославляющия мя прославлю, (「主は言われる。だが、今は決してそうはさせない。わたしを重んずる者をわたしは重んじ」新共同訳)

343) 旧約『詩編』111:6-8(邦訳112:6-8)からの文字通りの引用。

344) 原文 не подвижитсяは旧約『詩編』9:27(邦訳10:6)や14:5(邦訳15:5)などにある表現。

345) 旧約外典『知恵の書』5:15-16からの引用。

346) この「オリガ讃詞」[№ 53]は、上の[№ 38]の受洗の記事に付された「オリガ讃詞」と類似であり(上注338の表現や同様の出典)、同じ著者の手になる可能性が高い。ヤコブソンは、この「オリガ讃詞」[№ 53]のテキストと11世紀末に成立したボヘミアの庇護聖人ルドミラの讃詞(Homelia in festo Ludmile, patrone Bohemiorum)との比較を行い、多くの類似の語彙や比喩的イメージがあることを指摘し、また、祖母から孫への信仰伝達の図式が(ルドミラ⇒聖ヴァーツラフとオリガ妃⇒ウラジーミル聖公)似ていることなどから、スラブ語に訳されたと推定されるルドミラ讃詞(現存はしていない)がオリガ妃への讃詞に影響を与えたのではないかと推定している[Якобсон 1953 (1987): С. 52–53][Якобсон 1976: С. 49–50]。

【スヴァトスラフは息子のヤロボルクにキエフ地方、オレーグにドレヴリャネ人の地の支配を委ねる。ウラジーミルはドブリニャとともにノヴゴロドへ行く】[№ 54]

6478(970) 年

スヴァトスラフ [03] は、ヤロボルク [04] をキエフに、オレーグ [05] をドレヴリャネ人のところ³⁴⁷⁾ に据えた³⁴⁸⁾ (посади)。

この時ノヴゴロドの人々がやって来て自分たちのために公を求め³⁴⁹⁾、「もしわれらのもとに[誰かが]来てくれなければ、われらは自分たちの公を探し出します³⁵⁰⁾」と言った。そこでスヴァトスラフ [03] は、かれらに向かって「お前たちのもとに行くのは、いったい誰がいいかな？」と言った。だがヤロボルク [04] とオレーグ [05] は断った。そこで、ドブリニャ³⁵¹⁾ (Добрыня) がノヴゴロド人たちに言った「ウラジーミル³⁵²⁾ [06] を〔公として〕頼みなさい」。

347) 「ドレヴリャネ人のところ」(въ древлѣньхъ) は、*ПВЛ* では в Деревѣхъ となっている。

348) スヴァトスラフは、先のベチェネグ人による包囲 ([№ 48–50, 51]) を教訓として、息子のうち兄のヤロボルクをキエフ防衛のための指揮者として置き、弟のオレーグを謀反の可能性のあるドレヴリャネ人の地（上注 83）の代官 (посадник) として派遣した。二人がある程度の年齢に達して（十代半ばくらい）ルーシ人支配を軍事的に固める能力があると判断したのだろう。ここでウラジーミルについて触れていないのは、非常に年少だったからであろう（下注 352）。

349) キエフ公の息子がノヴゴロドに派遣されていたことについては、年代記には記録はないが、コンスタンティノス七世紫袍帝（ボルフュロゲネトス）『帝国統治論』、「イーゴリの息子スヴァトスラフ」が「ノヴゴロド」にいた（上注 133）という記述があり、すでに慣習になっていたようである。ノヴゴロド人にとっては、交易の安全を確保し、主に北方のノルマン系諸族の干渉・攻撃から都市を守るために、協定にもとづいた軍勢力が必要であり、オレーグ＝イーゴリが去って、その勢力がキエフに定着した後も、その一族から防衛のための何らかの軍隊の派遣を受けていたのだろう。

350) あとで言及される、ポロツクのログヴォロド一族、トゥーロフのトゥール一族のように（下注 410）、当時の北西ルーシ地方一帯には、リュウリク一族と同等の軍勢力を持つ機動的なノルマン＝ヴァイキング系軍事集団（ヴァリャグ人）が存在しており、ノヴゴロド人はそのような集団を探し出して、協定を結ぶと言っているのである。

351) 「ドブリニャ」(Добрыня) は母方の叔父としてウラジーミルに仕えて、かれの家臣で軍司令官 (муж и воевода) となり、のちにはノヴゴロドへ代官 (посадник) として派遣されている。ブリリーナに登場する勇者 (богатырь) Добрыня Никитич の原型となったとされる人物。

352) のちにルーシを受洗させることとなる「ウラジーミル」は本年代記ではここが初出。生年についての確かな史料はないが、イパーチイ年代記に記されている父ヴァトスラフの生年 942 年（上注 137）を踏まえ、さらにウラジーミルの最初の息子ヴィシエスラフ [09] の生年が 977 年頃であることを勘案すると、960 年前後の誕生が妥当になるだろう。その場合この記事の時点（970 年頃）で 10 歳ほどの年少者であり、キエフおよび周辺城市の代官を任じられなかった理由（上注 348）もわかる。

ウラジーミル [06] は、オリガの鍵番³⁵³⁾ (ключница) のマルーシャ (Малуша) から〔生れた者〕であり、マルーシャはドブリニヤの姉妹だったのである。かれら〔二人の〕父はリューベチ人マルク³⁵⁴⁾ (Малко любцанинь) であり、ウラジーミル [06] にとってドブリニヤは、母方の伯叔父であった。

そこでノヴゴロド人たちはスヴァトスラフ [03] に言った。「われらにウラジーミル [06] を下さい」。かれ〔スヴァトスラフ〕はかれらに言った。「これがお前たちの〔公〕だ」。ノヴゴロド人たちはウラジーミル [06] を、自分たちの〔公として〕受け入れ、ウラジーミル [06] は、自分の伯叔父のドブリニヤとともにノヴゴロドへ向けて出発した。

一方、スヴァトスラフ [03] はペレヤスラヴェツへ〔出発した〕。

【スヴァトスラフは、ブルガリア人が立てこもったペレヤスラヴェツを陥落させる： 第二次ブルガリア遠征】 [№ 55]

6479(971) 年

スヴァトスラフ [03] はペレヤスラヴェツに着いた。ブルガリア人は、城市〔ペレヤスラヴェツ〕に立てこもった。そしてブルガリア人は、スヴァトスラフ [03] に戦いを仕掛けるために〔城市から〕出撃した。激しい斬り合いがあった。ブルガリア人が打ち勝った³⁵⁵⁾。スヴァトスラフ [03]

353) 「鍵番」(ключница) (男性形 ключник) は、鍵の管理者という意味から、支配層の屋敷における家政の責任者を指している。『ルーシ法典』(拡大版) 第 110 条には完全奴僕身分(обелное холопство)になる 3 種類の場合の三番目に、「無条件で鍵を自分に結んだ者」(привяжуть ключъ к собѣ без ряду) という条文があり、主人に身を預けて家政を担当する不自由身分の者と考えられる。マルーシャがオリガに仕える奴僕身分だったことは、980 年の記事で、かの女の息子ウラジーミル [06] がポロツク公女ログネダから「奴隷女の息子」робичиц/робичичъと呼ばれている(下注 407) ことから確かめられる。なお、*Ин. Хлб.* ではこの箇所で милостница の語が使われており、スレズネフスキイはこれを ключеница のもう一つの呼び名と考えている。そして、マルーシャはオリガの「寵愛(милость)」を受けているお気に入りの者だった(それゆえ信頼されて鍵を管理させた)と解釈し、オリガ妃との近さを強調している [Срезневский 1864: С. 27–32]。

354) 「リューベチ人マルク」(Малко любцанинь) については、Малко (*Лер. Малькъ, Ин. Малько*) は、ドレヴリャネの公 Маль (上注 198) の指小形で同一人物とする説が出されているがいかに無理がある ([Шахматов 1908][Прозоровский 1864] および [Древняя Русь: С. 474: Мал, Малк Любечанин] を参照)。リューベチは *ПВЛ* 882 年記事でオレーグ [00] が征服した城市として (上注 117), *ПВЛ* 907 年のオレーグとビザンツ皇帝との協定締結の記事ではキエフに次ぐ都市として、チェルニゴフ、ペレヤスラヴリ、ポロツク、ロストフと並んで言及されており、さらにコンスタンティノス七世の『帝国統治論』(上注 129) にもルーシ公(おそらくイーゴリ [02]) 支配下の城市としての言及がある。そのような、城市の出身者ということは、リューベチの在地の豪族(周辺部族の族長)であり、キエフ公に従属してこれを支え、その子供たち(ドブリニヤとマルーシャ)が宮廷に仕えていたというくらいの理解が妥当ではないか(これについては下注 409 も参照)。

355) 「打ち勝った」は *НЛ-М* 全写本で одолѣша (アオリスト形) だが、*ПВЛ Лер. одоляху, Ин. НК1 одолѣваху* (インパーフェクト形) である。ここでは、意味的にはインパーフェクト形が相応しいが、どちらの読みが本来的であるかは判断が難しい。

は自分の軍兵に言った。「もはやわれらはここで倒れるしかない。おお、頑張ろう³⁵⁶⁾、兄弟たちよ、従士たちよ」。

夕方近くに、スヴァトスラフ [03] が打ち勝ち、突撃によって城市を占領した³⁵⁷⁾。〔スヴァトスラフは〕言った。「見よ、これはわしの城市である」³⁵⁸⁾。

【スヴァトスラフはギリシアの城市を攻める】 [№ 56]

そしてギリシア人のもとに使者を遣ると、かれらにこのように言った。「わたしはお前たちを攻めに行き³⁵⁹⁾、お前たちの城市を占領しようと思う。これ〔城市ペレヤスラヴェツ〕に対してわれらがなしたように」。

ギリシア人は言った。「われらは、あなたたちに対抗する力がありません。だから、われらとわれらの従士たちに貢税³⁶⁰⁾を課して下さい。われらに、あなたたちが何人いるか知らせて下さい、頭数だけ納めますから」。ギリシア人がこう言ったのはルーシ人を騙そうとしたのである。ギリシアは今日に至るまで人を騙して³⁶¹⁾いるのだから。スヴァトスラフ [03] はかれらに言った。「われらは2万人である」。^[122]かれは**実際より**さらに1万人水増しをしたのである³⁶²⁾。そして、ギリシア人は、スヴァトスラフ [03] を攻めるために10万〔の軍兵〕を装備し、貢税は納めなかった。

スヴァトスラフ [03] は、ギリシア人を攻めるべく兵を進めた。〔ギリシア人は〕ルーシ人を迎え撃つべく〔城市から〕出撃した³⁶³⁾。ルーシ人はこれを見て、軍兵が多いので非常に恐れた。

スヴァトスラフ [03] はかれらに言った。「すでにわれらには身を隠すべきところがない。欲しうが欲しまいが、迎え撃たねばならないのだ。ルーシの地を辱めないように、ここに屍を晒そう。なぜなら死者は辱しめを受けないからである。もしもわれらが逃げるならば、われら

356) 「頑張ろう」(потягнемъ) の表現については上注 234 参照。

357) 「突撃によって城市を占領した」(взя град копиемъ) は文字通りは「槍」(копье) をもって取ったということ。槍は城市突撃の際の主要な武器であることから、この表現が定着したと考えられる。

358) この「言った。これはわしの城市である」(и рече «Се градъ мой») は *Н1-М* 全写本と *Ип.* にある読み。

359) この使者に託した宣戦の儀礼的表現については上注 299 を参照。

360) この「貢税」(дань) については上注 156 を参照。

361) 「ギリシア人は今日に至るまで人を騙しているのだから」(суть бо грѣци льстиви и до сего дне) にあるような、ギリシア人は狡猾な存在であるという著者の評価は、これまでも皇帝の使者がオレーグ [00] に毒を盛ろうとする [№ 19]、皇帝がオリガ妃を妻にしようとする [№ 37] などのエピソードのなかで暗示されていた。なお、「今日に至るまで」(и до сего дне) の「今日」は上注 203 および上注 249 と同様に、*ДКС* が成立した 1039 年頃の時点と考えるべきだろう。

362) ここの読みは *Н1-М* толико же приложи еще к тому 10 тысящъ *ПВЛ: Лер. Ип.* и прирече 10 тысящъ, **бѣ бо руси 10 тысящъ толко.** の異同がある。

363) ここは「出撃した」(изидоша) であることから、城市・要塞から出たことが想定される。ビザンツ史料によれば、970 年にスヴァトスラフがアルカディオポリス（帝都から北西約 150km）まで迫ったときの戦闘に対応しているか [Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 198, 220]。

は辱めを受けるだろう。われらは逃げずに、しっかりと立とうではないか。わたしはお前たちに先がけて進もう。もしわたしの首が横たわったら、自分たちで考えてくれ³⁶⁴⁾」。そこで戦士たちは言った。「公よ、あなたの首の〔横たわる〕ところに、われらも自分の首を横たえましょう」。

こうしてルーシ人は武装し、同様にギリシア人も対抗して武装した。双方の軍隊を戦闘を行い、ルーシ人は包囲した³⁶⁵⁾。激しい斬り合いが起った。そしてスヴァトスラフ [03] が勝ち、ギリシア人は敗走した。

スヴァトスラフ [03] はさらに都へ向けて³⁶⁶⁾ (къ граду) 進軍を始めた。戦いながら、諸城市を破壊した。これら〔諸城市〕は今日に至るまで荒れ果てたままである。

【スヴァトスラフはビザンツ皇帝と和を結び、貢税を取ってペレヤスラヴェツに戻る】 [No. 57]

皇帝³⁶⁷⁾ は自分の貴族たちを宮殿 (полати) に呼び集め、かれらに言った。「われらはどうしたらよからうか。もし、かれ〔スヴァトスラフ〕に対抗して守り切ることができないとすれば」。貴族たちはかれに言った。「かれに贈物を送りなさい。われらはかれを試みましょう。かれは黄金と錦が好きかどうかを」。〔皇帝は〕黄金と錦を〔贈物として〕、そして賢明な家臣をかれ〔スヴァトスラフ〕のもとに送った。〔皇帝は〕かれ〔使者の家臣〕に言った。「かれ〔スヴァトスラフ〕の眼差しとかれの顔つき、そしてかれの考えを見てこい」。かれ〔使者〕は贈物を持つと、スヴァトスラフ [03] のもとに行った。

スヴァトスラフ [03] のもとに知らせが届いた。ギリシア人たちがやって来て拝礼するという。スヴァトスラフ [03] は言った。「かれらをここへ連れて来い」。かれ〔使者〕はすぐに連れて来られた。その使者は、やって来て、そしてかれに対して拝礼をして、かれの前に黄金と錦を置いた。スヴァトスラフ [03] はそっぽを向いたまま、自分の従卒たちに言った。「取っておくがよい。誰が何を〔取ってもよい〕」。かれら〔従卒たち〕は取った。皇帝の使者たちは、これを目撃して、皇帝のもとに帰って来た。

皇帝は貴族と自分の高官たちを呼び集めた。使者は言った「われらはかれのもとに着き、[123]

364) この呼びかけの言葉については、レオン・ディアコノス『歴史』第9書7節では、971年7月に包囲されたドロストルにおける会合の席で、スヴァトスラフが戦士たちに語った次のような言葉が紹介されている。「われらは祖国に逃げ帰るべきではない。勝利して生き残るか、あるいは栄光とともに死ぬかだ。勇敢な男にふさわしい武功を果たして」[Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 209]。大きな状況と内容はかなり似ており、ともに同じ(類似的)フォークロア的な資料に依拠している可能性もある。

365) ゴシック体の長い文言は *Нl-M* と *Ип.* に共通の読み。 *Лер.* にはない。

366) 「都」(град) は「諸城市」(грады) と同じ語だが、単数形であり、以下宮廷における皇帝と側近たちの会話が続くことから、帝都(コンスタンティノポリス)を指していることは確かである。

367) この「皇帝」(цесарь) は、ビザンツ皇帝ヨアンネス一世・ツィミスケス(在位 969-976 年)(上注 255)を指している。

贈物を渡しました。しかし「かれは」われらを見ずに、ただ従卒たちに「贈物を」取るように命じました」。

そこに列席しているひとりが皇帝に言った。「更にもう一度かれを試しましょう。かれに戦いの武器を贈りなさい」。かれ「皇帝」はかれの言うことを聞いて、かれ「スヴァトスラフ」に剣と他の武器を贈った。皇帝の使者はスヴァトスラフのところに「贈物を」持参した。かれは受け取って、これを気に入って称賛し、あたかも皇帝自身にするように「使者に」接吻した。かれらは再び皇帝のもとに帰り、起ったことをすべて物語った。

貴族たちは言った。「かれは勇猛な男になるでしょう。財貨に見向きもしないで武器を受け取って、気に入っている。貢税を払いなさい」。皇帝は使者を遣って、こう言った。「城市「帝都」に来ないで下さい。欲しい貢税³⁶⁸⁾をわれらから取って下さい」。かれ「スヴァトスラフ」が、あやうく帝都に迫ろうとしていたからである。そしてかれ「スヴァトスラフ」に貢税を与えた。

かれ「スヴァトスラフ」は戦死者についても「貢税を」取って、言った。「かれ「戦死者」の一族が取るであろう」。そして、「スヴァトスラフ」は多くの贈物を受け取り、大きな賞讃に包まれてペレヤスラヴェツへと帰った³⁶⁹⁾。

【スヴァトスラフは再遠征の準備のためにルーシに向かうが、ペチェネグ人に阻止され、ドニエプル川河口で越冬する】 [№ 58]

「スヴァトスラフ」は自分の従士たちが少ないのを見て、内心でこう言った。「かれらは欺いて、わたしの従士たちとわたしを殺すのではないか」。部隊「の戦い」で多くの者たちが撃ち

368) この「貢税」(дань) も上注 156 と同様の償い金(和解金)を意味している。

369) この [№ 57] の、スヴァトスラフのもとに派遣した使者の報告とビザンツ皇帝と側近とのやり取りは、*ПВЛ* で続いて記述されるドロストルにおける和議のエピソード (*HI-M* にはない) に比べて具体性に欠けており、三回の繰り返しや内密の宮廷の会話が語られるなど、スヴァトスラフの質実剛健さを語るフォークロアの資料(歴史歌謡やブイリーナの原型のようなものか)を用いて書かれた事実性に乏しい記事と考えるべきだろう。

殺されたからである³⁷⁰⁾。そして「スヴァトスラフは」言った。「ルーシに帰り³⁷¹⁾、もっと多くの従士たちを連れて来よう」。³⁷²⁾

そして「スヴァトスラフは」船に乗って出発した³⁷³⁾。父の軍司令官³⁷⁴⁾スヴェネリドが、かれに言った。「公よ、馬に乗って迂回しなさい、ペチェネグ人が〔ドニエプル川の〕早瀬³⁷⁵⁾ (пороги) に陣を布いていますから」。「スヴァトスラフは」かれの言うことを聞かず、船で出かけた。

ペレヤスラヴェツ人³⁷⁶⁾はペチェネグ人のもとに使者を遣り、このように言った。「スヴァトスラフ [03] が、ルーシに向かってあなたの方の方に進んでいます。ギリシアから多くの財貨と数え切れないほどの捕虜を取り、少数の従士たちを連れて」。ペチェネグ人はこれを聞いて、

370) スヴァトスラフの第二次ブルガリア遠征で、かれの軍隊が壊滅的な戦死者を出したことについては、レオン・ディアコノス『歴史』が具体的に記している。その第9書11節によれば971年7月のドロストルの包囲戦の後の協定では「ロース〔ルーシ〕人の軍は6万を数えたが、〔協定で定められた〕穀物を受け取ったのは死をまぬかれたわずか2万2千人で、それ以外の3万8千人はローマ人の武器の前に斃れた」[Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 211-212] 栗生沢 2015: 273-274 頁]と書かれている。

371) スヴァトスラフの帰国とその死については、レオン・ディアコノスは『歴史』第9書12節に、本年代記の記述とほぼ同じ状況が書かれている。「スヴァトスラフ (Σφενδοσθαβρος) はドロストル (Δορυστολον) を離れるにあたって、協定にしたがって捕虜を返還した。残った戦士たちとともに〔船で〕出発した。自分の祖国に向けて。ペチェネグ人 (πατζινακαι) は道中で待ち伏せした。これは多数の遊牧の民族で、シラミを食べる者たちであり、住居を運び、人生の大半を荷車で過ごす。かれらはほとんどすべて〔のルーシ人〕を撃ち、他の者たちと一緒にスヴァトスラフを殺した。ルーシ人 (Ρῶς) の戦士のほんの少数だけが傷を負わずに祖国に戻った」[Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 213]。

372) この箇所では、*ПВЛ* のテキストでは、ドロストル (Дерестер) (現在のブルガリア、シリストラ市) にいた皇帝への使者派遣のエピソードと皇帝と結んだ和平協定文が記されているが、*НМ* にはそのテキストはない。この前後の物語の筋がスムーズにつながっていることなどから、シャフマトフ、リハチョフを初めとする研究者は、もとの資料 (*КНС*) のこの箇所に *ПВЛ* の編者が挿入を行ったと考えている。

373) *ПВЛ* の対応箇所には *къ порогом* (〔ドニエプル川の〕早瀬に向けて) の語句がある。

374) 「父の軍司令官」(*отень Свѣнелдъ*) とスヴェネリドが呼ばれているのは、かれがイーゴリ [02] に仕えた軍司令官であり、その地位は公の代替わりがあっても続いており、スヴァトスラフはかれを側近として重用していることを指している。このような、父親の重臣を引き継ぐ慣習は、その後も公族の中に残されている。

375) 「早瀬」(*пороги*) は、ドニエプル川の現在のドニエプロ市とザボリージャ市を結ぶ長さおよそ70kmで50mの標高差のある急流の川筋を指しており、大小30～40の急流と、60の島(中州)があり、キエフとビザンツ諸都市との間の船による交易にとっては最大の難路だった。10世紀の『帝国統治論』(上注129)にも早瀬(*φραγμός*)として言及されており、そのうちの7つの呼び名については、ロース人(*Ρῶσισι*)とスラブ人の言葉(*Σκλαβηνιστι*)で記されているほど、その克服には意を払っていたことが分かる[帝国統治論 2017: 219-221 頁]。軍兵と「財貨と捕虜」を積んだ船団がドニエプル川を遡行する際にも最大の障害だったはずであり、当時ルーシ人と戦争状態にあったペチェネグ人にとっては絶好の待ち伏せの場であった(下注379も参照)。

376) 「ペレヤスラヴェツ人」(*перяславци*)は城市の住民を指すが、ここではスヴァトスラフに城市を占領されたブルガリア人であり、依然としてかれに敵意を持っていたということか(上注312)。あるいは、次注377の皇帝がペチェネグ人のもとに派遣した使者のことを指しているのかもしれない。

[124] ペチェネグ人は早瀬を占拠した³⁷⁷⁾。スヴァトスラフ [03] は早瀬に着いたが、³⁷⁸⁾ 通り抜けることができなかった³⁷⁹⁾。そこで、かれは越冬するためにペロベレジエ³⁸⁰⁾ (Бѣлобережье) にと

377) スヴァトスラフの帰国の状況について、上記レオンの記述（上注 371）の他に、ヨハネス・スキュリツェス『歴史概観』では、ペチェネグ人の襲撃に関して次のように書かれている。スヴァトスラフが皇帝ヨハネス・ツィミスケスと協定を結んだとき、「スヴァトスラフの要請をうけて皇帝はペチェネグ人へ使者を派遣して、講和と同盟を提案し、イストル〔ドナウ〕川を越えないこと、ブルガリアを荒廃させないこと、ルーシ人がかれらの地を通して帰国するときに邪魔をせずに通すことを要請した。（…）〔ペチェネグ人は〕使者を受け入れ、提案された条件で協定を結んだが、ルーシ人を通すことだけは拒んだ。（…）スヴァトスラフが帰国の途につき、ペチェネグ人の地を通ったとき、かれらはあらかじめ待ち伏せていた。そして襲撃し、かれ〔スヴァトスラフ〕とすべてのかれの軍隊は完全に壊滅させた。ペチェネグ人はかれがローマ人と協定を結んだことに怒っていたのである [Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 233]。

378) *ПВЛ* と *НСГ* ではここに порогов（早瀬）の語があるが、*НІ-М* 全写本ではない。

379) 早瀬をめぐるルーシとペチェネグ人との確執については『帝国統治論』第 2 章に次のような記述がある「ルーシ人は戦いのためであれ、商いのためであれ、ペチェネグ人と和平を保つことなく、皇帝のいるこのローマ人の都に来ることはできない。なぜなら、ルーシ人が船とともに川の早瀬 (φραγμός) に来ると、かれらの船を川より引き揚げ、肩に担いで運び越えることなしに通過し得ないのであるから。この時、このペチェネグ人がかれらを襲い、これを容易に打ち負かし、殺戮するのである。〔ルーシ人が〕二つの仕事を同時に行うことができないゆえに〔山口 1966:118 頁〕。このときスヴァトスラフがペチェネグ人と和を結んで（和平を保って）いなかったことについては、*ПВЛ* 970 年記事に「ペチェネグ人はわれらと戦争状態にある」（печенѣзи с нами ратьни）[ПСРЛ Т.1: Стб.72] と記されていることから分かる。また、スヴァトスラフの帰国部隊がわざわざ早瀬のところまで行ってから、通り抜けられないことを知ったということは、スヴァトスラフは、上注 377 のビザンツからペチェネグ人への通行許可要請が実現すると思い込んでおり、ペチェネグ人が要請を拒否したことを知らなかったということになる。

380) 「ペロベレジエ」(Бѣлобережье) は現在のドニエプル川河口のすぐ南にある洲（デルタ）の地名で、現在は「スヴァトスラフのピロベレージャ」(Білобережжя Святослава) 国立公園として整備されている。語源的には「白い岸」の意味だが、白い (бѣл-) は方角の「南」を指していると考えられ [Етимологічний словник 1985: С. 27]、実際河口の南側に位置している。*ПВЛ* 945(1) 年のイーゴリ [02] とビザンツ皇帝との和平協定第 10 条にこの地についての言及があり、ルーシ人〔商人〕はペロベレジエで越冬する権利を持たず、秋までにルーシに引き揚げべきとされており、スヴァトスラフがここで越冬したのは緊急事態であったことが分かる。実際スヴァトスラフの船団は、早瀬の入り口（現在のザポリージャ）に達したが、ペチェネグ人に阻止され、越冬のために 300km 近くドニエプル川を引き返さざるを得なかった。

どまった。³⁸¹⁾ 激しい飢えが起った。馬の頭が半グリヴナするほどだった³⁸²⁾。³⁸³⁾ 春が来た。

【スヴァトスラフはペチェネグ人によって殺害される】 [№ 59]

これがヤロ波尔クの公としての支配である³⁸⁴⁾。6480(972) 年

スヴァトスラフ [03] は早瀬へと出発した。ペチェネグ人の公クーリャ³⁸⁵⁾ (Курия) が襲いかかった。そしてスヴァトスラフ [03] を殺した。かれの首を取り、かれの頭蓋骨で杯³⁸⁶⁾ を作って³⁸⁷⁾、それで「酒を」飲んだ。

スヴェネリドはキエフのヤロ波尔ク [04] のもとに戻った。

381) *ПВЛ* には и не бѣ у них брашна (уже) (かれらにはもはや食料がなく) の文言があるが、*НІ-М* 全写本にはない。

382) 「激しい飢えが起った。馬の頭が半グリヴナするほどだった」(и бѣ гладь великъ, по полугривнѣ голова князя) の文言については、『ゲオルギオス・モナコス (ハマルトロス) 年代記』のスラブ訳 *Хроника Георгия Амартола (ХГА)* に бысть гладь велии яко продатися главѣ осли на 30 сребрьникъ (激しい飢えが起こった。驢馬の頭を銀貨 30 枚で売るほどだった) [Вілкул 2015: С. 122] [Истрин 1920: С. 180] という非常に類似した文言がある。ミヘエフは、これを借用として、*ПВЛ* 編纂のニーコン集成の段階での挿入としている [Михеев 2011: С. 209]。いずれにせよ、この文言は後代の文飾的挿入であり、事実を反映している度合いは低いだろう。

383) *ПВЛ* には и зомова Святослав ту (スヴァトスラフはそこで越冬した) の文言があるが、*НІ-М* 全写本にはない。

384) この А се кнжение Ярополче は、年代の前に一種の表題として付したもののだろう (下注 388 参照)。

385) ペチェネグ人の公 (князь) については [№ 50] のエピソードで無名の「公」(князь) が言及されているが、ここでは「クーリャ」(Курия) と名が挙げられている。ただし、[№ 50] のエピソードの公と同一人物であるかどうかは不明。ペチェネグ人の部族については、『帝国統治論』第 37 章に全体で 8 部族に分かれ、それぞれに「大族長」(μεγάλος ἄρχοντας) がいるとされており [DAI: p. 166]、この ἄρχοντας が「公」に相当しているのだろう。プレトニョーヴァは、「クーリャ」を、この 8 部族のうちのうち、ハンガリーからドニエプル川西岸にかけて居住していた「ギュラ族」(Χαβουξιν-γυλά) の族長としている [Плетнева 1990: С. 13]。これはこの史料に「ギュラ族」の族長「クルクタイ」(Κουρκοῦται) の名があり、これを Курия と同一人物と解釈したのである。

386) 撃ち破った敵の首領の頭蓋骨でいわゆる髑髏杯を作る習俗はスキタイ人にあり、その影響からか、遊牧民匈奴の建国の祖〈冒頓単于〉の後継者〈老上単于〉が、月氏の王を殺害して髑髏杯を作ったことが知られている。ペチェネグ人のこの風習も広く遊牧民族の間に伝わったものかもしれない。

387) 「かれの頭蓋骨で盃を作って」(во лбѣ его сдѣлаша чашу) のあとに *ПВЛ*, *НКИ* では「かれの頭蓋骨に〔金属を〕かぶせて」(оковавши лобъ его) の文言が付されている。さらに *СІ* では оковавши златомъ лобъ его と「金」をかぶせたことが明記されている [ПСРЛ Т.5: С. 42]。さらに、『リヴォフ年代記』(Львовская летопись) ではこのエピソードへのコメントとして、Написаше же на ней сиче: «чюжимъ паче силы жалая, и своя си погуби за премногую его несытость». (その盃にはこう書かれていた。〈[自分の] 能力以上に望んだが、自らのあまりの食欲さゆえに自分のものを失った〉) の文言が添えられている [ПСРЛ Т. 20: С. 63]。これは、イーゴリ [02] の死も踏まえた後代の年代記記者の解釈によるものだろう。

ヤロ波尔ク [04] はキエフで公として支配した³⁸⁸⁾。かれのもとにいた軍司令官はブルード (Блудъ) だった³⁸⁹⁾。

【空の2年の年紀：973～974年】 [№ 60]

6481(973) 年³⁹⁰⁾

6482(974) 年

【キエフ公オレーグは軍司令官スヴェネリドの息子リュートを殺す】 [№ 61]

6483(975) 年

スヴェネリドの息子 (Свѣньдиц) で名をリュート³⁹¹⁾ (Луть) という名の者が狩をしているうちに、キエフから出て、森の中で獣を追っていた³⁹²⁾。そしてオレーグ [05] が見つけて言った。「これは誰か」。「ある者が」言った「スヴェネリドの息子です」。「オレーグは」馬を寄せて「リュートを」殺した。オレーグ [05] が狩をしていたからである。このときからかれらの間に憎悪が起った。ヤロ波尔ク [04] がオレーグ [05] に対して「憎悪した」。

スヴェネリドは常々ヤロ波尔ク [04] にこう言っていた。「自分の弟に向かって兵を進め、かれの権力を取りなさい」。「スヴェネリドは」自分の息子の仇を討とうとしたのである。

388) この文言は、上注 384 の文言と重なる *HI-M* 編者による過剰な挿入だが、編者特有の公の代替わりを重視する手法の反映だろう。なお、*ПВЛ* ではこの箇所に И всѣх лѣтъ княженья Святослава лѣтъ 28 (スヴァトスラフの公支配は全部で 20 と 8 年であった) という文言があるが、これは 912 年記事の И бысть всѣх лѣтъ его княжения 33. (かれ [オレーグの] の公支配は 33 年であった) と類似の文言であり、こちらは *ПВЛ* 編者に特有の手法を反映している。

389) 「ブルード」(Блудъ) はヤロ波尔クの軍司令官として、ウラジーミルとの抗争を述べる 980 年記事 [№ 69–70] に登場する (下注 417)。Блуд の名の名前の語源は、スカンジナビアの出自として古ノルド語の blóði (流血の) に関連させる説があり、他方、980 年記事でウラジーミルの属性として多用されている古スラブ語 блѣдъ (姦淫の) もしくはポーランド語 błęd (錯誤) と結びつける説もある。後者の場合には、この人物自身が伝承的・文学的な創作による可能性も否定できない。

ここで、「かれのもとにいた軍司令官はブルードだった」(воєвода бѣ у него Блудъ) とことさらに記されているのは、*HI-M* 編者に特有の、公の交代の際に直属の軍司令官を紹介する定型的な表現によるもの (上注 109 参照)。

390) *ПВЛ* ではこの箇所に Нача княжити Ярополкъ (ヤロ波尔クが公として支配し始めた) と上注 384 に対応する表現がある。

391) 「リュート」(Луть; 標準綴 Лют) は *HI-M* 全写本で Луть だが、*ПВЛ* では Лер. Рѣз. Лютъ, Ип. Хлб. Логъ と綴りにユレがある。

392) スヴェネリド (ヤロ波尔クの軍司令官) が管轄していたキエフ地方の森を出て、オレーグ支配下にあるドレヴリャネ人の地の森に入ったということ。

【空の1年の年紀：976年】 [№ 62]

6484(976)年

【ヤロボルクはスヴェネリドに使嗾されてオヴルーチのオレーグを攻め、オレーグは橋から落ちて圧死する】 [№ 63]

6485(977)年

ヤロボルク [04] は、自分の弟オレーグ [05] を攻めるべくドレヴリャネ人の地へ行軍を始めた。オレーグ [05] がかれに対抗して「オヴルーチの城市から」出撃して、両者は戦闘準備をして、両部隊は戦い、ヤロボルク [04] がオレーグ [05] を打ち負かした。

オレーグ [05] は自分の軍兵とともに、オヴルーチ³⁹³⁾ (Вруцѣи) という城市に逃げ込もうとした。城市の門に通じる橋が堀に架かっていたが、かれらはひしめき、橋から堀へと互いに突き落し合った。オレーグ [05] も橋から谷「堀の」底へと突き落された。多くの人々がかれの上に落ちて、馬と人がかれ「オレーグ」を押し潰した。

ヤロボルク [04] は、オレーグ [05] の城市「オヴルーチ」に入ってかれの権力を取り、人を遣って自分の弟を探させた。かれを探したが見つけ出せなかった。するとひとりのドレヴリャネ人が言った。「わたしは昨日見ました。かれ「オレーグ」が橋から突き落されたのを」。ヤロボルク [04] は人を遣って探させた。朝から昼までかかって、堀の中から「戦死者たちの」死体を引き出した。そしてオレーグ [05] を「堀の底の」死体の下から見つけ出した。[125] 運び出して、かれ「オレーグの遺体」を敷物の上に置いた。

ヤロボルク [04] はかれの「遺体の」ところに来て、激しく³⁹⁴⁾ 泣いた。そしてスヴェネリドに言った。「³⁹⁵⁾ これこそお前が望んでいたことなのだ」。さらに、かれ³⁹⁶⁾ 「オレーグ」はオヴルーチ (Вручии) と呼ばれる城市のそばの場所に埋葬された。かれの墳墓は今日に至るまでオヴルー

393) 「オヴルーチ」(Вруцѣи) は初期の史料では Вручии, Вручии, Овручев 等と綴られ、ドレヴリャネ人の地の中心地。プリペチ川水系ウジ川 (Уж) の左岸支流ノルィニ川 (Норынь) 沿いの城市。現在のウクライナ、ジトミル州のオヴルーチ市 (Овруч) に相当する。オリガに攻略された旧い中心地コルテニ (上注 200) からなら北北東へ 42km ほど離れた場所にある。オレーグがドレヴリャネ人の地を支配したときに、その拠点地として建てられたのではないか。

394) この「激しく」зѣло は底本 (Км.) のみにある固有読みで、他の写本にはない。

395) ПВЛ ではこの箇所、вижъ (見よ) という語がある。

396) НІ-М は егъ と代名詞だが、ПВЛ では Ольга (オレーグは) と固有名詞になっている。

チの城市のそばにある³⁹⁷⁾。

そして、ヤロ波尔ク [04] はかれ「オレーグ」の権力を取った。

【ヤロ波尔クの妻について】 [№ 64]

ヤロ波尔ク [04] には、ギリシア人の妻³⁹⁸⁾があり、以前かの女は修道女だった。かれの父スヴァトスラフ [03] がかの女を連れて来て、かの女の顔が美しかったために、〔妻として〕ヤロ波尔ク [04] に与えたのである³⁹⁹⁾。

【ウラジーミルは海の向こうに逃げ、ヤロ波尔クはルーシの支配者となる】 [№ 65]

ウラジーミル [06] は、ヤロ波尔ク [04] がオレーグ [05] を殺したことをノヴゴロドで聞き、恐れて海の向こうへ逃げた⁴⁰⁰⁾。

ヤロ波尔ク [04] は代官たち⁴⁰¹⁾をノヴゴロドに置き、ルーシにおいてただひとりで支配していた。

【空の1年の年紀：978～979年】 [№ 66]

6486(978)年

397) オヴルーチのオレーグの墳墓は 1044 年に改葬されていることから、「今日に至るまで」(и до сего дни)の「今日」はこの年以前であることは確かである。シャフマトフは、*ПВЛ* と *НІ-М* のテキストの最古層にあったと想定される年代記集成「キエフ最古集成 1039 年」(*Древнейший Киевский свод 1039 г.: ДКК*) の存在を仮定しており、その場合この「今日」はこの集成が成立した 1039 年の時点が最も相応しい [Шахматов 1908 (2002): С. 281]。上注 203, 249, 361, 502 も参照。

398) この「ギリシア人の妻」(жена грикинѣ) は、ウラジーミル [06] がヤロ波尔ク [04] を殺害した後に自らの妻にした女であり、スヴァト波尔ク [07] の母親でもある。

399) [№ 65] は内容も文脈も前後の記事と整合しないことから、挿入が疑われる。ミヘエフは *КНС* の編者による挿入としており [Михеев 2011: С. 224, прим. 352]、シャイキンも、のちにウラジーミルがこのギリシア女を妻とするエピソードやログネダ略奪のエピソードの著者と同じ手になる挿入と考えている [Шайкин 2011: С. 497–498, прим. 516]。

400) ウラジーミルが恐れた (убоявсь) のは、オレーグ [05] が死にドレヴリャネ人の地がキエフに併合されたことによって、兄弟間の力関係が変わり、いつでも自分がオレーグと同じ境遇にさらされ得ると危惧したのだろう。そして、ヤロ波尔ク [04] に対抗できるだけの軍事力 (ヴァリャーグ人傭兵 [№ 73]) を徴募するために、「海の向こう」(за море), すなわちヴァリャーグ人の地へ向かった。そのことは、2年後にウラジーミルが雇い入れたヴァリャーグ人を伴ってノヴゴロド帰還し、抵抗も受けずにヤロ波尔クの代官を追放し [№ 67]、すぐさまボロツクへ軍事遠征を敢行している [№ 68] ことから見て明らかである。

401) ここは「代官」(посадникъ) についての年代記における最初の言及。最初期 (10 世紀～11 世紀初め) のキエフ公は自分の息子たちを支配下の諸城市 (領地 (волость) と呼ばれる) に「据えて」(посадити) その地の支配を代行させ、徴税などを担わせていたが、同様に血縁ではない重臣たち (мужи, бояре) を「据える」こともあった。後者のような場合にその者は特に посадник (代官) と呼ばれた。なお、ここでは *НІ-М* 全写本 посадники だが、*Лер.* посадники своя, *Ип.* НКІ. посадник свои になっている。

6487(979) 年

【ウラジーミルはノヴゴロドにいたヤロ波尔クの代官たちを追放する】 [№ 67]

6488(980) 年

ウラジーミルの公支配の始まり⁴⁰²⁾。

ウラジーミル [06] はヴァリャーグ人とともにノヴゴロドにやって来て、ヤロ波尔ク [04] の代官たちに言った。「わたしの兄のもとに行け、そしてかれにこのように言え。〈いま、ウラジーミル [06] があなたを攻めるべく兵を進めようとしている。これに対抗して戦いの準備をするように⁴⁰³⁾〉と」。

【ウラジーミルはポロツクを占領する】 [№ 68]

〔ウラジーミル〕はノヴゴロドに座し、ポロツク⁴⁰⁴⁾ (Полочк) のログヴォロド⁴⁰⁵⁾ (Ровьгольд) に使者を遣って⁴⁰⁶⁾ 次のように言った。「わたしはあなたの娘をわたしの妻にしたいと思う」。

402) この Начало княжения Володимира の文言は *HI-M* 全写本と *HCΓ* にはあるが *ПВЛ* にはない。公の代替わりを明示する *HI-M* 編者の挿入によるもの（上注 384, 388 参照）。なお、以下ではさらにヤロ波尔クとウラジーミルとの抗争が記述されており、ウラジーミルが兄を殺害して最終的にキエフの公座に就くのは先のことであり、修道士ヤコフの『ウラジーミルの記憶と讃詞』（Иаков Мних. Память и похвала князю русскому Владимиру）の末尾に示されている年代によれば 6486(978) 年 6 月 11 日にキエフに入城している [БЛДР Т.1 : С. 326]。こちらが事実をより反映しているだろう。

403) このような宣戦の言葉を伝えさせたのは、スヴァトスラフ [03] の場合と同じ（上注 299, 359）軍事儀礼だろう。なお、16 世紀の『ニーコン年代記』の対応箇所では、この言葉に続いて「ヤロ波尔クは自分の弟ウラジーミルのこの〔言葉〕を聞くと困惑し、多くの軍兵を集め始めた。かれ自身とても勇敢だったからである。かれの軍司令官ブルードがかれに言った〈あなたの弟のウラジーミルは対抗することができません。四十雀が鷲に戦いを挑むようなものです。戸惑ってかれを恐れることはありません。自分兵士を集める労などとるに足りません〉。このブルードは自分の主人ヤロ波尔クに対して計略でこう言ったのである。なぜなら、かれはウラジーミルによって懐柔されていたのだから」[ПСРЛ Т. 9: С. 39] の文言が追加されている。

404) 「ポロツク」(Полочк, Полоцк, Полотьск, Полотск) は、西ドヴィナ川支流ボラタ（ポロタ）川河口に位置する城市で、10 世紀末にウラジーミルの息子イジャスラフ [08] が公として座して以降、この城市を中心としてキエフからの独立性が高い「ポロツク公国」が形成された。現在のベラルーシ共和国の首都ポラツク（Полацк）に相当する。その住民については *ПВЛ* の序章部分に「〔西〕ドヴィナに流れ込むボロタ（Полота）という名の小川のゆえに、その川によってポロチャネ人（полочане）と呼ばれたのである」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 8] と解説されている。

405) ログヴォロド（Рогволод; Ровьгод, Рогьволод, Роговолод）の名は、古ノルド語 Rognvaldr に対応するノルマン系の人名をスラブ語表記したもの。10～13 世紀の北欧諸国では Ragnvald（古英語 Regenweald）、Rögnvald（Rognvald）などの名を持つ君主（伝説上も含め）を多く見出すことができる。

406) 返事を持って戻ってきたのが配下の「従卒たち」（отроки）であることから分かるように、ウラジーミルは通常の求婚儀礼で求められる高官からなる使節団（上注 223 参照）を派遣せず、低い身分の者を派遣したように書かれている。これによれば、ウラジーミルは初めから拒絶されることを見越して、ポロツク攻撃の口実を作るために求婚したという解釈も可能である。

そこでかれ〔ログヴォロド〕は自分の娘に言った。「お前はウラジーミル [06] に嫁ぎたいか」。するとかの女は言った。「奴隷女の息子⁴⁰⁷⁾ (робичич) の履物を脱がせる⁴⁰⁸⁾ など嫌です。そうではなく、ヤロ波尔ク [04] に嫁ぎたい⁴⁰⁹⁾」。

ログヴォロド (Рогъволодь) は海の向こうから来た者で、かれはポロツク (Полотьск) で自分の権力〔支配地〕を持っていた。他方、トゥール⁴¹⁰⁾ (Туры) はトゥーロフ⁴¹¹⁾ (Туров) において〔権力を持っていた〕。トゥーロフ人 (турица) というのは、かれからその呼び名を得たのである。

ウラジーミル [06] の従卒たちが帰って来て、ポロツクの公ログヴォロドの娘ログネダ⁴¹²⁾ (Рогньда) の言ったことをすべてかれ〔ウラジーミル〕に伝えた。ウラジーミル [06] は

407) ログネダがウラジーミルを「奴隷女の息子」(робичич)と呼んでいるのは、かれの母親マルーシャが不自由身分の「鍵番」(ключеница)出身だったことによる(上注353)。なお、*Ин. Хлеб.* では робичич の代わりに Володимера となっており、これは先の参照箇所でも *Ин. Хлеб.* が ключеница の代わりに милостница となっていることと併せて、この系統の写本はウラジーミルの「奴隷」出自を隠そうとする傾向のあらわれだろう。

408) 「履物を脱がせる」(розувати)ことは、民間で行われている幸福な結婚を願う新婚儀礼で、ダーリのロシア語辞典には、разуваньє (履物を脱がせること)の語義として「新婦が恭順のしるしとして新郎の長靴を脱がせる。そして、その中にお金を見出す」との説明がある。

409) このログネダの求婚拒絶の言葉について、リトヴィナとウスペンスキイは、アイスランド・サガの分析をもとに、10世紀当時のスカンジナビアの相続に関する慣習を踏まえたものと解釈している。すなわち、その慣習によれば、伝統的な求婚儀礼と約定によらず、略奪や捕虜として連れてきた女の子は、女の身分にかかわらず「奴隷女の息子」とみなされ、父親の死後の一族の遺産継承については完全に無権利であった。これにより、ログネダはウラジーミルには死んだ父スヴァトスラフの財産や支配地の継承権がないと見なしたとことが、拒絶の主な理由であるという。研究者は、ポロツクとキエフの支配権を実力で奪い取ったウラジーミルに、権力継承の慣習に対する実力による改革者を見ている[Литвина, Успенский 2013][Литвина, Успенский 2018]。もしその場合には、リューベチ人マルクはスヴァトスラフに征服された地方豪族であり、マルーシャは捕虜(もしくは人質)として宮廷に入れられ、伝統的求婚儀礼抜きでスヴァトスラフの〈妻〉となったことになる(上注354も参照)。

410) このトゥーロフ(次注)の創建者とされる「トゥール／トゥールイ」(Турь; Туры, Турын)については、「ログヴォロド」と異なり語形が短いことからスカンジナビア起源(古ノルド語 *Þórir*, *Puri*, スウェーデン語 *Tore* からなど)もしくはスラブ起源(ギリシア語 *ταύρος*, ラテン語 *taurus* と同根の турь (牡牛・野牛) からなど)の両方の起源の解釈が可能であり、さらに турица, туровци (トゥーロフ人)の起源を説明するために、地名から人名を遡って作られた民間語源という説も出されている。本年代記の文脈では、ログヴォロドがヴァリャグ人出身の独立公であることを強調するために例示されたものである。

411) 「トゥーロフ」(Туров)はブリピャチ川(Припять)支流のヤズディ川とストルメニ川の河口に位置し(ブリピャチ川から25kmほど)、東スラブ人の部族ドレゴヴィチ人(дреговичи)の居住地域の中心にあっていた。13世紀中頃までリューリク王朝出身の公による支配が行われていた。現在のベラルーシ、ホメリ州のトゥーラウ(Тураў)に相当している。

412) 「ログネダ」は標準綴 Рогньда。НІ-М Км.Ак.; ПВЛ Ин.; НКІ は Рогньда で、Рогньда としているのは НІ-М Бр. Тр. だが、前者が本来の形に近い。この名についてファスマー語源辞典では古アイスランド語 *Ragnheiðr* を示しており[Фасмер Т. 3: С. 490]、スカンジナビア起源が通説になっている。さらに、Рог-ньда は父の Рог-волод の名の形態を部分的に受け継いでおり、これはゲルマン系民族の間で広がっていた慣習に則ったものとも考えられる[Успенский Ф. 2002: С. 61–62, прим. 31]。

多数の軍兵を集めた。ヴァリャーグ人、スロヴェネ人、チューズ人、クリヴィチ人⁴¹³⁾である。そして、ログヴォロドを攻めるべく兵を進めた。この時、ログネダをヤロボルク [04] に嫁がせ[ようと] していたのである⁴¹⁴⁾。ウラジーミル [06] は、ポロツクへ向けて進軍すると、ログヴォロドとかれの二人の息子を殺し、[126] かれの娘を妻としてとった⁴¹⁵⁾。

【ウラジーミルはキエフへ進軍して包囲し、ヤロボルクの軍司令官ブルードを調略する】 [№ 69]

そして[ウラジーミルは]ヤロボルク [04] を攻めるべく兵を進めた。そしてウラジーミル [06] は多くの軍兵を率いてキエフに攻めて来た。ヤロボルク [04] は迎え撃つことができず、自分の家来たちおよび**軍司令官**⁴¹⁶⁾ ブルード⁴¹⁷⁾ (Блуд) とともに、キエフに立て籠もった。ウラジーミル [06] はドロゴジチ⁴¹⁸⁾ (Дорогожиць) に布陣して、ドロゴジチとカピチ⁴¹⁹⁾ (Капич) の間に壕を掘った。その壕(ров)は今日に至るまでである⁴²⁰⁾。

ウラジーミル [06] は、ヤロボルクの軍司令官ブルードのもとに使者を遣り、欺いて言った。

413) ウラジーミルが動員したここに列挙されている「軍兵」のうち、ヴァリャーグ人はかれ自身が連れてきたヴァリャーグ人傭兵であり、スロヴェネ人、チューズ人、クリヴィチ人は[№ 8-9]のエピソードにもあるように、ノヴゴロドの地に居住する諸民族である。

414) この一文から、キエフ(ヤロボルク)とポロツク(ログヴォロド)の間で婚姻同盟の準備が進められていたことが分かる。これが成立することによってキエフの軍事的優位が増すことを恐れたウラジーミルは、弱い環であるポロツクを最初に攻め滅ぼそうとしたのだろう。

415) この、ウラジーミルによるポロツク公女の略奪婚にかかわるエピソードについては、『ラヴレンチイ年代記』の1128年の記事に「昔のことを知っている人たちが伝えた話」(яко сказа́ша вѣду́щие пре́же)として記事が載せられている。それによると、ウラジーミルはまだ子供だった(дѣтску́ су́щю)とき、ドブリニャが求婚の使節を遣り、ログネダの拒絶の言葉(これは同じ)に「ドブリニャが[ウラジーミルを]哀れに思い、激しく憤った」とドブリニャの主導性が強調されている。続いてウラジーミルとドブリニャがポロツクを占領して、ログヴォロドを殺害し(その二人の息子についての言及はない)、ログネダを妻にし、かの女はその悲運から「悲しみの」ゴリスラヴァ(Горислава)と呼ばれたことが詳しく書かれている[ПСРЛ Т. I: Стб. 229-301][スズダリ年代記 2000: 33-36 頁]。

416) この「軍司令官」と с воеводою は *Км.* のみにある固有の読み。

417) 「ブルード」については上注 389 を参照。

418) ドロゴジチ(Дорогожичи)はキエフ郊外の歴史的な地名で、現在の都市の中心広場から北北西へ3～4kmほどの、現在のキリロフスキ修道院(Кирилівський монастир)の周辺を指している。

419) 「カピチ」(Капич)はキエフの地名としてはこの箇所のみと言及で詳しい所在地については不明。異教神の「礼拝所」を意味する капище から解釈する説もあり、ウクライナ語訳の地名索引では、下町(ポドル)の北に広がるオボロニ地区のヴォロス神の「礼拝所」があった場所で、現在のオボロンスカ通り(Оболонська вулиця)の北端あたりに比定している[Літопис руський, 1989: С. 534, 538]。他方、地名語源辞典では、現在のルキヤノフ市場(Лук'янівський ринок)周辺に比定しており、その場合ドロゴジチ(前注)から2.5kmくらいキエフの中心部への南方向に進んだ場所になる[Етимологічний словник 1985: С. 67]。その間に壕(ров)を掘ったのは、ウラジーミルの軍勢が城内へ突撃するための軍事拠点にするためだろう[Каргер 1958: С. 12-13]。

420) この「今日に至るまで」(до сего́ дни)の「今日」は、上注 397 と同様に *ДКС* が成立した 1039 年頃の時点と考えるべきだろう。

「わたしの味方になれ。もし、わしが自分の兄を殺したら、そなたを自分の父にあたる者として⁴²¹⁾親愛を持つことにしよう⁴²²⁾。そうすればそなたは、わしから多くの名誉を受けるだろう。兄弟たちを攻撃し始めたのはわしではなく、かれ〔ヤロポルク〕である。わしはそれを恐れて、かれを攻めに來たのである」。ブルードは、ウラジーミル [06] が派遣した者〔使者〕たちに言った。「わたしはあなたが気に入る、恭順を表したいと思います」。

【人間の欺瞞についての訓話】 [№ 70]

ああ、人間の邪悪な欺瞞よ。ダビデが言っているように、「わたしのパンを食べた者がわたしに対して欺いた⁴²³⁾」のである。この者は自分の公を偽りによって欺いたのである。更にまた〔ダビデは言っている〕。「〔かれらは〕自分の舌によって欺いた⁴²⁴⁾。神よ、かれらを裁いて下さい。かれらは自らのたくらみゆえに倒れるように。かれらの多くの不正ゆえに追い出して下さい。あなたに怒りを向けたのですから、主よ⁴²⁵⁾」。さらに、同じくダビデは〔言っている〕「血を流し、人を欺く者は自分の一生の半ばを全うしないであろう⁴²⁶⁾」。これは流血を企む邪悪な謀り事である。

自分の公や主人から名誉すなわち贈物を受けながら、自分の公の生命を奪うことを企む者は、

421) 「父にあたる者とする」(имѣти кого въ отца мѣсто) の定型句は、11～12 世紀以降の年代記の中では、公一族の「兄弟たち」や「伯叔父たち」の間の抗争において、いわゆる年長制序列(старшинство)における相手の優位性を確認する儀礼的な言葉として頻繁にあらわれる。ただし、ここではウラジーミルとブルードの間に血縁関係はなく、序列を確認する必要もないところで使われており、特異な用例である。ラヴレンチェンコはアイスランド・サガからの類似の用例を紹介しており、スカンジナビアの伝統にのっとった用法という可能性もある [Лавренченко 2016: С. 63–64]。おそらく、ブルードはスヴァトスラフ [03] に仕えた軍司令官であり、ヤロポルク [04] は「父の軍司令官」(上注 374 参照) としてかれを重用していたのだろう。ウラジーミルはかれを調略する際に、そのような年長の軍司令官に対する信頼関係を自分も引き継ぐこと(「父にあたる者とする」)と物質的な利得(「名誉を受けるだろう」)を約束したということではないか。

422) *НІ-М* 全写本は любити тя だが、*ПВЛ*; *Ин. Лвр.* および *НСГ* は имѣти тя になっている。前注に示した理由で、*НІ-М* の読みは明らかに二次的な改変によるものである。

423) 原文 ядыи хлѣбъ мои възвеличилъ естъ на мя лєсть で、旧約『詩篇』40:10(邦訳 41:10)からの引用。「(わたしの信頼していた仲間) わたしのパンを食べる者が、威張ってわたしを足げにします」(新共同訳)。(ядый хлѣбы моѧ, возвеличи на мѧ запинаніе, [現行教会スラブ語訳])。引用者は下線部分の「足げにする」(запинание)を意図的に「欺いた」(лєсть)に代えた可能性がある。

424) 底本 (*Км.*) では своими лєстяху だが、聖書出典(次注)に合わせて *Ак., Бр.* の языком своим лєстяху の読みを採用した。

425) 旧約『詩篇』5:10-11 からの引用。「其の舌にて媚び諂う。神や彼等の罪を定め、彼等に其の謀を以て自ら敗れしめ、彼等が不虔の甚だしきに依りてこれを遂い給え。彼等爾に逆らえばなり」(ハリストス教会訳聖詠経)、лѣзѣи своими лѣщаху. Судѣи имѣ, бжѣ, да ѿпадуть ѿ мыслей своихъ: по множеству нечестїа ихъ изрѣни ѧ, якъ превгорчиша тѣ, гди. (現行教会スラブ語訳)。

426) 原文 мужъ крови и лєсти не приполовятъ днии своих 旧約『詩篇』54:24(邦訳 55:24)からの文字通りの引用。「欺く者、流血の罪を犯す者を。彼らが人生の半ばにも達しませんように」(新共同訳) мужіе кровей и лєсти не преполовѣтъ дній своихъ. (現行教会スラブ語訳)。

悪鬼どもよりもたちが悪い。このようにブルードは自分の公を裏切った。かれから多くの名誉を受けていながら。この「流された」血に対してかれ「ブルード」には罪があるのだから。

【ブルードの裏切りによりヤロボルクはキエフでウラジーミルの手で謀殺される】[No. 71]

このブルードはヤロボルク [04] とともに「キエフに」立てこもって、ウラジーミル [06] にしばしば使者を遣って、城市に向けて攻撃を仕掛けるようかれ「ウラジーミル」に命じた。〔ブルード〕自身はヤロボルク [04] を殺そうと考えたが、城市民がいたのでかれを殺せなかった。

ブルードは、かれ「ヤロボルク」をどうしても殺すことができず、偽りを企んでかれに城市「キエフ」から出撃して戦わないようにと進言した。ブルードは、ヤロボルク [04] に次のような嘘を言ったのである。「キエフ人がウラジーミル [06] に使者を出して、こう言っています [127] 〈城市へ攻めて来なさい。われらはあなたにヤロボルク [04] を引き渡しますから〉。城市から逃げなさい」。

ヤロボルク [04] はかれの言うことを聞き、かれ「ウラジーミル」を前にして逃げ出して、川⁴²⁷⁾の河口にあるロドニヤ⁴²⁸⁾ (Родня) の城市に立て籠もった。一方、ウラジーミルは、キエフに入城した。ヤロボルク [04] はロドニヤで包囲された。そこで激しい飢えが起った。今日に至るまで⁴²⁹⁾「ロドニヤのような災い」(бѣда аки в Роднѣ)という譬えがある。

ブルードはヤロボルク [04] に言った。「あなたの弟にどれほど〔多くの〕軍兵があるか分かるでしょう。われらはこれに打ち勝つすべがありません。自分の弟と和を結びなさい」。〔こうして〕かれ「ヤロボルク」を欺いたのである。ヤロボルク [04] は、「そうしよう」と言った。

ブルードは、ウラジーミル [06] に使者を遣ってこう言った。「あなたの企みが実現しました。わたしはヤロボルク [04] をあなたのもとに連れて行きます。かれを殺す準備をしなさい」。ウラジーミル [06] はこれを聞くと、すでに話した父の高樓屋敷⁴³⁰⁾ (дворъ теремной) にさらに入り、自分の軍兵と従士たちとともにそこにいた。

ブルードはヤロボルクに言った。「自分の弟のもとに行き、かれにこう言いなさい。〈何がわたしに与えられようと、わたしはそれを受け入れよう〉と」。そこで、ヤロボルク [04] は出か

427) この川はドニエプル川右岸支流「ローシ川」(Рось)を指しており、伝統的にキエフの支配領と遊牧民の支配地(поле)との境界になっていた。ロドニヤ(次注)からローシ川を渡った南側はベチェネグ人の支配地だった。

428) 「ロドニヤ」(Родня)はローシ川河口近くに築かれた城砦だが、13世紀のバトゥ軍の到来の際に破壊された。現在はカーネフ(Канев)から南東7kmほどのドニエプル右岸河岸に遺構がある。キエフからだと、ドニエプル川を110kmほど降らなければならない。

429) この до сего дни の表現については、上注420を参照。

430) 「父の高樓屋敷」(теремный дворъ отень)は、上注212のオリガの復讐物語のときに触れられていた高樓屋敷(теремный двор)を指している。これをオリガが息子のスヴァトスラフに引き渡したことから「父の」(отень)の形容が付されているのではないか。

け〔ようとした〕た。ヴァリャジコ⁴³¹⁾ (Варяжько) はかれ〔ヤロ波尔ク〕に言った。「公よ、行っ
てはいけません。あなたは殺されるでしょう。ペチェネグ人のところに逃げて⁴³²⁾、軍兵を連れ
て来なさい」。〔ヤロ波尔クは〕かれの言うことを聞かなかった。

ヤロ波尔ク [04] はウラジーミル [06] のもとにやって来た。〔高樓屋敷の〕戸口に入ると、二
人のヴァリャグ人が、かれの胸元に剣を突き付けた。ブルードは扉を閉めて、同行の者たち
がかれに続いて行くのを許さなかった。こうしてヤロ波尔ク [04] は殺された。

ヴァリャジコはヤロ波尔ク [04] が殺されたのを見て、屋敷から逃げ出してペチェネグ人のも
とに行った。かれ〔ヴァリャジコ〕はペチェネグ人とともに、ウラジーミルを攻めて激しく戦っ
た。そこで〔ウラジーミルは〕かれに対して誓約をして、やっとのことでかれを呼び寄せた⁴³³⁾。

【ウラジーミルはヤロ波尔クのギリシア人の妻を奪う。スヴァト波尔クについて】 [№ 72]

ウラジーミル [06] は、兄〔ヤロ波尔ク〕の妻のギリシア人を強奪したが、かの女は身ごもっ
ており、かの女から生れたのがスヴァト波尔ク [07] だった。罪の根からは邪悪な果実が生じ
るものである。なぜなら、〔第一に〕かれの母は修道尼だったからであり、第二にはウラジー
ミル [06] が、かの女を結婚によらずに強奪したからである。かれ〔スヴァト波尔ク〕が姦通
の子だったために、父はかれを愛していなかった。かれが、ヤロ波尔ク [04] とウラジーミル [06]
という二人の父によって〔生まれた子〕だったからである。

【ヴァリャグ人傭兵とウラジーミルとの間の確執】 [№ 73]

この後ヴァリャグ人たち⁴³⁴⁾ がウラジーミル [06] に言った。「見よ、これ〔キエフ〕はわれ
らの城市である。われらがこれを占領したのだ。だから一人について2グリヴナずつの身代

431) 「ヴァリャジコ」(Варяжько) は、その名から推測してヴァリャグ人出身者だろう。ヤロ波尔ク
のキエフ行きに同行した一人であり、亡命後ペチェネグ人傭兵の指揮をとったことから、高位の貴族
(боярин) もしくは軍司令官(воевода) だったと考えられる。

432) ルーシ公が早瀬の通行の確保や支配下の領地の安全のために、常にペチェネグ人と交渉を行い、貢物
を与えることで和を結んでいたことについては上注 379 を参照。ヤロ波尔クはキエフの公座に就いたの
ち、基本的にはペチェネグ人と和を保っていたと考えられ、危急のときには、ウラジーミルがヴァリャ
グ人に助けを求めたように、ペチェネグ人傭兵の援軍を求めることもできたのである。

433) ここで「かれ〔ヴァリャジコ〕に誓約して」(заходивъ ему рогѣ) とは、ウラジーミルとヴァリャ
ジコが和を結び（おそらく後者の帰順を好条件で受け入れるという内容の）、その順守を誓う誓約の儀
式をウラジーミルが行ったということ。諸状況から判断して、ウラジーミルが建てたとする主神ペルー
ン像（下注 446）の下で儀式は行われたのではないか。

434) この「ヴァリャグ人」(варязи) はウラジーミルが「海の向こう」から徴募して連れてきた傭兵た
ちを指している（上注 400 [№ 65] 参照）。

金⁴³⁵⁾ (окупъ) をかれら〔キエフ人〕に課そうと思う。〔128〕ウラジーミル [06] はかれらに言った。お前たちのために、クナ⁴³⁶⁾ (куна) を集めるためにひと月待て。かれらはひと月待ったが、〔ウラジーミル [06] は〕かれらに与えなかった⁴³⁷⁾。

そこでヴァリャグ人が言った。「あなたはわれらを欺いた。われらをギリシア人のもとに行かせてくれ」。かれ〔ウラジーミル〕はかれらに言った。「行くがよい」。かれ〔ウラジーミル〕はかれらの中から、最良の勇敢で賢明な⁴³⁸⁾ 男たちを選び出し、かれらに諸城市を分け与えた⁴³⁹⁾。他の者たちはギリシア人のところへ、帝都 (Цесарьский град) に行った。

〔ウラジーミル [06]〕は、かれらに先立って使者を送り、皇帝⁴⁴⁰⁾ にこう言った。「あなたのもとにヴァリャグ人が向かっています。かれらを城市の中にとどめてはなりません。さもないとすればかれらはここで行ったように、あなたに悪行⁴⁴¹⁾ を行うでしょう。だからかれらをばら

435) 「身代金」の окуп は「捕虜買戻し金」の意味で使われる言葉で、自分たちはキエフを占領して、城市民全体を捕虜に獲ったというヴァリャグ人の立場から使われている。当時の2グリヴナは銀重量にして116～120gと推定され(上注132参照)、通常徴収する定期的な貢税額(上注100や303のリス毛皮やシチリャグ貨を参照)と比べても城市民一人当たり(от человека)の負担は過大と言わざるを得ない。

436) 「クナ」(куна)は語源的にはテン(貂)(куница)の毛皮を指し、ルーシ人の通商活動における主要交易品であることから、その語が通貨単位として用いられるようになったもの。本来はテン毛皮1枚の価格を意味していたが、通貨としては当時流通していたディルハム銀貨(上注303)に対応する価値を表していた。ここでは、ウラジーミルは「毛皮」を集めたのではなく、キエフの城市民から身代金としてではなく、支配公のための貢税として「金銭」を集めて、そこから傭兵ヴァリャグ人に報酬として支払うことを約束したのだらう。しかし、約束は時間稼ぎのためであり、最初から支払うつもりはなかったと考えられる。

437) このウラジーミルとヴァリャグ人傭兵たちのエピソードは、オリガの復讐物語([№30-32])、かの女のビザンツの使者に対する対応(上注287)、軍司令官プレティチのペチェネグ人に対する言葉([№50])、スヴァトスラフの軍勢増し発言(上注362)などと同様に、ルーシの支配者が狡知や策略によって敵手を欺くことを、英雄的行為として讃えるようなフォークロアの物語伝承を史料としているのだらう。

438) *НІ-М* 全写本で храбры и мудры (勇敢で賢明な)だが、*ПВЛ* と *НСГ* では смыслены и храбры (思慮深く勇敢な)である。*НІ-М* の語句は、ボリャネ人を形容する「賢明で思慮深い男たち」(мужи мудры и смыслены) (上注65)に類似であり、イーゴリ [02] を形容する「勇敢で賢明」(храборъ и мудръ) (上注114)と同じ表現であることから、こちらが本来的な読みだろう。

439) 「諸城市を分け与えた」(раздая... грады)とは、選抜した最良の男たち(мужи) (前注)を配下の「家臣」(мужи)として遇し、「代官」(посадники)として新たに獲得した支配地の城市・城砦に派遣したということ。このときから、かれらはルーシ人と称されるようになる。

440) このエピソードが年紀のとおり980年、もしくはビザンツ史料(次注)にある988年のこととすれば、ビザンツ皇帝はバシレイオス二世ブルガロクトノス(ブルガリア人殺し)(Βασίλειος Β' ὁ Βουλγαροκτόνος) (在位976-1025年)である。

441) ヴァリャグ人がここ〔キエフ〕でおこなった「悪行」(зла)について年代記には説明がない。約束された報酬(身代金)の支払いを待たされるあいだに、かれらはキエフの城市民に対して略奪行為を行ったことは当然考えられる。

ばらに追い散らし、ひとりもここに追い返さないで下さい」⁴⁴²⁾。

【ウラジーミルのキエフ支配。在来神の神像をキエフに建てる】[No. 74]

そしてさらにウラジーミル [06] は、⁴⁴³⁾ 公としてキエフを治め始めた。

丘陵の上の高楼の屋敷の外に⁴⁴⁴⁾ 立てた⁴⁴⁵⁾。木像のペルーン (Перун) で、頭が銀で口髭が黄

442) この [No. 73] のエピソードについて、ラーションは、このウラジーミルによって帝都へ送られたヴァリャグ人たちを、ミカエル・プセルロスの (Μιχαήλ Ψελλός) 『歴史』(Χρονογραφία) 第1章13節にヴァシリオス二世の治世の出来事として書かれている、ヴァルダス・フォカスの反乱(987-989)鎮圧のための、タウロ＝スキタイ人(Ταύροι Σκυθοί), すなわちルーシからのヴァリャグ人の派遣のこととしている[ラーション 2008: 30-33頁]。この6000人の大部隊の援軍は、988年のウラジーミルと皇妹アンナとの結婚にかかわることから [Древняя Русь: Хрестоматия Т. 2: С. 236, прим. 1], 本年代記の年紀(980年)とは内容的に合致しないが、これだけ大規模な軍隊の派遣が同時期の二つの史料に記されていることから、何らかの関連はあるだろう。

443) *ПВЛ* ではここに「ひとりで」(один)の語があるが、*НЛ-М* では削除されてない。

444) *ПВЛ* ではここに「神像を」(кумиры)の語があるが、*НЛ-М* では削除されてない。

445) キエフ公の在来神崇拜については、945年の記事には、イーゴリ [02] がビザンツの使者とともに「ペルーンの立っている丘陵に行った」(приде на холмы, где стояше Перунъ)とあることから、少なくともこの時点で、ペルーン像は公の屋敷の近くに立てられ、一族や側近従士たちによって崇拝されていたことが分かる。ところが、ここではウラジーミルは、ペルーンだけでなく、他に5柱の在来神の神像を「屋敷の外に」(внѣ двора)すなわち城市民が訪れることのできる場所に立てており、そのことから研究者たちは、ウラジーミルによる新しい宗教改革(религиозная реформа)(異教改革 реформа язычества)と捉え、その動機や政治的な意義、宗教の性格について論じられている。

金⁴⁴⁶⁾ [だった]。そしてホルス⁴⁴⁷⁾ (Хоръс) とダジボグ⁴⁴⁸⁾ (Дажьб) とストリボグ⁴⁴⁹⁾ (Стриб), シマ

446) 「ペルーン」(Перун) は、インド・ヨーロッパ語族の神話体系における「雷神」に相当する。その関係で、神像の描写の銀の頭に雲を、黄金の口髭に稲妻のイメージを見ることも可能である [Комментарии 2012: С. 268]。ペルーンは、オレーグ (907 年)、イーゴリ (944 年)、スヴァトスラフ (971 年) がビザンツ皇帝と結んだ協定に、ルーシ側が順守を誓約する神として言及されていることから、ルーシの支配層にとっての最高神であったことは疑いない。

447) 「ホルス」(Хоръс, Хорс, Хърс) は、中世の異教摘発文献、例えば『聖母の地獄巡り』(«Хождении Богородицы по мукам») では、Троян, Велес, Перун とともに「自然の力を神のように崇めている」と非難されている [БЛДР Т. 3: С. 308]。ホルス хъгъсъ の名は、「輝く太陽」を意味するペルシア語 (中世ペルシア語 . xvaršêt, 近世ペルシア語 xuršêt) に近縁であり、さらに『イーゴリ軍記』では изъ Києва дорискаше до Куръ Тмуторокана; Великому Хръсови влькомъ путь прерыскаше ([フセスラフ公は] 狼に変じてキエフを駆け出ると 一番鶏までにティムトラカンに駆け着いた 大いなるホルス神に向かって道を駆け抜けた) [СПИ: №159] には、ホルスは朝陽の神格化と考えられることから、太陽神というのが通説になっている。[Комментарии 2012: С. 305]

448) 「ダジボグ」(Дажьб, Дажб, Дажебог, Дажьбог) は、ПВЛ 第三版 1114 年記事 (『マララス年代記』引用への補筆) に「スヴァログの子である太陽の皇帝、すなわちダジボグは力をもった男だった」(Солнце песарь, сынъ Свароговъ, еже есть Дажьбогъ, бѣ бо мужь силенъ) とあり、スラブ人の中で太陽神と考えられていたことが分かる。『イーゴリ軍記』にも「ダジボグの末裔」(Дажь-Бож внук) という表現で二度あらわれており [СПИ: № 64, 76], 「民衆」「ルーシ人」、その特定の階層など諸説あるが、総じて太陽のもとに生きる民くらの意味と解釈可能である。また、その名称も、Дай Бог (神よ与えよ) からきていると考えられ、太陽の力で大地に収穫を「与える神」と解釈することができる。さらに、前注のホルス神 (Хорс) もまた太陽神であることから、Хорс-Дажьбог と同じ神格のそれぞれ別名と解釈する可能性もある [Комментарии 2012: С. 306]。

449) 「ストリボグ」(НІ-М Стриб, ПВЛ Стрибог) は『イーゴリ軍記』の中で、Се вѣтри, Стрибожи внуци, вѣють сѣморя стрѣлами на храбрыя плъкы Игоревы! (見よ、ストリボグ神の末裔たる風が、矢のごとく海より吹きつける イーゴリ公の勇猛な遠征部隊に向かって) [СПИ: № 48] と、風の神格化として描かれている。語源的に Стрибог は古イラン語の *Stribaya (高くあげられた神) からきているとされ [Фасмер III: С. 777], 風だけでなく自然の災害をもたらす悪神とする解釈もある。これについては、*стри- (切れ) を動詞命令形起源として、前に置かれたダジボグとストリボグを対比して、前者は与える神 (善神)、後者は散らす神 (悪神) とする説もある [Комментарии 2012: С. 307]。

リグル⁴⁵⁰⁾ (Сеимарекл), モコシ⁴⁵¹⁾ (Мокошь) である。それらは神と呼ばれ、生贄が捧げられ、自分の息子や娘を連れてきては、悪鬼どもに生贄を捧げていた⁴⁵²⁾。自分たちの犠牲で大地を汚していた。ルーシの大地とその丘陵は血で汚されたのである⁴⁵³⁾。

だがいとも善き神は罪人たちの死を望まれなかった。その丘陵の上に⁴⁵⁴⁾は聖ヴァシーリイ教会 (церковь святого Василии) が建っている⁴⁵⁵⁾。これについては後で話すことにしよう⁴⁵⁶⁾。

450) 「シマリグル」(Сеимарекл, Сеимарекал, Сенмарекл, Сѣмарьгл, Симарьгл) は、語源的には ラトヴィア語の saims, saimu vīrs (大男) に比定されたり、ペルシア神話の悪魔で世界樹を守るシムグル (Simurg)[Фасмер III: С. 622] に根拠を求める (ヤコブソン説) など諸説ある。そこから、植物の種子や若芽の守護者であり、ひいては天界と地上界を結ぶ存在に比定する説もある (ルイバコフ説)。シマリグルがホルス (上注 447) と並んでイラン系 (ペルシャ語) の名を持つ神であるとなると、10 世紀のキエフにイラン系のサルマチア＝アラン人の遊牧民の出身者が居住しており、かれらの崇拜する神の神像をウラジーミルは取り入れた可能性も考えられる [Комментарии 2012: С. 307–308]。

451) 「モコシ」(Мокошь) は女性形で、ウラジーミルが神像を立てた 6 柱の神の中では唯一の女神。そこから、スラブ人の神話体系における女性原理の担い手、すなわち大地や豊穡の神、さらには母神で、女性の家政の助け手と考えられている。語源的には、スラブ祖語の *mok- (湿った) に求める説が主流であり、大地の生命力とかかわっている。さらには、リトアニア語の makstyt (燃る), mekst (編む) との関係も指摘されている [Фасмер II: С. 640]。民間の異教を摘発する中文献においては、モコシは魔術をよくするギリシアの豊穡の女神ヘカテーと比較されることが多い。キリスト教が浸透すると、聖パラスケヴァ＝ピャトニツァ (св. Параскева-Пятница) と習合して、女性の守護神として崇拜が続いた [Комментарии 2012: С. 308–309]。

452) 「悪鬼どもに生贄を捧げていた」(жряху бѣсомъ) の表現は「序文」[№ 1] にもあり、「序文」が書かれたときこの表現が使われた可能性もある (上注 21 参照)。

453) 以上のウラジーミルによる在来神の神像の建立については文学的な範例の存在が指摘されている。それは ХГА 第 9 書 10 章の古代のユダヤ人の偶像崇拜についての記述で、その設定が類似しており、例示された異教神が 6 柱であること、まず主神が説明され、女神が 1 柱加わっていること, боги сребренныя и злая, землю оскверниша などの言葉遣いが共通していることがその根拠とされている [Истрин 1920: С.295][Лукин 2011: С. 330–331]。ただし、書き方の範例的モデルとしてビザンツの翻訳年代誌が採られたとしても、具体的な神名などは伝承に基づいて記されており、基本的に事実に対応していると考えべきだろう。

454) 「丘の上に」(На томъ холмѣ) の次に ПВЛ, НКI には「今は」(нынѣ) の語があるが, НI-M にはない。他の箇所における нынѣ の用法 (上注 210, 下注 467) から推察して НI-M が資料とした КНС (1095 年頃編纂) にはこの語はあったが, НI-M 編集の初期の段階で削除されたと考えられるべきではないか。削除の理由は、ノヴゴロドにおいてはキエフの地誌にリアリティがなかったためだろう。

455) この生贄を捧げていた丘陵の「聖ヴァシーリイ教会」は、「序文」[№ 1] (上注 22) で言及されていた「石造り」の教会に対応しているかもしれない [Лукин 2011: С. 339]。この箇所の表現の「序文」との対応は上注 452 にも見出すことができる。

456) このウラジーミル自身の守護聖人に奉献された聖ヴァシーリイ教会の建立については、980 年の記事に記されており、これを参照している。

【ウラジーミルはドブリニャをノヴゴロドの代官に据え神像を建てさせる】[№ 75]

われらは元に戻ろう⁴⁵⁷⁾。ウラジーミル [06] が自分の母方の伯叔父ドブリニャをノヴゴロドに〔代官として〕据えた。ドブリニャがノヴゴロドにやって来て、ヴォルホフ川 (рѣка Волхов) のほとりにペルーン⁴⁵⁸⁾ (Перун) の神像を立てた。そして、ノヴゴロドの人々は神に対するようにそれに生贄を捧げた。

【ウラジーミルの妻妾とその息子たちについて】[№ 76]

ウラジーミル [06] は女色に打ち負かされていた⁴⁵⁹⁾。かれの妻になった者たちは⁴⁶⁰⁾〔次の通り〕⁴⁶¹⁾。ログネダ,〔ウラジーミルは〕かの女をリュベジ川⁴⁶²⁾ (Лыбедь)〔河畔に〕置いたが、ここは、今はベレドスラヴィノ⁴⁶³⁾ (Передъславино) の村 (селище) である。かの女〔ログネダ〕からは、イジャスラフ (Изяслав)[08], ムスチスラフ (Мьстислав)[18], ヤロスラフ (Ярослав)[13], フセヴォロド (Всеволод)[10] の4人の息子と二人の娘が生まれた。ギリシア人の女からはスヴァトボルク (Святополк)[07]〔が生まれた〕⁴⁶⁴⁾。チェコ人の女からはヴィシスラフ (Вышеслав)[09]〔が生まれた〕。他の〔チェコ人の〕女からはスヴァトスラフ (Святослав)[11] とムスチスラフ (Мьстислав)[12]〔が生まれた〕。ブルガリア人の女からはボリス (Борис)[14] とグレーブ (Глѣб)[15]〔が生まれた〕。

457) この「元」(на преднее)がどこを指しているかについて、シャフマトフは上注 444 の「(神像を立てた)」の箇所であり、それゆえそれ以下の[№ 74]の記述は後代の KHC の編集段階での挿入だと考えている [Шахматов 1908 (2002): С. 109]。

458) この「ペルーン」(Перун)の神名は *НІ-М* 全写本と *Ип. Хлб.* に書かれているが、*Лер. Рдз. Акд.* にはただ「神像」(кумир)とあるだけである。

459) ウラジーミルの女好き (побежден похотью) と以下に述べられている妻妾および子供たちについての記述は、後代の KHC 編者による挿入によるものだろう [Шахматов 1908(2002): С. 107]。妾の数が同じことなどから、明らかにソロモンのエピソードを下敷きにしている (下注 469)。さらに、『歴代誌下』11:18-22 のレハブアム (ソロモンの息子) の妻と妾およびその子供たちについての書き方は、本年代記の記述と非常に似ている。おそらく、キリスト教導入の前と後のウラジーミルの徳性の違いを強調するために作文されたのではないか。

460) 「かれの妻になった者たちは」の原文は быша ему водимыя。водимая は当時の婚姻儀礼に拠って新郎の家に「連れて来られた女」という意味を持っており、正式の妻を指している。そのような儀礼を経ていない наложница (妾) とははっきりと区別されている。

461) 以下に列挙されているウラジーミルの妻 (女) の民族的な出自が示されているところは、ХГА 第4書のソロモンの妻たちについての記述と構造的に同じであり [Истрина 1920: С. 148]、これを参照したことは疑いない [Лукин 2011: С. 328–329]。ただし、妻たちとの間に生まれた息子についてはソロモン王の場合にはなく、この年代記記者における独自の記述である。

462) 「リュベジ川」については上注 325 を参照。

463) 「ベレドスラヴィノ」(Передъславино) は、キエフ城の南の門 (リャツキイ門) から 4km ほど南に進んだリュベジ川河畔にある村。

464) ギリシア人の女とかの女から生まれたスヴァトボルク [07] については [№ 72] を参照。

かれには、[129] ヴィシェゴロド⁴⁶⁵⁾ (Вышегород) に 300 人の妾がおり、ベルゴロド⁴⁶⁶⁾ (Бѣлгород) には 300 人〔の妾〕が、またベレストヴォ村には (на Берестовомъ селищи) 200 人〔の妾〕がいた。ここは、今はベレストヴォ⁴⁶⁷⁾ (Берествое) と呼ばれている。

かれは淫行に満足せず、家臣の妻たちを自分のところに連れて来たり、娘たちを犯したりした⁴⁶⁸⁾。〔ウラジーミルは〕女好き (женолюбѣць) だったからである。〔それは〕あたかも 700 人の妻と 300 人の側妻がいたと言われたソロモンにおけるようだった⁴⁶⁹⁾。〔ソロモンは〕賢明だったが、最後には滅んだ⁴⁷⁰⁾。この者〔ウラジーミル〕は無知 (невѣдѣль) だったが、最後には救いを見出した。

【淫婦と賢婦についてのソロモンの訓話】 [No. 77]

「主は偉大である。その強さは偉大であり、その思慮は無限である⁴⁷¹⁾」。

女の魅力は悪である。ソロモンが女たちについて悔悟して〔こう〕言ったように。「悪い女の言うことを聞くな。かの女の、すなわち淫乱な女の口からは蜜が滴り、一時はあなたの喉を喜ばせるが、後には胆汁よりも苦いものを見出すことになるからである。かの女に身を任せば死んで

465) 「ヴィシェゴロド」(Вышегород) については上注 236 を参照

466) 「ベルゴロド」(Бѣлгород) はキエフから南西へ 23km ほどのイルペニ川右岸に位置する付属城市。現在のピロホロドカ村(Білогородка)近郊に相当する。991 年の記事に「ウラジーミルはベルゴロドの城砦を定礎した」とあり、またウラジーミルがここを好んでいたことが書かれている。ヴィシェゴロドにオリガの居館が置かれていたように、ウラジーミルの居館(離宮)がここにあったのだろう。この 980 年の記事ですでに言及されているのは、城砦建設以前に居館が存在したのではなく、この記事が書かれた「今は」(次注)から見た書き方であることによる。

467) 「ベレストヴォ」(Берествое, Берество) は現在のキエフ洞窟修道院の北隣の崖の上の地名で、ウラジーミル公の居館があった。かれ自身もここで臨終を迎えている。11 世紀末から 12 世紀にかけて救世主(スパスキイ)修道院がここに建立された。なお、この「今は」(нынѣ)の語は *НІ-М, ПВЛ, НКІ* の全写本にあることから、*КНС* の編纂の時点、すなわち 1095 年頃を指すと考えるべきだろう。

468) このウラジーミルの酷薄なまでの「女好き」の様子については、11 世紀初頭のメルゼブルクの主教ティトマル(Thietmar)『年代記』(Chronicon) 第 7 書 72 節に、受洗前のウラジーミルは「大いなる残酷な姦淫者だった」(Erat enim fornicator immensus et crudelis) とあることから [Титмар 2019: С. 166, 369]、ある程度事実を反映している部分もあったのだろう。

469) ソロモン王「女好き」(женолюбие) についての記述は、『列王記上』11:3 に「かれには妻たち、すなわち 700 人の王妃と 300 人の妾がいた」(и быша ему жен начальныхъ семь сот, и подложницъ триста) とある。ただし、本記事の直接の典拠は *ХГА* の第 4 書の царь Соломонъ бѣ женилюбѣць и бяху ему владущѣ 300 и наложницъ, 700 и поятъ жены [Истрина 1920: С. 147–148] であろう。

470) ソロモン王が「最後には滅んだ」(на конѣць погыбе)の文言は、*ХГА* の一節、Кто же Соломона блажанѣ? Но на старость и на конецъ падѣся, погыбе (誰かソロモンよりも幸福だった者がいるのか? だが、かれは老いて最後には墮落して滅びた) [Истрин 1920: С. 152.24] を下敷きになっている [Иванов 2008: С. 29]。

471) 旧約『詩編』146:5 (邦訳 147:5) からの文字通りの引用。「わたしたちの主は大いなる方、御力は強く、英知の御業は数知れない」(新共同訳)。

地獄へ落ちる。かの女はいのちの道に踏み出さず、かの女の淫乱な生活は愚かだからである⁴⁷²⁾」。

ソロモンは淫婦について、また善き女については「こう」言った。「⁴⁷³⁾〔善き女は〕宝石よりも尊い。その夫はかの女を喜ぶ。全生涯にわたって自分の夫を幸福にするからである。そして羊毛と亜麻を手に入れて、自分の手で有益な物を作り出す。〔善き女は〕商いをする船のようである。遠くから自分のために富を集める。そして夜の明けぬうちに起き、家〔の者〕に食物を、女奴隷たちに仕事を与える。かの女はよく考えて財産を買い、自分の両手の働きで畑に植付けをする。自分の胸を固く帯で締め、仕事のために自分の腕を強くし、働くことは良いことだと感じる。かの女の灯は一晩中消えることがない。自分の手を有益なことに向かって上げ、自分の両手を紡錘に向け、自分の両手を貧しい者に差し延べ、果実を貧しい者に与えるのである。かの女の夫は自分の家のことを心配しない。いづどこにしようとも自分の〔家の〕者たちは皆、十分に着せられているから。かの女は自分の夫に2倍の衣服を作り、自分には赤と紫の衣服を〔作る〕。もしも集会場でその土地の長老や住民と同席することがあれば、かの女の夫は常に門のところにいるのが認められるのである。かの女は織物を作って売りに出す。自分の口を思慮深く掟にかなって開き、正しく自分の言葉で話す。〔130〕かの女は堅固で美しく装う。かの女の慈愛がかの女の子どもたちを励まし、豊かにする。かの女の夫はかの女を誉める。賢明な女は祝福されている。かの女は主への畏怖心を誉め讃える。かの女にかの女の口の果実を与えよ。かの女の夫は門のところで誉められるべきである」。

【ウラジーミルはポーランドに遠征して諸城市を占領する】 [№ 78]

6489(981) 年

〔ウラジーミルは〕 リャヒ人⁴⁷⁴⁾ (ляхи) のところへ〔遠征に〕行き、かれらの諸城市、ペレムィ

472) 旧約『箴言』5:3-6からのほぼ正確な引用。

473) ここからこの段落 [№ 77] の最後まででは、旧約『箴言』の末尾にあたる 31:10-31 からのパラフレーズされた引用。シャフマトフはこれを『旧約節録 (パレミヤ)』(паримийник) を典拠とした後代の附加的な挿入と考えている [Шахматов 1098 (2202): С. 124-125]。

474) 「リャヒ人」(ляхи) については *ПВЛ* の序章部分で「ヴォロヒ人(Волохи) がドナウ川のスロヴエネ人(словѣне)〔スラブ人〕を攻撃し、かれらの間に住み、かれらを迫害したので、スロヴエネ人たちのあるものはヴィスワ(Вислѣ)のほとりにやって来て住みつき、リャヒ人(ляховѣ)と呼ばれた。これらのリャヒ人の〔あるものは〕ポリャネ人(поляне)と呼ばれた。他のリャヒ人は、ルーティチ人(лутичи)、別のものはマゾフシャネ人(мазовшане)、また別のものはボモリャネ人(поморяне)と〔呼ばれた〕」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 6] とある。民族としては現在の「ポーランド人」とほぼ対応しており、その歴史的民族名である。

シリ⁴⁷⁵⁾ (Перемышль), チェルヴェン⁴⁷⁶⁾ (Червень) およびその他の諸城市を占領した。それらは⁴⁷⁷⁾ ルーシ人の支配下にある⁴⁷⁸⁾。

【ウラジーミルはヴァティチ人を征服して課税する】 [№ 79]

この年にかれはヴァティチ人をも打ち負かし、かれの父が取立てていたように、かれらに掣ごとに貢税を課した⁴⁷⁹⁾。

【ヴァティチ人の反抗とウラジーミルによる再征服】 [№ 80]

6490(982) 年

ヴァティチ人が戦争を始めた⁴⁸⁰⁾。そこでウラジーミル [06] は、かれらに向かって兵を進め、再びかれらを打ち負かした。

475) 「ペレムィシリ」 (Перемышль) は、ヴィスワ川右岸支流サン川 (Сан) 河畔の城市で、現在の南東ポーランドのウクライナ国境に近い都市プシェミシル Przemyśl に相当する。11 世紀にはガーリチ公国の辺境城市（ガーリチの北西約 180km）として、ルーシ公の支配下に入った。キエフからは 500km ほど離れており、長途の遠征だったに違いない。

476) 「チェルヴェン」 (Червень) のちのヴォルィニ地方の城市でフチヴァ川 (Huczwa, Хучва) (西ブク川左岸支流) の左岸に位置し、現在のポーランドのザモイスキ県 (Zamojskie) チェルムノ村 (Czeremno) に相当する。11 世紀にはヴォルィニのルーシ公が支配し、ウラジミル＝ヴォルィンスキイの付属都市となった（南西に 50km ほど離れている）。このときには、ポーランド人（リャヒ人）の城砦都市だったのだろう。

477) ПВЛ は до сего дне（今でも）の語句があるが、HI-M では削除してない。

478) この記事 [№ 78] は、これまでのルーシ公の遠征記事と異なり、城市の名が示され、現在もルーシ人の支配下にあるとされていて異質である。リャヒ人（ポーランド人）とルーシ人の支配をめぐる争いはウラジーミルの死（1015 年）の後にキエフ公の相続争いにポーランドが介入したことから顕在化し、ПВЛ 1018 年記事によれば、ポーランド王ボレスワフ一世とスヴァトポルク [07] のポーランド軍は西ブグ川河畔のヴォルィニ村で対峙しており、チェルヴェンの地方は支配権争いの渦中にあった。シャフマトフは、1018 年記事にボレスワフ王が「チェルヴェンの諸城市を自分のものとして占領した」とあることから [ПСРЛ Т. 1: Стб. 143–144], それまではルーシ人の支配下にあったことを示すために、この 981 年が後代に挿入されたと考えている [Шахматов 1908 (2002): С. 310]。また、フルシェフスキも、当時クラクフを初めとするこの地方はチェコ人の支配の下にあり、これについての言及がないことから記事の同時代性に疑問を呈し、11 世紀末に作成された記事がここに挿入されたと考えている [Грушевський ІУР-1: С. 488–490]。この問題については [栗生沢 2015 : 327–329 頁] を参照。

479) ウラジーミルの父スヴァトスラフ [03] のヴァティチ人への課税については上注 310 を参照。ヴァティチ人がハザール人に「掣ごとに 1 シチェリヤグずつ」（上注 302, 303）納めていた貢税を、スヴァトスラフはそのまま自分たちルーシ人に支払わせたのである。

480) 「戦争を始めた」 (заратишася) とは、それまでヴァティチ人は「打ち負かされて」 (побѣди), 貢税を支払うことで和議 (мир) を結んだが、それを破り、貢税の支払を拒否して戦争 (рать) の状態に移ったということ。

【ウラジーミルはヤトヴァグ人討伐の遠征を行う】[№ 81]

6491(983) 年

ウラジーミル [06] は、ヤトヴァグ人⁴⁸¹⁾ (ятвягы) を攻めるべく「遠征に」行き、ヤトヴァグ人を打ち負かした。そして、かれらの地 (земля) を占領した。

【ヴァリャーグ人キリスト教徒父子の殉教物語】[№ 82]

そして、「ウラジーミルは」キエフに戻って来ると、自分の家来たちとともに神像に生贄を捧げた⁴⁸²⁾。長老と貴族たちはこう言った。「男と女の子の籤を引きましょう。籤に当たった者を神々「に捧げる」ために斬り殺しましょう」⁴⁸³⁾。

ひとりのヴァリャーグ人がいた。かれの屋敷はウラジーミル [06] の造った聖母教会⁴⁸⁴⁾が(いま) ある所にあった。そのヴァリャーグ人はギリシア人のところから来た者でキリスト教の信

481) 「ヤトヴァグ人」(ятвягы) は言語的にはリトアニア人(リトヴァ)と同じバルト語族に属し、西バルト語族のプルシア語に近い。17世紀までリトアニア、ポーランド、ベラルーシ人に同化して民族としては消滅した。ラテン語史料では sudinoi, suduwite、古プルシア語では sudawa, sudowia と表記される。西ブグ川とネマン川上流の間の一帯に居住していた。かりにウラジーミルが現在のフロドナ(グロドノ)(Горадня)あたりまで行ったとすれば、キエフからは600km近い(ポロツクまでとほぼ同じ距離)長途の遠征ということになる。

482) *HKI* ではこの箇所に「貴族たちとともに勝利〔を祝って〕」(побѣдѣ с бояры)という句が追加されている。これは、『聖人伝抄録(シナクサリ)』(Пролог)の「殉教ヴァリャーグ人伝」(下注491)にある съ бояры кумиром о побѣди の文言[Ромодановская 2005: С. 302]を使って補筆したものである(下注490参照)。

483) この「神像に生贄を捧げる」(творяще требу кумиромъ)や「男と女の子の籤」(жребьи о отрока и дѣвицу)については、文学的範例として、旧約『詩編』105:37-38(邦訳106:37-38)の«и пожрыша сыны своя и дщери своя демном; и пролиша крѣвь неповиннѣну, крѣвь сыновъ своихъ и дщерьрей: яже пожрыша истуканънымъ Хананьскимъ. И убьена бысть землѣ крѣвьми и оскверни ся въ дѣлѣхъ ихъ»(彼らは息子や娘を悪霊に対する生贄とし、無実なものの血を流した。カナンの偶像の生贄となった息子や娘の血は、この地を汚した:新共同訳)に非常に類似している。同時に *XGA* にも«О иудѣянинѣ... жертву сотворилъ еси сынѣми своими и дщери Вельфегору и бѣсомъ, црковь оскверни...»という類似の文言もあり[Истрин 1920: С. 279]、この記述には直接に *XGA* が参照された可能性が大きい[Лукин 2011: С. 334-335]。

ただし、「生贄を捧げ」たことが文学的借用による全くの仮構ではなく、歴史的現実を反映していることについては、例えば11世紀中頃の府主教イラリオンによる『律法と恩寵についての説教』(Слово о законе и благодати Илариона)の中に уже не закалаемъ бѣсомъ другъ друга... И уже не жертвенны крове въкушающе, погыбаемъ... (われらは悪鬼のためにお互いを生贄に捧げるようなことはしません(...))われらは、犠牲の血をすすって滅亡したりしません[БЛДР Т. 1: С. 38]という文言があることから確認できる。この作品はウラジーミルの異教時代から70~80年後に成立(1050年前後)しているが、異教神崇拜についての歴史的記憶をある程度は反映しているのだろう。

484) この「聖母教会」(церковь святыхъ Богородица)は、991年と996年に定礎と献堂の記事がある「十分の一教会」(церковь Десятинная)のこと。ウラジーミル城区の中央にあった。

仰を持っていた。かれには顔と心の美しい息子がいたが、悪魔 (диявол) の妬みによってこの者〔息子〕に籤が当たった。

悪魔はすべての者に対して権力を持っているので我慢することができなかったのである。このことが悪魔にはずっと心の中の茨の刺のようなものだった。呪われた者〔悪魔〕は生贄を捧げさせようとして人々を唆した。かれのところに使者たちがやって来て、「籤がお前の息子に当たった。われらの⁴⁸⁵⁾ 神々が自分のためにかれを望まれたからだ。さあ、われらは神々に生け贄を捧げよう」と言った。ヴァリャーグ人は言った。「それは神々ではない、木ではないか。今日は〔神で〕あっても明日は朽ち果ててしまう⁴⁸⁶⁾ ものだ。神々は食べることも、飲むことも⁴⁸⁷⁾、ものを言うこともないのだ。そうではなく、手で木から作られたものだ。手斧と小刀によって。ところが神は唯一であり、ギリシア人⁴⁸⁸⁾ はその神に仕え、拝礼している。神は天と地、星と太陽と月を創り、人間を〔創って〕⁴⁸⁹⁾ これを地上に住ませた。ところがお前たちの神々は何を作ったと言うのか。[131] 自分自身が作られたモノではないか。わしは自分の息子を悪鬼どもに渡さない」。

かれらは戻って来て人々に物語った。たちまちこの民衆は武器を取り、かれを襲おうとやって来て、かれの周囲の屋敷を取り囲んだ。かれは自分の息子とともに階上の間に立っていた。〔人々は〕かれに言った。「神々に献げるために、お前の息子を引き渡せ」。かれは言った。「もし神々であるならば、わたしの息子を捕えるために〔神々は〕自分のうちの唯一の神を遣わすだろう。お前たちはなぜ要求するのか」。たちまちこの民衆は大声をあげて叫び立て、かれら

485) 「われらの」(наши) は底本 *Км.* と *НКИ* にある読み。その他の *НІ-М* 写本と *ПВЛ* にはない。

486) 「今日は〔神で〕あっても明日は朽ち果ててしまう」(днесь есть а утро изыгнемъ) の句は、例えば『シラ書』(Книга премудрости Иисуса, сына Сирахова)10:12 (邦訳 10:10) にある и царь днесь, а утро умереть. (今日は王であっても、明日は命を奪われる) のような聖書の定型構文を下敷きにしている。

487) 神像が「食べ」(ядят), 「飲む」(пиють) 存在として扱われていた(飲食物の供えや生贄を指しているのだろう) ことについては、989 年のノヴゴロドにおけるペルーン像追放の記事 (*ПВЛ* にはない) に достыти еси пиль и яль (お前〔ペルーン〕は十分に飲んだり食べたりしただろう) という文言があることから分かる。

488) この「ギリシア人」(греци) はビザンツ帝国領のキリスト教徒のことを指している。

489) この「拝礼している。神は天と地、星と太陽と月を創り、人間を〔創って〕」(кланяются, иже створишь небо и землю, и звѣзды, и луну и солнце, и челоуѣка) は、*ХГА* 第 9 書 10 章の и иногда сълнцю и лунѣ и звѣздамъ, яже Богъ на сияние челоуѣкомъ створи, а не покланяние (ときに太陽、月、星に〔拝礼した〕それは神が人間たちを照らすために創ったのであり、拝礼のためではない) の文言と用語や内容が非常に類似しており (上注 453 も参照)、直接の典拠であることが推察される [Лукин 2011: С. 331–332]。

の下から階上の間を切り崩し、かれら二人を殺した⁴⁹⁰⁾。⁴⁹¹⁾

【異教徒を喰す悪魔についての訓話】[№ 83]

その頃人々が無知で異教徒だったからである⁴⁹²⁾。悪魔は間もなくかれの身に破滅が起ろうとしていること⁴⁹³⁾を知らないで、このことを喜んでいた。〔悪魔は〕このようにしてキリスト教徒の民を滅ぼそうと努めていたが、尊い十字架によって他の国々では追い払われていた。呪われた者〔悪魔〕はここ〔ルーシの地〕でこう考えた。「ここがわたしの住み処である。ここでは使徒たちが教えたことも、預言者が預言をしたこともなかったのだから」。かれは、預言者が述べていることを知らなかった。「わたしはわたしの民でない民をわたしの民と呼ぶ⁴⁹⁴⁾」。また使徒たちについては〔こう〕言った。「かれらの声は全地に響き渡り、かれらの言葉は世界の果てまで及んだ⁴⁹⁵⁾」。もしも使徒たちが肉体としてはここにいなかったとしても、かれらの教えはラッパの音のように世界の果てまで教会の中で声をあげているのである。われらはかれらの教えによって刃向かう敵を打ち負かし、足の下に踏みつける。ちょうどこのふたり⁴⁹⁶⁾

490) ここに *ПВЛ* では и не свѣсть никтоже, где положиша я (かれらをどこに葬ったか誰も知らない) の文言があり、*НІ-М* ではこれが削られたと考えられる。また *НКІ* ではこの文言の前にさらに加えて исповѣдающаяся христьяна. и приаства вѣчную жизнь за святу ю вѣру мучена (キリストであることを告解したかれらは。〔かれら二人は〕殉教の聖なる信仰のゆえに永遠の生を受けた) との長い文言がある。これは、『シナクサリ抄録 (プロログ)』(Пролог) の「殉教ヴァリャグ人伝」(次注) にまったく同じ文言があることから [Ромодановская 2005: С. 303], *СВ* 成立のときに編者がここから採って補筆したのだろう (上注 482 参照)。

491) このヴァリャグ人父子殉教物語 [№ 82] には、『プロログ (シナクサリ抄録)』の「殉教ヴァリャグ人伝」(Житие варягов-мучеников) (最古写本は 13 世紀) に類似のテキストがあり、文献学的に影響関係が想定される。典礼書である『プロログ』には 7 月 12 日の記念日 (殉教の日付)、息子の名が Иван であり、父と一緒に帝都からキエフに來たこと、父は「神の人」(человѣкъ Божиин) であることなどが記されている。また『プロログ』の写本伝承過程で、Феодор (Туров, Тудор) などの名が挙げられている [Лукин 2009: С. 75–84]。年代記記事と殉教者伝のテキストの関係は複雑であり、両者に共通の資料があったことが想定される。

492) この「そのころ人々が無知で異教徒だったからである」(и бяху бо тогда челоуѣци невѣгласи и погани) の文言は、Олеѣг [00] についてのコメント (上注 174, [№ 21]) と表現が類似しており、同じ編者による挿入の可能性が大きい。

493) 986 ~ 989 年の記事で叙述されるウラジーミル [06] によるルーシのキリスト教受洗を指している。

494) 新約『ローマ人への手紙』9:25 からの文字通りの引用。この預言者はホセアを指している。

495) 新約『ローマ人への手紙』10:18 からの文字通りの引用。ここで「言った」のは、手紙の書き手の使徒パウロである。

496) ここは、*Км. сия оба Ак. Бр. сия отѣмника, Тр. сия истинника, Ип. сия отъченика, Лер. НКІ си отѣмника Рдз. отечника*, と写本によって著しく異なっている。底本 *Км.* の оба の読みはもとの語が理解困難であったことから簡略的に改変されたものだろう。*Ак. Бр. отѣмника* の м は後の挿入によるもの。*ПВЛ* の読みは総じて教会的な「父」と解釈されておりこちらがより本来的と思われる。リハチョフ訳は「二人の師父たち」としており、邦訳は双数形からだろう「父と子」[ロシア原初年代記 1987] と解釈している。

が〔悪魔を〕踏みつけ、聖なる殉教者たちおよび義人たちとともに天の冠を受けたように。

【ウラジーミルはラディミチ人討伐遠征を行う】[№84]

6492(984) 年

ウラジーミル [06] は、ラディミチ人⁴⁹⁷⁾ (радимичѣ) を攻めるべく兵を進めた。かれ〔ウラジーミル〕のもとには軍司令官ヴォルチイ・フヴォスト⁴⁹⁸⁾ (Волчий Хвост) がおり、ウラジーミル [06] は、自分より先にヴォルチイ・フヴォストを派遣した。〔かれは〕ピシチャナ川⁴⁹⁹⁾ で (на рѣцѣ Пищани) ラディミチ人を迎え撃ち、ヴォルチイ・フヴォストはかれらを打ち負かした。これによってルーシ人はラディミチ人を嘲笑してこう言っている。「ピシチャナ人(пищаньци)は〈狼の尾〉から (вольчий хвоста) 逃げ出す⁵⁰⁰⁾」。

ラディミチ人は、リャヒ人⁵⁰¹⁾ (ляхи) の氏族の出自で、そこ〔ソジ川沿岸一帯〕に移って住みつき、今日に至るまで⁵⁰²⁾ ルーシ人に貢税を支払い、運搬賦役に従事⁵⁰³⁾ している。

497) 「ラディミチ人」(радимичѣ, радимичи) は、ソジ川 (Сож) 中・下流域に居住する東スラブの部族名。その出自については、*ПВЛ* の序章にあたる記事 (*НІ-М* にはない) の中でこう説明されている。「また、ラディミチ人 (радимичи) とヴァティチ人 (вятичи) は、リャヒ人から出ている。〔その由来は〕、リャヒ人の中に二人の兄弟、ラディム (Радим) ともうひとりのヴァトコ (Вятко) がいた。ラディムはソジ川のほとり (на Съжю) やって来て住みつき、〔その氏族は〕ラディミチ人と呼ばれた。またヴァトコは自分の氏族とともにオカ川 (по Оцѣ) に沿って住んだ。この氏族はかれにちなんでヴァティチ人 (вятичи) と呼ばれたのである」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 12] (上注 300 も参照)。

498) ヴォルチイ・フヴォスト (Волчий Хвост) は「狼の尾」の意味で、これは明らかに通称 (прозвище) だが、年代記に登場する公の軍司令官が通称で呼ばれるのは例外的であり、おそらく軍師としての属性をあらわしていると考えられる。狼は『イーゴリ軍記』に見るように超自然的な力の象徴であり、この司令官はスカンジナビアの史料や伝説に登場する、狼や熊など動物に変身する (毛皮をまとう) 戦士ベルセルク (berserk, berserkr) と同様の、呪術的職能を持った人物だった可能性もある。かれは、32年後の1016年の記事でウラジーミルの息子スヴァトボルク [07] 配下の軍司令官として再び言及されていることから、このときはまだ壮年のはじめくらいだったか。

499) 「ピシチャナ川」(Пищана, Пещана, Пещань, Пещаня) はソジ川 (Сож) の右岸の支流で、現在のベラルーシ、マヒリョウ州のスラウハラド (Слаўгарад) (旧名プロボイスク Пропойск) から6kmほどソジ川を下ったところに河口があるピヤスチャンカ川 (Пясчанка) に相当する [Насонов 1951: С. 171]。

500) 「ラディミチ人は狼の姿を見ずとも、尾を見ただけで怖がってすぐに逃げるような臆病者たちだ」という意味合いでの嘲笑だろう。

501) ラディミチ人の伝説的始祖ラディムが「リャヒ人」(ляхи) であったことについては上注 497 を参照。

502) この「今日に至るまで」(до сего дни) の「今日」は上注 397 と同様に、*ДКС* が成立した1039年頃と考えるべきだろう。

503) 「運搬賦役に従事」(повозъ везут) とは、貢税品の運搬や遠征の際の輻重の輸送のために、馬や荷車および労働を提供する賦役義務のこと [Горский 2018: С. 254]。

年代記関係略号

現存する年代記

ПВЛ —『原初年代記』(Повесть временных лет)

Н1 —『ノヴゴロド第一年代記』(Новгородская первая летопись)

Н1-М —『ノヴゴロド第一年代記(新編集版)』(Новгородская первая летопись, младший извод)

Н1-С —『ノヴゴロド第一年代記(古編集版; 古輯)』(Новгородская первая летопись, старший извод)

НК —『ノヴゴロド・カラムジン年代記』(Новгородская Карамзинская летопись) 前半部(*НК1*)と後半部(*НК2*)がある。

Н4 —『ノヴゴロド第四年代記』(Новгородская четвертая летопись)

С1 —『ソフィア第一年代記』(Софийская первая летопись)

Твр —『トヴェーリ年代記』(Тверской сборник)

НСГ —『ノヴゴロド・ソフィア系列諸年代記』(Новгородско-Софийская группа) [*НС-1448* を主要な資料として編集された一連の年代記(*НК*, *Н4*, *С1*)の総称]

ЛЕР —『ギリシア・ローマ年代記』(Летописец Еллинский и Римский) [ЛЕР 1999]

現存しない仮説的年代記

КНС —「キエフ原初集成」(「原初集成」)(Киевский начальный свод; Начальный свод) [1093-1095年にキエフで成立したとされる仮説的年代記集成 [Шахматов]。 *ПВЛ* と *Н1-М* の最初期の年代記記事の資料となったと推定されている]

ДКС —「キエフ最古集成 1039 年」(Древнейший Киевский свод 1039 г. в редакции 1073 г.) [*ПВЛ* テキストの最古層にあると想定される仮説的年代記集成 [Шахматов]]

НС1448 —「1448 年ノヴゴロド集成」(Новгородский свод 1448 г.) [1448 年に *СВ* や *ПВЛ*, モスクワ・スーズダリ史料などを資料としてノヴゴロドで編集され、のちの *НСГ* に反映している仮説的年代記集成 [Шахматов]]

СВ —「ソフィア・ヴレメンник」(Софийский временник) [*НВС* の書き継ぎ写本の中で、*НС1448* の資料(その後 *НСГ* に反映)となったと想定される仮説的年代記集成。シャフマトフは 1421 年の成立説 [Шахматов], 1432 年頃にミハイル・マトヴェエフによるという説もある]

ДНС —「ノヴゴロド最古集成」(Древнейший Новгородский свод) [11 世紀中頃にノヴゴロドで成立したとされる仮説的年代記集成 [Гиппиус 1997]]

НКС —「ノヴゴロド公集成」(Новгородский княжеский свод) [1110 年代後半にノヴゴロド公のもとで編集、成立したとされる仮説的年代記集成 [Гиппиус 1997]]

НВС —「ノヴゴロド主教集成」(Новгородский владычный свод) [*НКС* を引き継いでノヴゴロド主教庁において 15 世紀半ばまで書き継がれとされる仮説的年代記集成 [Гиппиус 1997]]

現存する年代記の写本

С —『ノヴゴロド第一年代記(古編集版)』シノド写本(Синодальный список *Н1-С*)

Км —『ノヴゴロド第一年代記(新編集版)』委員会写本(Комиссионный список *Н1-М*)

Ак —『ノヴゴロド第一年代記(新編集版)』アカデミー写本(Академический список *Н1-М*)

Бр —『ノヴゴロド第一年代記(新編集版)』ベルリン写本(Берлинский список *Н1-М*)

Тр —『ノヴゴロド第一年代記(新編集版)』トロイツキイ写本(Троицкий список *Н1-М*)

Тл —『ノヴゴロド第一年代記(新編集版)』トルストイ写本(Толстовский список *Н1-М*)

Ув —『ノヴゴロド第一年代記(新編集版)』ウヴァーロフ写本(Уваровский список *Н1-М*)

- P1.* — 『ノヴゴрод第一年代記（新編集版）』ルミヤンツェフ第一写本 (Румянцевский первый список *Н1-М*)
- Вр.* — 『ノヴゴрод第一年代記（新編集版）』ヴォロンцов写本 (Воронцовский список *Н1-М*)
- P2.* — 『ノヴゴрод第一年代記（新編集版）』ルミヤнツев第二写本 (Румянцевский второй список *Н1-М*)
- Лвр.* — 『原初年代記』ラヴレンチイ写本 (Лаврентьевский список *ПВ.Л*)
- Ип.* — 『原初年代記』イパーチイ写本 (Ипатьевский список *ПВ.Л*)
- Рдз.* — 『原初年代記』ラヂヴィール写本 (Радзивилловский список *ПВ.Л*)
- Хлб.* — 『原初年代記』フレーブニコフ写本 (Хлебниковский список *ПВ.Л*)
- Акд.* — 『原初年代記』アカデミー写本 (Академический список *ПВ.Л*)

参考文献

- Аникин Вып. 1-14 — Аникин А. Е. Русский этимологический словарь. Вып. 1–14. М., 2007–2020.
- БЛДР Т. 1 — Библиотека литературы Древней Руси. СПб., 1997, Т. 1: XI–XII века.
- Бобров 2004 — Бобров А. Г. Древнерусская «мовь» // Труды Отдела древнерусской литературы. СПб., 2004. Т. 56. С. 94–120.
- Вилкул 2003 — Вилкул Татьяна. Новгородская первая летопись и «Начальный свод» // *Paleoslavica*. XI. 2003. С. 5–35.
- Вілкул 2015 — Вілкул Т. Літопис і хронограф. Студії з домонгольського київського літописання. К., 2015.
- Вилкул 2019 — Вилкул Т. Л. Летопись и хронограф. Текстология домонгольского киевского летописания. М., 2019.
- Гимон 2006 — Гимон. Т. В. Редактирование летописей в XIII–XV вв.: разночтения между списками Новгородской 1 летописи // ТОДРЛ. СПб., 2006. Т. 57. С. 112–125.
- Гиппиус 1997 — Гиппиус А. А. К истории сложения текста Новгородской первой летописи // Новгородский исторический сборник. Вып. 6 (16). СПб., 1997. С. 3–72.
- Гиппиус 2001 — Гиппиус А. А., «Рекоша дружина Игоревн... К лингво-текстологической стратификации Начальной летописи» // *Russian Linguistics*, 25, 2, 2001, pp. 147–181.
- Гиппиус 2006 — Гиппиус А. А. Два начала Начальной летописи: К истории композиции Повести временных лет // Вереница литер. К 60-летию В. М. Живова. М., 2006. С. 56–96.
- Гиппиус 2007 — Гиппиус А. А. К проблеме редакций Повести временных лет. I. // *Славяноведение*. 2007. № 5. С. 23–25.
- Гиппиус 2008 — Гиппиус А. А. К проблеме редакций Повести временных лет. II // *Славяноведение*. 2008. № 2. С. 3–24.
- Гиппиус 2008а — Гиппиус А. А. Как обедал Святослав? (Текстологические заметки) // *Древняя Русь: Вопросы медиевистики*. 2008. № 2 (32). С. 47–54.
- Гиппиус 2011 — Гиппиус А. А. «До Александра и Исакия»: к вопросу о происхождении младшего извода Новгородской первой летописи // *Древняя Русь: Вопросы медиевистики*. 2011. № 1 (43). С. 18–30.
- Гиппиус 2011а — Гиппиус А. А., «К хазарской дани» // *Восточная Европа в древности и средневековье*, 23: Ранние государства Европы и Азии: проблемы политогенеза, Москва, 2011, С. 49–55.
- Горский 2019 — Горский А. А. Русское средневековое общество: Историко-терминологический

- справочник. СПб., 2019.
- Гриффин 2020 — Шон Гриффи «Аки деньица предъ слнцмъ»: литургический образ княгини Ольги в Повести временных лет // Древняя Русь. Вопросы медиевистики N1(79). 2020. С. 95–107.
- Грушевський ІУР-1 — Грушевський М. С. Історія України-Руси: Т. 1. до початку ХІ віка. К., 1991.
- Дмитриев 1976 — Дмитриев Л.А. Реминисценция «Слова о полку Игореве» в памятнике новгородской литературы // Культурное наследие Древней Руси: Истоки. Становление. Традиции. М., 1976.
- Древняя Русь — Древняя Русь в средневоековом мире: Энциклопедия /Под общей редакцией Е.А. Мельниковой и В.Я. Петрухина. М., 2015.
- Древняя Русь: Хрестоматия Т. 2 — Древняя Русь в свете зарубежных источников: Хрестоматия. Т. 2: Византийские источники. М., 2010.
- Древняя Русь: Хрестоматия Т. 4 — Древняя Русь в свете зарубежных источников: Хрестоматия. Т. 4: Западноевропейские источники. М., 2010.
- Етимологічний словник 1985 — Етимологічний словник літописних географічних назв Південної Русі / Відп. ред. О.С.Стрижак. К., 1985.
- Иванов 2008 — Иванов С. А. Спасти царя Соломона // Древняя Русь. Вопросы медиевистики. Материалы международной конференции «Повесть временных лет и начальное летописание» (к 100-летию книги А. А. Шахматова «Разыскания о древнейших русских летописных сводах»), Москва, 22—25 октября 2008 г. 2008. № 3. С. 29–30.
- Истрин 1916 — Истрин В. М. «Суд» в летописных сказаниях о походе русских князей на Царьград // ЖМНП. 1916. Т. 12. С.191–198.
- Истрин 1920 — Истрин В.М. Книги временья и образня Георгия Мниха. Хроника Георгия Амартола в древнем славяно-русском переводе. Т. 1: Текст. Пг., 1920
- Истрин 1924 — Истрин В. М. Замечания о начале русского летописания // ИОРЯС. 1924 Вып. XXVII. С. 45–251.
- Каргер 1958 — Каргер М. К. Древний Киев : очерки по истории материальной культуры древнерусского города. Т. 1. М.:Л. 1958 .
- Карпов 2009 — Карпов А. Ю. Княгиня Ольга. М., 2009. (Серия «Жизни замечательных людей»).
- Колесов 1986 — Колесов В. В. Мир человека в слове Древней Руси. Л., 1986
- Колесов 2004 — Колесов В. В. Древняя Русь: наследие в слове. В 5 кн. Кн. 3: Бытие и быт. СПб., 2004.
- Комментарии 1950 — Повесть временных лет. Ч. 2. Приложения / Статьи и коммент. Д.С. Лихачева; Под ред. В.П. Адриановой-Перетц; Ред. изд-ва А.А. Воробьева. М.; Л., 1950. С. 203–484.
- Комментарии 2012 — Повесть временных лет / Пер. с древнерусского Д. С. Лихачева, О. В. Творогова. Коммент. А. Г. Боброва, С. Л. Николаева, А. Ю. Чернова при участии А. М. Введенского и Л. В. Войтовича. СПб., 2012. С. 183–380
- Костомаров 1863 — Костомаров Н. И. Черты народной южнорусской истории // Костомаров Н.И. Исторические монографии и исследования. Том 1, СПб., 1863. С. 57–220.
- Лавренченко 2016 — Лавренченко М. Л. «Отцовство» в древнейших русских летописях // Studia Historica Europae Orientalis. vol. 9. 2016. С. 52–67.
- Левченко 1956 — Левченко М.В. Очерки по истории русско-византийских отношений М., 1956.
- ЛЕР 1999 — Летописец Еллинский и Римский. Т. 1 Текст. СПб., 1999.

- Літопис руський, 1989 — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К., 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)
- Литвина, Успенский 2013 — Литвина А. Ф. , Успенский Ф. Б. Казус с Рогнедой: Сватовство Владимира в свете дохристианской правовой традиции Скандинавии // Древнейшие государства Восточной Европы. 2013. С. 299–325.
- Литвина, Успенский 2018 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Ошибки Рогнеды // Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Похвала щедрости, чаша из черепа, золотая луда... Контуры русско-варяжского культурного взаимодействия М., 2018. С. 126–150.
- Лихачев 1948 (1986) — Лихачев Д. С. «Софийский Временник» и новгородский политический переворот 1136 г. // Лихачев Д. С. Исследования по древнерусской литературе. Л., 1986. (Исторические записки. М., 1948, т. 25, с. 240–265)
- Лихачев 1950 — Лихачев Д. С. Комментарий исторический и географический // Слово о полку Игореве. Под ред. В. Н. Адриановой-Перетц. «Литературные памятники». М.; Л., 1950.
- Лихачева 1997 — Лихачева О. П. Яко бисер в кале // Труды Отдела древнерусской литературы. СПб., 1997. Т. 50. С. 110–112.
- Лукин 2009 — Лукин П. В. Сказание о варягах-мучениках в начальном летописании и Прологе: Текстологический аспект // Древняя Русь. Вопросы медиевистики. 2009. № 4 (38). С. 73–96.
- Лукин 2011 — Лукин П. В. Языческая «реформа» Владимира Святославича в начальном летописании : устная традиция или литературные реминисценции? // Древнейшие государства Вост. Европы. 2013. № 2011. С. 326–352.
- Львов 1975 — Львов А. С. Лексика «Повести временных лет». М., 1975.
- Михеев 2011 — Михеев С. М. Кто писал «Повесть временных лет»? М., 2011.
- Назарерко 1996 — Назаренко А. В. Происхождение древнерусского денежно-весового счета // Древнейшие Государства Восточной Европы 1994, М., 1996. С. 5–77.
- Назаренко 2001 — Назаренко А. В. Древняя Русь на международных путях: Междисциплинарные очерки культурных, торговых, политических связей IX–XII вв. М., 2001.
- Насонов 1951 — Насонов А. Н. Русская земля и образование территории древнерусского государства. М., 1951.
- Новосельцев 1990 — Новосельцев А. П. Хазарское государство и его роль в истории Восточной Европы и Кавказа. М., 1990.
- Петрухин 1998 — Петрухин В. Я. К ранней истории русского летописания: о предисловии к Начальному своду // Агапкина Т. А. (ред.). Слово и культура. Памяти Н. И. Толстого. Т. 2. М., 1998. С. 354–363.
- Петрухин 2000 — Петрухин В. Я. Древняя Русь : Народ. Князь. Религия // Из истории русской культуры. М., 2000. Т. I : (Древняя Русь). С. 13–410.
- Петрухин 2014 — Петрухин В. Я. Русь в IX–X веках. От призвания варягов до выбора веры. 2-е изд., испр. и доп., М., 2014.
- Петрухин, Раевский 2004 — Петрухин В. Я., Раевский Д. С. Очерки истории народов России в древности и раннем средневековье. М., 2004.
- Плетнева 1990 — Плетнева С. А. Половцы. М., 1990.
- Прозоровский 1864 — Прозоровский Д. И. О родстве св. Владимира по матери // Записки Императорской Академии наук, т. V, кн. I. СПб., 1864.
- ПСРЛ Т. 1 — Лаврентьевская летопись. (Полное собрание русских летописей. Том первый). М., 1997.

- ПСРЛ Т. 2 — Ипатьевская летопись. (Полное собрание русских летописей. Том второй.) - 2-е изд. М., 2001.
- ПСРЛ Т. 3 — Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. (Полное собрание русских летописей. Том третий). 3-е изд. М., 2000. (Репринтное издание: Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.; Л., 1950)
- ПСРЛ Т. 5 — Полное собрание русских летописей: Том 5. Издание 2-е. Софийская первая летопись. Л., 1925.
- ПСРЛ Т. 9 — Полное собрание русских летописей: Том 9, Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью. М., 2000.
- ПСРЛ Т. 15 — Полное собрание русских летописей: Т. 15, Рогожский летописец. Тверской сборник. М., 2000.
- ПСРЛ Т. 20 — Полное собрание русских летописей: Т. 20, Львовская летопись. М., 2005.
- ПСРЛ Т. 41 — Полное собрание русских летописей. Т. 41: Летописец Переяславля Суздальского (Летописец русских царей) / Сост. С. Н. Кистерев, Б. М. Клосс, Л. А. Тимошина, И. А. Тихонюк. М., 1995.
- ПСРЛ Т. 42 — Полное собрание русских летописей. Т. 42: Новгородская Карамзинская летопись. Текст подгот. А.Г. Бобровым, З.В. Дмитриевой. СПб., 2002.
- Ромодановская 2005 — Ромодановская В. А. Жития княгини Ольги, Варяжских мучеников и князя Владимира в составе Синайского палимпсеста (РНБ, Q.п.I.63) // Русскаяагиография. Исследования. Публикации. Полемика. СПб., 2005. С. 288–308.
- СДРЯ Т. I - XII — Словарь древнерусского языка (XI–XIV вв.). М., 1988–2012. Т. I–XII.
- СККДР I — Словарь книжников и книжности Древней Руси. Вып. 1. XI – первая половина XIV в. Л., 1987.
- Славянские древности Т. 1-5 — Славянские древности: Этнолингвистический словарь. Т. 1–5. М., 1995–2012.
- Словарь-справочник СПИ Вып. 1-6 — Словарь-справочник «Слова о полку Игореве». Вып. 1–6, Л., 1969–1984. (<http://feb-web.ru/feb/slovoss/ss-abc/>)
- СЛРЯ XI-XVII Вып. 1–30 — Словарь русского языка XI-XVII вв. Вып. 1–30.
- СПИ 1800 — Слово о полку Игореве. Ироическая песнь о походе на половцов удельного князя Новгорода-Северского Игоря Святославича, писанная старинным русским языком в исходе XII столетия с переложением на употребляемое ныне наречие. М., 1800.
- Срезневский 1864 — Срезневский И. И. О Малуше, милостице В. К. Ольги, матери В.К. Владимира // Записки Императорской Академии наук, т. V, кн. I. СПб., 1864. С. 27-33.
- Срезневский Материалы — Срезневский И. И. Материалы для словаря древне-русского языка по письменным памятникам. Т. I-III. дополнения. СПб., 1893–1903. Репринт: Graz, 1971.
- Стефанович 2010 — Стефанович П.С. Загадочное известие летописи: древнейшая дань из Новгорода в Киев // Новгородский исторический сборник. Вып. 12 (22). СПб., 2010. С. 3–33.
- Стефанович 2012 — Стефанович П. С., «Сказание о призвании варягов» или *Origo gentis russorum?* // Древнейшие государства Восточной Европы: Материалы и исследования. 2010 г.:Предпосылки и пути образования Древнерусского государства. М., 2012, С. 513–582.
- Стефанович 2018 — Стефанович П. С. К вопросу о понятии русь в древнейшем летописании // Slovene. 2018. Vol. 7, № 2. С. 356–382.
- Творогов 1974 — Творогов О. В. Повесть временных лет и Хронограф по великому изложению // ТОДРЛ. 1974. Т. 28. С.99–113.

- Творогов 1976 — Творогов О. В. Повесть временных лет и Начальный свод (Текстологический комментарий) // Труды Отдела древнерусской литературы. Л. : Наука. Ленингр. отд-ние, 1976 . Т. 30. С. 3–26.
- Творогов 1997 — Повесть временных лет // Библиотека литературы Древней Руси / Подгот. текста, пер. и комм. О. В. Творогова. Под ред. Д. С. Лихачева, Л. А. Дмитриева, А. А. Алексеева, Н. В. Понярко. СПб., 1997. Т. 1: XI–XII века.
- Титмар 2019 — Титмар Мерзебургски Хроника. 3-е изд., исправ. и дополн. / Пер. с лат. И.В. Дьяконова. М., 2019.
- Тихомиров 1979 — Тихомиров М. Н. Русское летописание. М., 1979.
- Толочко 1983 — Толочко П.П. Древний Киев. К., 1983.
- Успенский Ф. 2002 — Успенский, Ф.Б. Скандинавы. Варяги. Русь: Историко-филологические очерки. М., 2002.
- Фасмер Т. 1–4 — Фасмер, Макс Этимологический словарь русского языка. Том 1–4. М., 1987.
- Цукерман 2009 — Цукерман. К. Наблюдения над сложением древнейших источников летописи // Борисо-Глебский сборник. Collectanea Borisoglebica. Вып. 1. Paris, 2009. С. 183—306.
- Чекова 2013 — Чекова И. Летописная похвала княгине Ольге в Повести временных лет: поэтика и текстологические догадки // Древняя Русь. Вопросы медиевистики. 2013. № 2 (52). С. 103—107.
- Чижевський 1956 — Чижевський Д. І. Історія української літератури (від початків до доби реалізму). Нью-Йорк, 1956.
- Шайкин 2007 — Шайкин А.А. Олег и Игорь в Новгородской первой летописи и «Повести временных лет» // Труды отдела древнерусской литературы. Т. 58. СПб., 2007. С. 607 – 626.
- Шайкин 2011 — Шайкин А. А. Повесть временных лет: история и поэтика. М., 2011.
- Шахматов 1900 (2003) — Шахматов А. А. Начальный Киевский летописный свод и его источники // ШахматовА. А. История русского летописания. Т. I: Повесть временных лет и древнейшие русские летописные своды. Кн. 2: Раннее русское летописание XI—XII вв. СПб., 2003. С. 175–184. (А. А. Шахматов. Юбилейный сборник в честь Всеволода Федоровича Миллера, изданный его учениками и почитателями. М., 1900. С. 1–9)
- Шахматов 1908 — Шахматов А. А. Мстислав Лютый в русской поэзии // Отиск из Сборника Харьковского Историко-филологического общества, изданный в честь профессора Н. Ф. Сумцова, т. XVIII. Харьков, 1908.
- Шахматов 1908 (2002) — Шахматов А. А. История русского летописания. Т. I: Повесть временных лет и древнейшие русские летописные своды. Кн. 1: Разыскания о древнейших русских летописных сводах. СПб., 2002. (текст "Разысканий о древнейших русских летописных сводах" публикуется по изданию 1908 г.)
- Шахматов 1909 (2003) — Шахматов А. А. Предисловие к Начальному Киевскому своду и Несторова летопись // ШахматовА. А. История русского летописания. Т. I: Повесть временных лет и древнейшие русские летописные своды. Кн. 2: Раннее русское летописание XI—XII вв. СПб., 2003.
- Шахматов 1947 (2003) — Шахматов А. А. Киевский Начальный свод 1095 // Шахматов А. А. История русского летописания. Т. I: Повесть временных лет и древнейшие русские летописные своды. Кн. 2: Раннее русское летописание XI—XII вв. СПб., 2003. С. 428—464 (А. А. Шахматов. 1864–1920. Сборник статей и материалов. М.; Л., 1947. С. 117—160).
- Шахматов 1916 (2003) — Шахматов А. А. Повесть временных лет. Приложения. Начальные статьи «Начального свода» // Шахматов А. А. История русского летописания. Т. I: Повесть

- временных лет и древнейшие русские летописные своды. Кн. 2: Раннее русское летописание XI—XII вв. СПб., 2003. С. 937–950 (А. А. Шахматов. Поветь временных лет. Т. 1. Вводная часть. Текст. Примечания. Пг., 1916).
- Шахматов 1938 (2011) — Шахматов А. А. История русского летописания. Т. II: Обзорение летописей и летописных сводов XI–XVI вв. СПб., 2011. (А. А. Шахматов. Обзорение летописей и летописных сводов XI–XVI вв. М.; Л., 1938).
- Щавелев 2020 — Щавелев А. С. Реконструкции и интерпретация рассказа «Древнейшего сказания» (начало — середина XI в.) о походе князя Святослава Игоревича на вятичей и хазар // Вестник Пермского университета: История. Вып. 1 (48), 2020. С. 122–129.
- Щавелева 2004 — Щавелева Н. И. Древняя Русь в «Польской истории» Яна Длугоша (книги I–VI): Текст, перевод, комментарий. М., 2004.
- Якобсон 1953 (1987) — Основа сравнительного славянского литературоведения // Якобсон, Роман. Работы по поэтке. М., 1987. С. 23–79. (The Kernel of Comparative Slavic Literature [first publication in 1953] // Roman Jakobson . Selected Writings, VI: Early Slavic Paths and Crossroads. Mouton Publishers, Berlin-New York-Amsterdam, 1985, p. 1–64).
- Якобсон 1976 — Якобсон Р. О. Русские отголоски древнечешского памятника о Людмиле // Культурное наследие Древней Руси. М., 1976. С. 46–50. (Roman Jakobson . Selected Writings, VI: Early Slavic Paths and Crossroads. Mouton Publishers, Berlin-New York-Amsterdam, 1985, p. 815–819).
- DAI — Constantine Porphyrogenitus, De administrando imperio, ed. by Gy. Moravcsik, trans. by R. J. H. Jenkins, rev. ed., Washington, D.C. 1967.
- ODB — The Oxford Dictionary of Byzantium vol. 1-3, ed. by Alexander Kazhdan, New York Oxford: Oxford University Press 1991.
- PVL 2003 — The Pověst' vremennykh lět. An Interlinear Collation and Paradosis. Edited by Donald Ostrowski Vol. 1–3, Harvard Library of Early Ukrainian Literature, Volume X 1–3, 2003.
- Russian Primary chronicle 1953 — Samuel Hazzard Cross, Olgerd Sherbowitz-Wetzor, eds. The Russian Primary chronicle: Laurentian text. The Mediaeval Academy of America, Cambridge, Massachusetts, 1953.
- Tschizewskij 1968 — Tschizewskij, Dmitrij, *Abriss der altrussischen Literatur (Forum Slavicum 9)*. München, 1968.
- 栗生沢 2015 — 栗生沢猛夫『〈ロシア原初年代記〉を読む』, 成文社, 2015 年。
- 國本 1976 — 國本哲男『ロシア国家の起源』, ミネルヴァ書房, 1976 年。
- スズダリ年代記 2000 — スズダリ年代記 訳注『古代ロシア研究』20 号, 2000 年
- 田中 1995 — 「キエフ国家の形成」(田中陽兒), 田中陽兒, 倉持俊一, 和田春樹編『世界歴史大系 ロシア史 1—9—17 世紀』山川出版社, 1995 年, 59-92 頁。
- 帝国統治論 2017 — 居阪僚子, 村田光司, 仲田公輔「コンスタンティノス 7 世ポルフュロゲネトス『帝国統治論』第 9 章: 研究動向と訳註」『史苑』77-2 (2017 年), 228-199 頁。
- 根津 2020 — 根津由喜夫『聖デメトリオスは我らとともにあり: 中世バルカンにおける「聖性」をめぐる戦い』, 山川出版社, 2020 年
- 森安 1990 — 『民族の世界史 4 中央ユーラシアの世界』山川出版社, 1990 年 (森安達也「ウラルから東ヨーロッパへ」127-174 頁)
- ロシア原初年代記 1987 — 國本哲男他訳『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会, 1987 年。

山口 1965 — 山口巖「コーンスタンツチノス・ポルブイロゲンネートス『帝国統治論』」『古代ロシア研究』第 6 号, 1965 年, 146-163 頁。

山口 1966 — 山口巖「コンスタンチノス・ボルフィロゲンネートス『帝国統治論』(Ⅱ)」『古代ロシア研究』第 7 号, 1966 年, 112-132 頁。

山口 1983 — 山口巖「コンスタンチノス・ボルフィロゲンネートス『帝国統治論』(ⅠⅤ)」『古代ロシア研究』第 15 号, 1983 年, 50-80 頁。

ラーション 2008 — マッツ・G・ラーション著, 荒川明久訳『ヴァリャーギ ビザンツの北欧人親衛隊』国際語学社, 2008 年。

〔後記〕

本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の継続である「『ノヴゴロド第一年代記』講読会」の研究活動の成果である。講読会の参加者は次の通り。宮野裕（岐阜聖徳学園大学教育学部教授）、岡本崇男（神戸市外国語大学名誉教授）、今村栄一（名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院、ウズベキスタンサテライトキャンパス、プロジェクト調整員）、草加千鶴（創価大学非常勤講師）、伊丹聡一郎（明治大学大学院博士後期課程）。

本稿は、2021 年度 JSPS 科研費、基盤研究(C)「キエフ・ルーシ時代の諸年代記の比較対照法による編集過程の研究」(19K00469, 研究代表者:中澤敦夫, 研究分担者:宮野裕, 岡本崇男)の助成を受けて行われた研究に基づいている。

